共産主義の聖典に対する解答

羊は狼に食いつくされない

無神論学習書

文筆家と言われる人ならば、必ず聖典を持っています。

共産主義世界にも聖典があります。それは〝無神論学習書〟と呼ばれる本です。それは、一九六一年、モスクワ科学アカデミー（政治学のための国立出版社）から最初に出版されました。多くの専門家、たとえば歴史学者ペリアエフとペリノワ、哲学者チャニセフ、エルシマ、エメリアなどの論文の集大成です。その最終編集責任者は大学教授のS・コワレフです。それはこれまで何度も版を重ねて出版されました。

無神論教義概要とも言うべきこの本は多くの言語にほん訳され、広く社会主義の国々に配布されました。小学校から大学まで、ラジオでテレビで、映界で、無神論の大会で、この本に書かれている思想が宣伝されました。無神論者が死ぬと、この共産党の聖書の教えにそった葬式の説話がなされ、悲しみの遺族に、死者は永遠に死ぬこと、残された者たちに対する慰めは何もないこと、今離別した者たちは二度と出会うことがないこと、神はいないこと、永遠のいのちのようなものはないことが、確信をもって説かれます。

この本のもともとの目的は、神がいなことを明らかにすることです。

私たちは次の質問をもって非常に簡単に答えることができます。「もし神がいないなら、羊がいるというのはどういうわけでしょうか。」

この質問は、実際、ロシアの無神論の集会でなされたものです。講師が説明して、生命が自然発生的に現れて、自然淘汰によって発達した、そして残酷な生存競争で強くて早い動物だけが生き残ったと答えました。

信者が尋ねました。「それでは羊がおおかみに全部食べられないで生き残ったのはどうしてでしょうか。めすおおかみは一年間に五、六匹の子を生みます。羊は一匹だけです。その比率は五対一で、鋭い歯とつめと強さと早い足をおおかみは持っています。羊はどんなことをして

もかないっこありません。それなのに、どうして今もなお羊がいるのでしょうか。今は人間が羊を守っています。動物世界は人間が現れる前からありました。その頃、だれが羊を守っていたのでしょうか。あなたは、神がいますという仮説に頼ることなしに多くのことを説明することができます。けれども、四つ足を持った羊は神なしには生存できませんでした。教会の初めから残忍な迫害者に対してなんら対抗する力のないキリストの愛する羊ならなおさらです。」

この信者の得た答えはソビエトの刑務所に数年間投げ込まれることでした。

ソビエトの知識人たちのある会合で、シェイクスピア議論されました。だれかが、ダンカン王が眠っている間に彼を殺害したレディ・マクベスの言葉を引用しました。血ぬられた自分の手を見て、彼女を叫びます。「消えよ、呪われたよごれ！消えよと言うのに。」

あるクリスチャンが質問して言いました。「どうしたらレディ・マクベスの罪の重荷を取り去ることができるでしょうか。」ひとりの共産主義者が答えました。「人間は理性的な存在です。最後の瞬間においてさえ、適当な教育とよい助言がなされれば、彼女はばかなことをせずに済んだでしょう」

この答えはなんの助けにもなりませんでした。レディ・マクベスは殺人を犯してしまったのです。それで彼女の受けた教育のことを考えてみたところで、無益でした。もうひとりの共産主義者が言いました。「殺人者を死刑にしなければならないと思う。」この提案も無益でした。なぜなら、死刑の判決を受けても、なお人は罪を自覚する良心が死んだままでいるからです。第三番めの共産主義者が、保留して、将来の幸福な社会主義社会が出来れば、そこには王もなく、満たされるべき自己中心な欲望もなく、罪を犯させるような必要も欲求もない、と言いました。けれども、共産主義社会はどこにも存在しません。

それで、信者が言いました。

「聖書の解決だけが唯一で確実なものです。イエス・キリストの血がすべての罪から私たちをきよめるのです。」

しかし私たちはこの簡単な答えで終わるわけにはいきません。科学アカデミーの会員たちは、宗教一般、とくにキリスト教が間違いであることを証明するために、六〇〇ページ以上の論文を書いています。私たちは彼らが何を言わんとしているかを理解し、彼らの提起した問題点に、一つ一つ答えていかなければなりません。その挑戦を受けることが、礼儀と愛にかなったことです。

無神論者の聖典は全く退屈です。実際、それはそうと相場がきまっています。だれも無神論のために雄弁な人はいません。無神論は否定です。だれが否定について情熱を込めて書くことができましょうか。だれが否定に対して詩を作り、否定に対して歌をささげ、あるいは否定を彫刻することができましょうか。宗教は音楽、絵画彫刻、詩歌に力を与えます。無神論は、その当然の性質から、このような力を及ぼすことができませんでした。

ソビエト共産党は革命以来今日まで60年間宗教抹殺のために主要な努力を傾注していきた。

暗闇はろうそくから発せられる光に勝つことができない。

それ自身の教えによれば、人は塵と影にすぎず、単なる物質です。物質が宗教を滅ぼすための、どんな力を持っているのでしょう。物質は、物質ではない観念が何ものにも束縛されないで存在しているというのに、観念に対して戦いを挑むのに、情熱を動員することができるのでしょうか。

モスクワの聖典は、また、科学アカデミーというにふさわしくないその方法と言葉の暴力を用いています。

私たちは、できるだけえせ科学論議の退屈さを避けるように提案します。私たちは、皮肉や中傷に会っても、愛のやさしさをもって、返答します。

私たちはそのような態度をとることができます。なぜなら、よいかなしきはどんなにハンマーで打たれてもびくともしないからです。パリに、ユゲノーの記念碑があります。そこにかなしきとこわれたたくさんのハンマーが措かれています。碑にいわく。「敵の軍隊、ハンマーは滅びた。されど、神のかなしきは立つ。」

私たちはそのような態度を取ることができます。なぜなら、私たちは自分で自分の考えを厳しくふるい分け、批判を受ける前にそれをよく考えるからです。独裁主義をとる共産主義の国における無神論の害毒と、それは反対の立場です。批判を受けない人が、どうして彼の正しさを知ることができるえしょうか。

西側キリスト教国ではどこでも無神論は全く自由にその宣伝をすることができます。キリスト教はそれを少しも恐れる必要がありません。自由な討論では、必ずキリスト教が勝ちます。厚いカーテンで二つに仕切られている部屋を想像してください。一つは真っ暗闇で、一つはろうそくのともされている部屋だとします。カーテンがとり払われた時、勝つのは暗闇ではありません。暗闇はろうそくから発せられる光に勝ことができません。なぜなら、それは力がないからです。それは光に欠如です。力なる光だけが勝ちます。このように、暗闇であった部屋は見えるようになり、燃えるろうそくによってかえられます。

クリスチャンは共産党の牢獄を恐れません。また、拷問の道具もこわがれません。同様に、私たちを無神論者の本を恐れません。思想闘争において、最後に勝つのは私たちだけです。

無神論の道理

なによりもまず最初に、無神論者は、われわれクリスチャンが彼らの敵ではなく、最良の友であること知るべきです。私たちは無神論者を愛しています。そして愛は理解です。

私たちは無神論者がいることに驚きません。

この二十世紀に、なん百万という無実の人々が炉に投げ入れられて焼かれ、ガスで殺され、あるものは自らクリスチャンであると名乗るそれぞれちがう政治形態の国の強制収容所で殺されたのですから、神が全能で善なるおかたであることが信じがたいのは無理からぬことです。もし彼が全能ならば、どうしてその残虐行為を妨がなかったのでしょう。もし彼が善ならどうして彼はこのような残忍な世界を創ったのでしょう。

キリスト教会の高僧たちが、しばしば、迫害者や搾取者の側に立ち、彼らが暴君にへつらい、一緒になって暴動をおこし、彼らの中には明日の暴君になることを夢みる者さえいたというのでは、だれかが無神論者になっても、私たちは叱ることができません。

イエスが十字架にかけられて、「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか。」と叫ばれたのを見て、十字架は人類の希望である、あるいは、渇いて水が欲しかったのにすっぱいぶどう酒を与えられたおかたが天と地のすべての力を所有しておられるということを理解するのは、だれにとっても困難だったにちがいありません。それがあり得るべき真理であることを宣言するために、復活が行われました。

われわれの時代に、自ら神の子であると称する人たちが、二つの世界戦争でお互いに殺し合いました。キリストの名によって洗礼を受けた人が最初の原子爆弾を投下するようにと命令を下しました。

そして、放蕩むすこが父の家に帰りたいと思っても、彼らはどこにもそれを見出すことができないでいます。そのかわりに、たくさんの異なる教派がわれわれこそ真理にいると互に主張し合っています。彼らはただ一つの点で一致しています。すなわち、今なお鉄格子の中にいる、あるいは、強制収容所で死んだ無実の人たちのために心から愛を実行していないという点においてです。

さらにその上、多くの人の心の中で、宗教は、迷信、蒙昧、あるいは間違った教条と結びついています。

無神論は、ほかの多くの原因と同様にこれらの原因の結果です。私たちとしてはほかに考えることができません。多くの人が無神論者になるというのは当然の結果です。

神は、世界に無神論が存在するのを許されました。聖書によれば神は根本法則と原因結果の果てしない鎖で物質世界を創造されました。神はご自身が存在するよりも他の存在を許す契約を自らなさいました。それ故、無神論の可能性も創造計画に含まれていました。そして、キリストが人類の罪のために御自身の血によってあがないをなすことが決定された時に彼は無神論者の罪をもあがなうことを承認されたのです。

神が無神論の存在を許されるのなら、私たちのだれがそれを禁止することができましょうか。

私たちは無神論を完全に理解します。

しかし、いっぽう、無神論者は彼らの立場から何が間違いであるかを考えねばなりません。この世で恐ろしい苦しみに会っている多くの人々は神によって創られたのであり、心から彼を愛しています。教会に行き、宗教儀式に出席するのは伝統と慣習によるものかもしれません。けれども、時に、神に対する燃える愛がもっとも苦しんでいる人の中にはっきりと見られるのを、無神論者はどのように説明するのでしょうか。信仰のために打たれ、苦しめられ、足かせに五〇ポンドの重い鎖を付けられている人たちの感じる、クリスチャンが言うところの〝主にあるよろこび〟を彼らはどう説明するのでしょうか。

宗教はいくつかの貧しい国々で　栄えています。飢えた人たちが日曜日にお腹をすかした子供をつれて一緒に集まり、神の栄光を賛美します。どうしてですか。あの生活のためにたった〝二枚の銅貨〟しか持っていないやもめたちが、神がもっと大きなことのためにお使いくださるようにと、その全部をよろこんでささげるのはどうしてでしょうか。

無神論者がクリスチャンになす質問は道理にかなっています。もし神が全能なら、どうして地に死が支配するのを許されるのか。どうして私は最愛の人と別れなければならなかったのか、と無神論者は尋ねます。どうして私の子供が苦しむのか、あるいは私の友人が若くて死ぬのか。

しかし、同じように愛する者を失い、あるいは自ら死に直面しているもういっぽうの人が静かに悲しみを受け入れ、よろこんでさえいるという事実を、無神論者はどのように説明するでしょうか。彼らにとって、死は父なる神に帰ることを意味します。

奴隷がむちの下で死に、神の否定や神に対する反逆が通常のことであったピラミッド建造の時代から、一つの詩が私たちに伝えられています。

きょうも死がやって来る。
病める者の癒しのように。
監獄からの解放のように。
きょうも死がやって来る。
没薬のかおりのように。
風の日に雨よけの下に坐るように。

きょうも死がやって来る。
はすの花のかおりのように。
暗闇の淵に坐るように。
きょうも死がやって来る。
通り過ぎる雨のように。
旅から帰る人のように。
きょうも死がやって来る。
晴れ渡る空のように。
何も知らずに鳥を追う人のように。
きょうも死がやって来る。
長い間とらわれの身であった人の
望郷の思いのように。

ある者は静かに死を受け入れ、他の者はよろこんで死にました。彼らは、死は魂のふるさとに帰ることだと考えたのです。

ある植物は光の中で育ちます。しかし、日陰や暗闇でだけ生長する植物もあります。ちょうど、神のために苦しむ度合いに応じて神を愛する人がいるのと同じです。それは、神秘主義者、禁欲主義者殉教者です。彼らは無神論者が不平を言うあらゆる困難を、よろこんで耐えます。信仰をもって、彼らは苦しみから逃れようとしません。反対に、ある人は信仰を深めあるいは、大きな悩みによって強められます。

オスカー・ワイルドは神のことは何も考えませんでした。そして堕落の生活にはいりました。とうとうこの天才は、もっとも堕落した罪にために獄につながれてしまいました。そのような境遇の中で彼は書いています。「もしもこの世が悲しみから出来たのなら、それは愛の手によって作られたのだ。なぜなら、人の魂は、世界は彼のために作られたのだが、その完全な全体像に達することはほかの方法では出来ないからである。」

ドストエフスキーの〝罪と罰〟で、ラスコーリニコフが売春婦のソーニャと議論しています。彼女がこの職業を選んだのは、彼女の父が飲んべいで、彼女の小さな妹や弟たちが飢えていたからでした。苦しい生活からやむを得ずこのようなことをしなければならなかったことで、彼女はとても苦しみました。ラスコーリニコフが彼女に言いました。「神さまにたくさんお祈りしたら。ソーニャ。」彼女は囁くように言いました。「わたしが神さまなしに生きられると思って？」彼はもっと探るように、もう一度たずねた。「でも、神さまはあなたのためにどんなお返しをしてくれるの？」彼女は答えた。「わたしに聞かないで。あなたには分からないんです。……神さまにはどんなことでもできます。」

ラスコーリニコフは、また、彼女の貧乏な、惨めな、幼い妹ポレンカにも聞きました。「あなたはお祈りの言葉を知っているの？」彼女は答えました。「おお、もちろん、わたしたちはみんな知っています。大きくなれば。わたしは自分ひとりでお祈りすることができます。でも、コーリヤとリダはお母さんと一緒にお祈りをするの。あの子たちは、まず、『マリヤさま』と言うの。それから、また、『神さま、祝福してください。ソーニャ姉さんをゆるしてください』と言うの。だって、わたしたちの最初のお父さんはなくなって、今のは二度めのお父さんなんですもの。それから、わたしたちのほかの人のためにもお祈りするわ。」

ソーニャやポレンカのような人たちが神を愛するのはどうしてでしょう。その信仰が薬やアルコールのように苦しみを取り去るからというだけのことでしょうか。しかし、薬やアルコールは人の心を破壊します。彼女の神に対する信仰はソーニャを強くしましたので彼女は殺人鬼ラスコーリニコフを悔い改めに導き、彼を新しい人にしました。それには、彼女の信仰の背後に、何かの真実がなければなりません。

ソーニャはラスコーリニコフに十字架を贈り、彼に聖書を読んであげました。このことが、逃亡殺人者をして警察に自首させ、シベリヤに行かせ、新生活を出発させました。もしも彼女が彼にハンマーと鎌を与え、スターリンの退屈な演説か、あるいはマルクスの〝資本論〟でも読んであげたらどんなことがおこったでしょうか。

ソーニャは売春という悲しみの中にあり、ラスコーリニコフは罪の悲しみに目覚めて、ふたりとも信じたのです。

多くの人たちにとって、宗教は人生の多くの楽しみの一つ、芸術やぜいたくと同じ種類の教養のようです。しかし、宗教をすべてとする人たち、しかが谷川の水を慕い求めるように神を熱望する人たちがいます。このような人たちは神を知ることを要求します。彼らは、神の道が

神秘であり、生きることが彼らにとってひどく困難であっても、神こそ愛すべき、信頼すべきおかたであると言います。

これらの人たちは無神論者の現象を理解しています。しかし、あなたがた無神論者は、彼らを理解することができるでしょうか。

クリスチャンの心は実体のすべてを映すが無神論者の心は一部だけを映す

無神論者の矛盾

社会は非常に急速に変化しています。宗教組織は変化に歩調を合わせませんでした。しばしば、説教家のはなしには、現代人の問題に対してキリストの霊による答えを提供するかわりに、イエスは二千年前の人たちとその当時の問題にかかわっていたという内容のものが見受けられます。それ故、多くの人は、宗教は古くさいという結論に達します。

加えるに、多くの典礼が大時代的です。

それだけでなく、教会は、将来の地獄から人類を救うのがその願いであるといっているのです。それならば、それは、混乱、飢え、悲惨、独裁、搾取、公害、戦争などといった今日の地獄から世界を救う助けとなって、人類に対してその愛をあかしすべきです。

クリスチャンは、無神論者から出されるこられのすべての批判を受け入れます。〝愛はすべてを信じます。〟私たちは、どうして無神論者になるのか、その理由を信じることができます。私たちはヘーゲルと共にこういいます。「存在するすべてに理由がある。」無神論者の態度にさえ深い理由があります。しかし無神論者が信者からの批判を拒むなら損をします。

マイスター・エックハルトのような神秘学者が、神とひとつになった人間は、もはや礼拝すべき神を持たないと教えました。この高い視点から、彼は、神を知らない故に礼拝しない人たちを理解できます。クリスチャンの心は実体のすべてを映しますが、無神論者の心は一部だけを映します。

無神論者は、クリスチャンと共通する唯物主義の哲学を持っています。私たちの宗教の原則的な教えは、神は、キリストによって、肉（すなわち物質）となった、ということです。クリ

スチャンの神は観念ではなく〝人〟です。キリスト教の目的は、魂の救いだけではなく、肉体の朽ちない形のおけるよみがえりです。

しかし、私たちは物質主義にとどまりません。物質主義無神論者は一面的です。彼らは、神や、愛の永遠の霊や、この世を支配している真理について知りません。

ただ一面しかない銅貨などというものがあるでしょうか。あるいはひとつの極しかない電気はあるでしょうか。キリスト教は、物質と同様に霊の領域を包容するのです。無神論は一面的である故に、まちがいです。

ある愚かな人が小麦粉と塩を買いにやらされました。彼は買ったものを入れる皿を持って行きました。彼は、この二つのものをまぜこぜにしないで、分けておくようにと言われました。店の人が小麦粉を皿に入れてくれたあとで、この愚かな人は教えを思い出して、皿を逆さにして、塩を裏がえしの皿の上に入れてくださいと頼みました。それで、小麦粉はなくなりましたが、塩は残りました。彼は親方のところにそれを持って行きました。親方は、「小麦粉はどこだ。」と尋ねました。愚かなものは皿をひっくり返してみました。それで、塩もまたなくなりました。

無神論者は、ときどき、この男と同じようなことをします。彼らは宗教に対して、非常に熱心な有益な批評をします。彼らは塩を持っています。けれども、それで小麦粉をなくしていないでしょうか。彼らは、それもまた正しいかもしれない宗教のために論議を捨ててしまっていないでしょうか。そして、遂には、大きな危機に際して、無神論という塩をも振り落としてしまうのではないでしょうか。真のキリスト教の誇るべきところは、小麦粉と塩の両方を持っているということです。その哲学はソロビエフによって神物主義と名づけられたもので、物質とその造り主、神の両方を考えます。キリスト教はその持っている真理が非常に確かなものなので、この真理についてのあらゆる批判を拒むことなく受け入れます。しかり、かかる批判を、真理の馬によりしっかりまたがるための拍車として歓迎します。

信仰は、絶えず、過ちをしりぞけ、新しい真理が経験されたところから絶えず霊感を受けて息づいています。

むかし、太陽が月と言い争いました。太陽が言いました。「木の葉は緑である。」そこで月はいや、それは銀色だ、と言いました。月は、地上の人間はたいてい眠っていると言いました。そこで太陽は、すべての人間はいつも動きまわっている、と言いました。

その時、風がやって来て、その言い争いを聞き、笑って言いました。「あなたがたの言い争いはばかげている。わたしは、太陽が照っている時も、月が輝いている時も吹いています。太陽が大空にかかっている昼の間は、すべてのものが太陽が言ったとおりになります。地上はにぎやかで、人間は働き、木の葉は緑です。月が昇って夜になると、すべてのものは一変します。人は眠り、しじまが支配し、木の葉の色は銀に変わります。ときに、雲が月を隠す時、それらは黒くも見えます。太陽も月も、どちらも、なにもかも知っています。」

無神論者はものごとの物質的な面を見て、それらがすべての実体を含んでいると信じます。仏教徒は、心が唯一の実体であり、物質世界は、幻想の世界、マーヤに属するものであると信じます。しかし、聖書は、ギリシャ語でも、ヘブル語でも、〝霊〟ということばと〝風〟ということばを同じものとして用いています。それは、多くの方向から、いつも吹いてきます。神の霊を持つ人は、実体のすべてを見ます。彼らは、自らを、物質主義哲学、あるいは観念主義哲学に制限することができません。

実際、聖書は、哲学的なことに注意するようにと私たちに警告しています。なぜなら、たいていの哲学者は、実体を見るのに、個人的な観点を持っているからです。しかし、すべての観点は、盲点です。それは、ほかのすべての点に対して、私たちを無能にするからです。ある観点から見れば、私の著作している部屋にはドアがありません。うしろを振り向きます。そうすると、ドアは見えますが、窓が見えません。上を見ます。この観点からすると、部屋には床がありません。下を見ます。すると天井がありません。特定の観点を避けることによって、私たちは全体を直感することができます。クリスチャンの理想は〝聖く〟なることです。このことばは〝全体〟ということばから来ています。ロシア語で〝聖〟ということばは光り輝くことを意味します。ゲルマン語の用法でも同じようです。聖くなるとは、観点を捨ててしまったことを意味します。

フォイエルバッハは言いました。「神がいないということは、太陽のように明らかで、白日のように明白である。神が存在し得ないということについては、なおさらである」宗教は絶対の明白を主張しません。無神論はそうします。神が存在しないことが〝太陽のように明白〟であるならば、全人類（例外なく）太陽の存在は認めているが、神はいないというフォイエルバッハの主張には全人類が賛成しているわけではないということはどういうことでしょうか。

私の偉大なる好敵手、ダーウィンでさえ、その立場を固く守り通すことができませんでした。彼は書いています。「この大地と、考えるわれわれ自身をも含めた不思議な世界が偶然に

できたという考えの不確実さが、私には、神の存在についての主要な論議のように思われる。」

無神論者にとって、無神論は自明のことです。それならば、明白なことのために、どうして宣伝が必要なのでしょうか。キリスト教は2＋2＝4という事実のようにキリスト教が自明のことであるとは考えません。もしそうならば無神論者はいないでしょう。私たちは、分別をもって、われらの敵手の態度の何かを見ます。そこに、私たちが彼らを理解するための何かの手がかりがあります。無神論は、ただ無神論だけしか持ち合わせません。それは、宗教に対してあらゆる存在権を否定します。それ故、それは分別がありません。

個人主義無政府主義の理論家、マックス・スターナーは、正しく社会悪を見ました。彼の結論は、人間社会を撲滅することでした。しかし、彼はその一部でした。ショーペンハウエルの学校、その問題に対する解答として、人類に自殺をすすめました。しかし、コレラが彼の町を襲った時、彼は逃げました。彼はいのちを愛しました。思想や行ないにおいて大きな欠陥があるからと言って、宗教それ自身を取り除こうとする人たちも同じ範ちゅうにいます。

色が気にいらないからと言って着物を着るのをやめてしまってよいものでしょうか。泥れた風呂の中の無垢な赤ん坊を捨ててしまってよいものでしょうか。

私たちは、無神論において、何が合理的なものであるかを知りました。そのほか、多くのことがあります。さて、それでは、宗教において、何が合理的であるかを、無神論者と一緒に考えてみましょう。私たちは共通の分母に行きあたるかもしれません。

共産主義者は神を否定する

〝無神論学習書〟の著者はだれか。

彼ら自身がこれに答えるべきです。

モスクワに集まった人たちは、人生の最大の問題について、最高の人たちが開びゃく以来深く考えてきた問題、神は存在するかいなか、人生、その希望、および悲しみの意味、宗教の役割、などについて、一冊の本を書きました。

この人たちはだれでしょう。その本の内容よりも、彼らがだれであるかを知ることのほうがもっと重要です。

教えを知るよりも、牧師を知るほうがもっと価値あります。知識は、いつも〝私はだれか〟から発します。もしも、私がこのことに対する答えを知らなければ、どうして、私は、この〝私〟が考えていることが他の人と分け合う価値があることを知るのでしょう。もしも〝私〟が偉大でなければ、それが与えるすべてのものは、小さなものとなります。

モスクワの聖典の著者たちは、彼らがいかなる神によっても造られたものでないと言っています。彼らを形成した物質の無作為な過程中に設計はありませんでした。原子と陽子の回転や衝突が、純粋な真理をかもし出す頭脳を形成することができるでしょうか。

私は貧乏な子供でした。私は音楽を学びたいと思いましたが、私の両親にはそうする余裕がありませんでした。それで、私は、線のはいった紙にでたらめに音符を書きつけました。しかし、それは曲になりませんでした。

もし、ルーレットのゲームで、赤か黒の数が出る二つの可能性があるとして、一列に四十回同じ色に変わる確率は、おそらく、一億回に一度です。二つの可能性だけでこうです。

人間の心という完全なコンピューターが電子と陽子の偶然な結合によって形成されるには、どれほどの確立があるでしょうか。この論文の著者である私は、多くの言語を話します。そして、名詞や動詞の語尾変化まで教えれば、百万語にも及ぶことばを知っています。ほかの教養ある人たちと同様に、私は、数学、地理、科学、芸術などの知識の断片を、自分のものとして、なん百万と持っています。しかも、あらゆる場面で、心は、正確に、正しいことばを、全く正しい発言で、その場面が要求する人格を表すもっともふさわしい態度で、引き出すことができます。全宇宙の機構はさておき、このひとつの現象が、無から始まって、電子の微分子が偶然に結合して形成される確率は、数学的に不可能です。

もしも私が、一世紀に三世を代数えるとして、私の先祖を数えていくとします。―ふたりの両親四人の祖父母、八人の曾祖父母、という具合に―私は、たちまち、私が遺伝の血統を受け継いだ人たちは、なん千、なん百万という数に達します。私は、なん百万という先祖たちが巻き込まれた生存競争の選抜の結果です。私は、彼らについて何を知っているでしょう。何も知りません。彼らから受けた遺伝について、私は何を知っているでしょう。彼らは、私がそれによって考える言語を形成しました。彼らは、私がその中で成長した制度を造りました。私は彼

らを知りません。私は、将来の、無神論、あるいは宗教の教師を形づくるもっとも決定的な時期である私の幼年時代を知りません。

私はとても小さな世界に住んでいます。私たちの地球は、宇宙のごみのひとかけらです。このごみの点である微小な月に到達したことを、私たちは特筆すべき成果であると考えています。私たちの小さな地球上の人間の営みは小さなものです。また、そこに住んでいる人類も小さなものです。私に関して言えば、私は、なん十億の人類の中でも、もっとも無意味なひとりです。

一万人のひとりも、書かれたもっとも偉大なる本の題名を聞いたことがありません。百万人にひとりも、それを読んだことがありません。どれほど多くの人が、〝無神論学習書〟の共同著者であるもっとも尊敬すべきビショップの存在や、ソビエト・アカデミーの館員について知っているでしょうか。

神がいないということがどうして確かめられるのでしょう。

私は記憶喪失になったことがありました。私は〝罪と罰〟の著者がだれであったか思い出せませんでした。私が尋ねた二十番めの人がやっと、それはドストエフスキーだと教えてくれました。

私たちはとても小さな者です。それなのに、宇宙よりも複合宇宙と呼ばれるべきものについて、たくさんのことを知っています。それは、ちょうど、マルクスの本の上を歩いた蟻が、マルクスのことを知っているようなものです。

神は小鳥のさえずりを楽しんでいます。そのうちのどれかが、きょうこの日にわしにつかまえられるとも知らずに、そうしています。私は枝になる風の音を聞いていますが、どの木が虫に食べられているのか、私は知りません。私たちは、名声、権力、金銭、享楽知識を熱望します。同じ欲望を持った、私たちよりも二、三十年前の人たちはすでに土くれです。足の下の土は、かつて、あるいは少女の美しい顔だったかもしれません。

プカリンは、共産主義無神論の最大の理論家のひとりでした。

〝弁証法的唯物主義〟という本で、彼はそれが未来予見の可能性について考えているからと言ってこの哲学を賞賛して書き出しています。このあわれな男は、少しも未来を予見していなかったというのは、彼が自分の仲間たちに拷問され、殺されたということだけでわかります。

本を書くということ、人類の数師なるということは勇気のいることです。人は、未来の読者が経験する喜びと悲しみがどんなであるか、その本が大きな試練に際して助けになるかどうかを知り得るでしょうか。

人は彼の脳を形成している細胞の十億のうち一つでも知っているでしょうか。その小さな乱れが、人に愚かなことを書かせます。このことが、天才たちに起こりました。あなたにはどうですか。あなたは他人の著作に狂気を認めます。あなたのものにはどうですか。あなたは、あなた自身のからだについては何も知りません。あなたは、あなたの深層心理について、何を知っていますか。私は、毎日、自分自身に驚いています。

私たちは、わずかばかりの外辺しか知らない神秘な世界で、神秘な生活を生きています。私たちは私たちの意識の牢獄の中に閉じ込められています。

私たちの視力のスペクトル外に光を当てることのできるものが地上にいるとしたら、私たちの聞いたり理解したりしている以上の波長で、彼らが彼ら自身に連絡を取ることができるとしたら、その時、彼らは私たちを観察することができるが、私たちは、私たちのいのちをウィルスや細菌がむしばんでいることについて何も知らずに最後の日のために生活したように、彼らの存在には全く気がつかずにいることでしょう。天使がいるのに、私たちは全く気がつかずにいるではありませんか。

無神論者は、神はいないと言います。どうしてそれが確かめられるのでしょう。

この論文は刑務所で計画されました。看守がいつも目を光らせて将棋の駒、ナイフ、針、本、紙など、禁止されているものがないかと探していました。彼らはそれらを見つけることができませんでした。私たちは、彼らが去るのを待っていました。そのあと、私たちは隠し場所からそれらを取り出しました。あなたは部屋に何かを探しています。けれどもあなたはそれを見つけることができません。しかし、そうだからと言って、そこにそれがないと言い張ることは正しいでしょうか。神がいなことを確かめるために、無限の宇宙をだれか探したことがありましたか。

そのようなわけで、あなたがた無神論の著者のみなさんは、あなたがたが主張することがまちがいないと考えることができますか。

きのうまで、元素が不変であることは確かなことだと考えられていました。これはなん千年もの経験に基ずく主張でした。しかし、それにもかかわらず、それはまちがいでした。かなり知識の進んだ人たちが、原子を見ることができない、人は月に行くことができないと考えていました。彼らの周囲の人たちの間ではずばぬけた経験の持ち主であったこれらの人たちは、まちがいでした。私の無神論者の友人諸君、あなたが正しかったことがこれまでどれほどありましたか。

クリスチャンの牧師、タータリヤンは、彼の言葉、〝クレード・クイア・イムポッシブル〟（それが不可能の故に信じる）の故にとても軽んじられてきました。そして、現在、科学は、おろかしいとされてきたことや理屈に合わないとされてきたことを真実としています。私たちは知りません。「人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいない。」と、聖書は言っています。（Ⅰコリント八2）

だれが私たちの敵か

もしも、貧しい身なりの人が私に身元を尋ねたら、私はまず、彼がだれであるかを尋ねます。彼は警察の者であることを証明しなければなりません。そうでなければ彼は私に尋問する権利がありません。

私が宇宙のなぞに直面して、スフィンクスに、「あなたはだれか。あなたの中には神は宿っているのか。あなたは人の手によって造られたものか、それとも、永遠から存在していたのか。」と尋ねるとします。その答えはこうでしょう。「小さな人よ、まず、あなたがだれであるかを私に告げよ。あなたは、絶対の神秘があなたの前に開かれなければならないほど価値ある者であるか。もし私があなたにそのことを知らしめるとしても、あなたはそのすべての純粋な真理を、たとえそれがあなた自身の利益に反し、今日まであなたが信じ、大事にしてきたことに逆らうものであっても、なお理解し、受け入れる能力を持っているだろうか。」

〝無神論学習書〟の著者たちは神の存在を否定しています。しかし、彼らは自ら存在しているでしょうか。彼らはだれですか。彼らは自らの存在を証明できますか。

無神論の著者にとって、大胆な問題を出すためには、彼は、彼の出生のなん十億年も前に、銀河や星雲が存在していたことを仮定しなければなりません。星や、天体の機構や、生命が存在できなくなるというようなことにならないように地球の運河を制御する太陽がなければなりません。無神論者が明確に大胆な問題を出すことができるのは、水、草木、動物、微生物、また、電気や、パンを焼きぶどう酒を発酵させる熱などの実体、宇宙線や降雨、また、人格の圧

倒的な存在があればこそです。連綿と続いてきた先祖の列、彼の母の胸に乳、母親の心に愛がなければなりません。

この無神論者の前提を仮定してさえ、予測しがたい現実が、なん十億年もの、不可解な時代を超えて、時と偶然の相関作用を通じて、無神論の講師とクリスチャンの聖徒の両方を造り出しました。なぜですか。彼らはだれですか。なぜ彼らは存在するのですか。実際、彼らはいるのですか。

あなたがたは、地球が、全太陽系と一緒に何かの約束でもあるかのように、ある星座に向かって休むことなく動いているのはなぜかを知っていますが、それと同じように、このことについて多くのことを知っています。彼らは引っ張られているのです。しかし、この宇宙の引力は何でしょう。引力ということばは、ときどき、私たちが情愛について使うものです。だれが愛しているのですか。だれが愛する人ですか。

無神論者は、伝道者がするように、話します。そのわけのわからない声を聞かずに、木の葉、川、風、あらし、小鳥、赤ん坊の声に耳を傾けるのはどうしてでしょうか。それらが、私たちのことばの多くよりも、もっと教訓的であるからかもしれません。

自然と調和して生活している人たちは、信じます。無神論は、構造上と同様、社会上、壁の背後で生活しなければならなかった人たちのゆがめられた心に、都会的な現象として始まりました。

そして、最高の静寂に聞くことについてはどうでしょうか。雪のひとひら、花、しだ、ひとつひとつみごとな色合いの地衣の美しさはどこから来るのでしょうか。原子の中の微分子のみごとな配列はどこから来るのでしょうか。

電子が、その軌道を、十万分の一秒ごとに、なん千万回と回転しているのはどうしてでしょうか。その規則正しい運動をしているものが、私たちに個体として感じられるのです。

あなたは八〇×一〇〇万の二乗の電子の細胞を持った機械のことについて聞いたことがありますか。その部品の一つは、わずか一kg半の重さで、一兆の細胞から出来ており、生産し、受信し、記録し、エネルギーを伝達します。このすばらしい機械はあなたの体です。だれかがあなたに自動車をプレゼントしたら、あなたはどんなによろこぶことでしょう。しかしあなたは、もっとすばらしい機械を贈られたのです。だれからですか。

脳神経に化学変化が起こると、情緒の変化をともなって、ほかの思想が生まれるのは、どうしてでしょうか。人間が有害な炭酸ガスを発散して、それを、愛のことばや、永遠のいのちのメッセージを伝えることばにさえ変えるのはどうしてでしょうか。

あなたが何か悪いことをしようとするとき、見えざる手があたかもあなたをおしとどめようとするかのように思われるのは、どうしてでしょうか。これは、だれの手ですか。たとい、良心の声があなたに悪だくみをやめさせるほどの力がないとしても、のちに、後悔や自責の念となってそれが聞こえてくるのはどうでしてですか。

実体の正体を尋ねるあなたはだれですか。もしも、この正体が、次のように答えたらどうしますか。「おおへいな様子から警察の方とお見受けするが、どうぞ、まず、あなたの身分を明らかにしてください。」あなたは、実際に、実体があなたに向けているたくさんの質問の一つにも、答えることができなかったではありませんか。科学の発展は、私たちが解答しなければならない質問の数の増加に追いつくほど、事実についての知識を増やせませんでした。

あなたは、実体に対して、その最後の神秘について、その意味について、その計画について、創造主の存在について質問します。実体はだれに対して答えるべきですか。そしてどんなことばを使うべきですか。最初の宣教師たちが出かけて行った原始的な部族は、〝愛〟〝信仰〟〝赦し〟〝聖〟〝汽車〟などを意味することばを持っていませんでした。宣教師たちは、彼らのメッセージを伝えるのに、あるいは彼ら自身の国の実体を伝えるのに、不憫な思いをしました。あなたは、最高の実体と交わす共通語を持っていますか。

もう一度聞きますが、この実体はだれに対して語るべきですか。あなたの心理学説によれば、理性は人間の頭脳作用によるものです。象の頭脳は別のものによって構成されています。その作用は本能と呼ばれます。自分のものに、あなたはよりすてきな名前を付けました。しかし、両方の頭脳とも、あなたの主張によれば、進化の結果であり、設計者の手にかかることなしに、永ごうの時を超えて、原子が無作為に集まってできたものです。

あなたは、無神論が真理であると考えます。しかし、無神論に対して〝真理〟という概念を適用する前に、あなたは、〝真理〟とは何を意味するのか、定義しなければなりません。ピラトは「何が真理か。」と質問しました。何をもって真理というのかという基準がない質問にはだれも答えることができません。

懐疑論者は、「真理とは、たゆみなく疑うことである。」あるいは「大多数によって承認された幻想である。」と言っています。しかし、彼らが幻想としてばかにすることは、正しい指

導のもとで、まちがいを是正するかもしれません。錬金術や占星術は、ちょうどこのような実りある過ちとも言うべきもので、化学や天文学の先ぶれとなりました。

あなたがたの真理の定義とはいかなるものでしょうか。

マルクス主義者は、真理は社会階級によって決定されると言うでありましょう。人間が生活する経済条件が、彼の自覚を決定します。

一八五二年十二月七日付のクルスに宛てた手紙で、マルクスは、彼自身の経済状態について書いています。彼は、ズボンも靴もないし、家族は極貧のどん底に落ち込みそうだし、これでは牢舎のほうがましだ、と言っています。私たちは、彼に同情はしますが、しかし、マルクス主義はズボンや靴のことではなくて、人間の心の問題です。今日、自由世界のすべての労働者は、ズボンや靴を、一つだけではなく、いくつも持っています。それで、マルクス主義は私たちに合わないのです。私たちは私たち自身の真理を持たねばなりません。

プロレタリアートの原理と言われるマルクス主義が、真理からプロレタリアートの思想家たちを締め出しているのは興味深いことです。マルクスは、一八七七年十月十九日付のソルジュ宛の手紙で次のように書いています。「労働者が……職業文筆家になると、きまって〝論理的な〟害を生み出す。また、きまって、頭が混乱してしまう……。」過激な学生運動も、また、真理を持つことができません。マルクスは、「ロシアの学生は、それ自体価値のないばかげたことを行っている。」と言っています。あきらかに、マルクスにとって、確実な真理の定義はこれです。「真理とは、ズボンや靴を持たない時に考えることである」何か神秘的な理屈めいていて、ズボンが真理にいたる道をひどくさまたげているように思われます。このようなものは、皆、捨ててしまいましょう。

私たちは、目下流行の定義をもって敵を助けてあげましょう。真理とは、実体の産物であるわれわれの心と、思考の対象（実体）との調和です。しかしながら、このような調和は、あなたがたが実体を正しく理解した確証ではありません。その上、間違いがあるかどうかあなたがたにはどうしてわかるのでしょうか。あなたがたは宗教は間違いであると主張しています。しかし、宗教は、実体と、人間の心との間の調和です。それで、人は、思考方法の正当さについては強く確信することができても、なお、あやまちを犯します。あなたがたが、かかる錯覚の犠牲になっているとしたらどうでしょうか。

ひとりのクリスチャンが無神論者になったと仮定しましょう。その時、彼は、それまで考えていたことが間違えであったと悟るでしょうあ。間違いに気が付いて、彼はあなたがたの思想

を受け入れるでしょう。彼がもう一つの間違った信条に落ち込んだということを、はっきりと知ることができるでしょうか。彼は、彼の思想が、いまや、実体と一致したと、確かに感じるかもしれません。しかし、彼がまだ信者だった時に、彼はこれと同じように信じたのです。実体や非実体を超えた、私たちが真理であるとか間違いであるとかと呼んでいることを超えた、これはこれであると権威をもって私たちに告げてくれる一つの光がなければならないと、あなたがたは思いませんか。無神論者であるという自覚でさえ、この超越的な光を認めることによってのみ、調和をもって存在することができるのです。（なんと人間の思考には調和が少ないことでしょう。）この光を、私たちが宗教において崇拝しているのです。

いと高きお方が、理性の言語であなたがたに話かけなければならないのでしょうか。しかし、どれほど多くの理性を理解できるでしょうか。理性が、奴隷制、絶対君主制、迷信を正当化しました。それが、私たちに独裁を喜んで迎えさせ、世界戦争を正当化し、罪のない人たちを大量に虐殺したのです。メフィストファレスは言います。「どんな動物よりももっと動物的である時だけ、彼はそれを理性と呼び、それを用いる」人はいつも、すべてのことを合理化し、概念化し、知性化しなければなりません。

ゲーテは二〇〇年前、「われらの星は宇宙の心理的建造物である」と言いました。私たちは、天才と真理のひらめきはあるが、あきらかにそれは狂気の微候である民族の理性を持っております。私たちの中の最高の知恵者にとってさえ、理性は、不合理な衝動の中のひとつの調和に過ぎません。

理性は、正しい結果を生み出すために、低級な情念によって汚されなければなりません。

これが私の敵の実情です。彼らの思考において、恐怖がなんの役割も演じていないのでしょうか。非共産主義国において、無神論者が、しばしば宗教に帰ります。今モスクワ科学アカデミー会員のひとりが、賛美両論のすべてを吟味したあとで、ソペトラナ・スターリナ、パステルナーク、シニアウスキー、ソルジェニーツインのように、キリスト教は正しいという結論に達したらどうでしょうか。

人の確信というものは、いろいろな方面で変化します。―その結果は、どうなるのでしょうか。彼は、直ちに、アカデミーの会員権を失い、教授の肩書ははずされ著書を出すことが出来なくなります。彼は、また、ぜいたくな生活をすることができなくなります。モスクワ・アカデミーの会員であるグロムイコ陸軍少将は、ソビエト政府の人たちと、政治、軍事面で、ちがう意見を発表しました。この〝偏向〟のために、彼は、精神病院に送られて苦しめられまし

た。私に敵対する人たちよ。あなたがたは、少しも恐れていないのですか。研究や発表の完全な自由がなければ、あなたがたの意見が正しいか、まちがいであるかを、理性は正しく判断することができません。あなたがたの理性は、恐怖という情念によって汚されています。

私は、あなたがたを特別に責めようとは思いません。すべての人の理性が、いくつかの情念によって汚されています。ある人にとっては、それは名声や富に対する欲望であるかもしれません。このような情念は悲しむべきことではありますが、どんな場面でも、理性だけで正しい結論を出せるものではありません。

あなたがたは、情熱や、真理の愛によって生かされているのではなければ、どうして正しい桔音を探求しなければならないのでしょうか。強い情念である情熱は、時に邪魔になるけれども、また同時に正しい推論に導く強い力にもなります。それは、その、まさしく前提です。

三段論法が正しい思考をつくり出すということが、どうして私たちにはわかるのでしょう。そうです。私たちはそう思うだけです。そして、私たちは、小さなことにおいてのみならず、大きなことにおいてもそう思います。アインシュタインは、彼の有名な定理について、それが実験に付せられる前に、それが正しいと思ったと言っています。この思うとは何でしょうか。それは理性に属するものではありません。直感でもありません。しかし、それはアインシュタインのような人を満足させます。

証拠は外見的なものだけではありません。時には私たちの意識と対立する内的な証拠もあります。この内なる自覚、信仰は、それ自身、宇宙の偉大なる事実の一つです。それは、自然界のほかの事実と同様に尊重され、説明されなければなりません。

アインシュタインの推論は、理性外の予見にもとずいていました。

無神論もまた、信仰にもとずいています。それも、また、その予見を持っています。それは、非存在を否定する生き方をすることが価値があるという考えにもとずいています。反キリストの偉大な哲学者ニーチェは、正直にこのことを認めていました。彼は書いています。「われわれ、今日の知識狂信者も、われわれ無神論者、反形而上学者も、なお、なん千年もの間、信仰が燃やしつづけてきたほのおから、火をもらう。キリスト教信仰は、神は真理であり、真理は神であるというブラトーの信仰でもあった。」ニーチェはそれは残念だと思ったものの、しかし、彼は自分を〝なお信心深い〟と考えました。

もしも情念が、信者の確信において、未信者の場合も同様、このような大きな役割を果たしているとしたら、どうしていと高いお方が、あなたがた、自尊心の高い理性に対して話かけて、これら情念に対してはそうしないのでしょうか。

レーニンは彼の〝哲学写本〟という本の中で、物質は自己反省のための力を持っているといっています。それは、それ自身を思考において反影します。だれの思考においてでしょうか。ひとりの人間の思考においてです。さて、私たちの思考することがすべて実体の反影であるとするならば、そして、私たちの思考が非常に個人的なものであるとするならば、そして、私たちの思考が非常に個人的なものであるとするならば、それらが反影する真理は、ひとりの人格でなければなりません。私たちがそれをはっきりと理解するか、ぼんやりと理解するか、歪んだ形で理解するか、あるいは、私たちが実際に理解したと思わずに理解することはあっても、ひとりの人格を見ることにちがいありません。イエスは、真理とは、人格であり、彼自身であるといわれました。今、これを、三段論法で説明してみましょう。そうすれば、あなたがたはイエスの主張は真理であり、神秘的真理であるという結論にいたることでしょう。

どうしてあなたがたは、あなたがたの心があなた方に語り掛けると信じるのですか。あなたがたは、それは信頼できないと考えています。あなたがたは、今、この心があなたがたを幻想の世界に引きずり込んだ眠りの時からめざめたのです。それは、夜ごと、あなたがたにうそをいいます。それはあなたがたの白昼夢において、また空想において、うそを言います。盲目的にあなたがたの心を信頼することは理にかなったことでしょうか。

心に信頼する多くの人たちが、ヒットラーやスターリンを天才として歓迎しました。その同じ心がのちになって、彼らを大量虐殺者として指名しました。あなたがたは、あなたがたの心がしばしばまちがっていることに気づきました。それは、あなたがたに真理を語るそぶりさえ見せません。それは、あなたがたに、あなたがたが聞きたいと思う耳ざわりのよいことを語る売春婦です。それは、無神論者に、神はいないと言います。それは、宗教家に、あなたはしあわせになると言います。それは、あらゆる政党の党員に、その政策が最善であると言います。

私たちは、みな、大きなあやまちを犯しました。人類の歴史のすべては、人々がそのために喜んで死んだ思想の巨大な墓場です。あなたがたは、あなたがたの思想がいつの日か地球がアトラスによって支えられているという思想と同じようにばかげたものであると考えられるようになるとは思いませんか。

心に信頼して、現代でさえ、九十九％の人が因果律が絶対に正しいと信じています。しかし、彼の主張を理解する人は非常に少ないのですが、ハイゼンベルグは正しい。それは、こうです。「原子物理学の矛盾の解決は、古い、大事にしてきた思想を放棄することによってのみ達成できる。これらのうちでもっとも大事なものとは、自然現象が厳格な法則―因果の原理に従っているという思想である。」

あなたがたは、精神病院を訪ねたことがありますか。精神病院と日常生活の間にちがいがありますが、それは、天才の脳に侵入した梅毒菌か、明せきな心を崩壊した耐えがたい感情にあるのかもしれません。〝無神論学習書〟の著者たちは、スピロヘータが彼らの脳を破壊しはじめているのを知っているでしょうか。フルシチョフは共産党幹部さえ生命をおびやかされた地獄のようなスターリン支配のことを書いています。このように〝無神論学習書〟の著者たちも、大きな恐怖に耐えなければならかったのです。彼らは、自ら完全に正常であると言うことができるでしょうか。私たちのだれがいったい正気でしょうか。私たちは豊かな地球に住みながら、三十年ごとに、いつもの虐殺によってしか問題を解決することのできない人間に属しています。私たちの心に、なにかまちがいがあるはずです。無神論者は心を信頼することが正しいと考えているのでしょうか。

どんな人が、少くとも、狂気、神経病、麻薬患者、悪霊つき、自閉症、誇大もう想狂、変態性欲者支離滅裂などの範ちゅうにはいらないでいられましょうか。どこに完全な、正常な心があるでしょうか。心よ、おまえはだれか。おまえの正体を見せよ。おまえの最後の構成者はだれか。だれに、おまえは実体について尋ね、その最後の秘密をおまえに明らかにするようにと求めることができるのか。

実体という大海の表面に浮かぶ一滴―それが私の存在です。それは大海の中に生まれます。それは、ひとときも大海を離れることができません。私の存在は、あらしにもまれるその一部分です。

私自身が王のように気取って、実体について謙虚に考えるかわりに、それを裁きたいと考えるやいなや、私もはや実体ではなくなり、非存在、幻想となります。

唯一の実体―神だけが存在します。彼は創造しました。しかし彼自身のうちにおいてそうしたのです。彼の中で、私たちは私たちの存在、いのち、活動を持ちます。彼は彼が創造したすべてを飲み込みます。なん億という細胞が、それぞれ完全な組織を持っており、生命の機能を

すべて備えているように、私たちは、みな、いと高き実体の部分です。私たちが彼に逆らうなら、私たちの存在はその意味を失います。

賢い人は、冗談の言いかたをわきまえています。自分たちのことが話題になる場合でも、そうです。悪い心からではなく、私たちは、私たちの無神論の友人に、ひとつの冗談を言いましょう。

ソビエト連邦共産党中央委員会がフルシチョフの問題を討議しました。プレジェネフとほかの委員たちが言いました。「彼は愚か者です。彼を除名しましょう。」ボジョルニーが口をはさんで言いました。「しかし、今は、細胞移植ができます。彼に天才の頭脳を移植しましょう。」一同、同意しました。外科医が呼ばれました。手術がとどこおりなく行われました。しかし、期待した結果が得られませんでした。彼らは拒絶反応のことをわすれていました。天才の頭脳がフルシチョフを拒絶したのです。

これは冗談です。しかし、啓発された心、創造主によって啓発され、彼と調和を保っている心は、無神論の原理を拒絶します。

博物館になっている聖ワシリー寺院

見えるものは一時的であり見えないものは永遠に続く

無神論者になることは宗教的であるよりもずっと困難なことです。

私たちは、でき得る限り、私たちの無神論の友人たちに接近しようと努力しました。

無神論は、偽りの宗教から霊的真理に到る通路となることができます。無神論は、ある時代には、一般に、偽善的宗教の迷信の結果です。しかし、その時、それは一つの通路です。その通路にとどまらないでください。

私たちは、また、自ら無神論者であると名のっている人たちの皆がみなほんとうにそうではないことを知っています。十八世紀の有名な無神論哲学者、バロン・ホルバッハは、神を彼の個人的な敵であるときめつけました。彼にとっては、自然以外の存在は何もなかったのです。彼によれば、自然がすべてのものを造り出します。そして、それ自身は造られざるものです。しかし、これは、まさしく、私たちが神として信じているものです。自然には、法則、秩序、目的、霊があります。ホルバッハが自然によって理解していることが何であるかを読めば読むほど、彼は、嫌いな〝神〟ということばを〝自然〟ということばに置き代えていたに過ぎたなかったという印象を強くします。これは本当の無神論ではありません。

多くの人たちにとって、無神論は、宗教が未だ探求することのできないでいることについての欲求不満の隠れみのに過ぎません。その無神論は、信心の抑圧であり、それは、彼らと対話の方法を知らない私たちの誤りです。クリスチャンは未信者と交わる時、〝キリスト教人種〟であることを忘れないければなりません。医者は医者同志の交わりの時には学術用語を用いますが、賢い医者は愚者と接する時には彼のわかる用語を用います。宗教の教師たちとクリスチャンたちは、みな、聖書的用語を知らない人々に彼らの信仰を分からせる方法を知りません。このことが、多くの人々を宗教から遠ざけています。

それ故、私たちは理解しなければなりません。

私たちは、また、無神論者の重荷に同情します。無神論者になることは、確かに、宗教的であるよりもずっと困難なことです。無神論者は非常にきびしい信条を持っています。彼らは、私たちが証拠もなしに信じる、と言って責めます。私たちは、この論文で、私たちの信仰の証拠を提供しましょう。けれども、だれが、無神論のばかげた教義も弁明することができるでしょうか。

その第一の教義はこうです。「永遠から絶えず運動する物質が存在してきた。それが生命を創造した。」

どうして無神論者にこのことがわかるのでしょう。有名な天文学者、ホイルは、それとは反対の証拠をあげています。〝宇宙の性質〟という本で彼は次のように書いています。

創造についての論争をさけるためには、宇宙の物質すべてが無限のむかしから存在することにならなければならない。そして、これは、実際的な理由としては存在し得ない。なぜなら、もしそのとおりなら、宇宙には少しの酸素も残っていないことになる。私が天体の内側について語った時に説明したように、酸素は、いつも、宇宙のどこでも、ヘリウムに変化する。そして、この変化は一方的であり、それ故に、酸素はほかの元素の破壊によってどんなに少しの量も造り出されることはできない。それなのに、どうして宇宙には酸素がほとんど全部存在するのだろうか。もしも物質が無限のむかしから存在していたのならば、これは全く不可能なことである。それで、宇宙が何であるかを見てみると、創造論が簡単にかたづけられないことに気がつく。

私たちはまた、熱力学の第二法則によって、宇宙のすべての観察し得る物理的過程において、エネルギーがわずかながら減少する。宇宙は退化している。それが退化しはじめてからかなりの時が経過しているということは、その初めがあったという証拠である。

聖書はこう言って科学を語っています。すなわち、「見える者は一時的である。」

これに反対するどんな証拠を無神論者たちは持っているでしょうか。何が、彼らに、物質は永遠に存在すると信じさせるのでしょうか。いつも移り変わる証拠とはどんなものでしょう。しかも、あなたがたはそれを信じなければなりません。そして、そう信じることは非常にむずかしいことです。神はいない、愛する天の父はいない、物事には目的がない、まもなく破滅する私たちの人生には希望がないと信ずることは、容易でありません。

すべてのものは、元素分子が集合する偶然でしょうか。共産主義作家アナトール・フランスはこう書いています。「偶然は、おそらく、本名のかわりに用いた神の雅号であろう。」

それ故、大いなる危機や危険に際して、愛の絶頂間、あるいは美を思う瞬間、人間は無神論者ではありません。死の床にありながら不信心は人はまれです。わずかな人たちが最後まで彼らの役を演じ続けるのは事実です。彼らは、最後の息を引き取る時まで、彼らが襲われている疑いを口に出して言わずにしまうかもしれません。しかし、練達した宗教家がこのような人の死の床のそばにいるならば、その人は彼に信仰の告白をさせることができます。

人生における大いなる危機が無神論者をふるえあがらせます。

レーニンは、ロシア革命が最大の危険にさらされた時、ペテルスブルグが反共産軍の将、コルニロフの軍隊に取り囲まれた時、演説した中で、なん回か〝ダイ・ボエ〟―〝神よ、われらを逃れさせたまえ〟と叫びました。これはロシア語では日常語だと言って反対されるかもしれません。しかしレーニンは、この大きな危機の時以外には、このことばを使いませんでした。

三人の男がナチに反対して戦争を指導しました。チャーチル、ルーズベルト、スターリンです。最初のふたりはクリスチャンでした。チャーチルは、この戦争の回顧録を六巻書きました。このふたりの信者の唇には、ただの一度も神の名がのぼりません。スターリンだけが「神よ〝トーチ〟作戦（北アフリカ侵略）に成功を与えたまえ」「過去は神に属する」などと言っています。毛沢東は厳格な無神論者です。しかし、一九三六年、共産党中央委員の一員として、彼が思い病気になった時、彼は洗礼を受けることを要求し、泥僧の手でバプテスマを受けました。彼の妻が将介石の軍隊によって射殺された時、彼は〝不死〟という宗教詩を作りました。一九七一年、イギリスの新聞記者、スノーとの対談で、彼は言いました。「まもなく、私は神の前に立つことになるだろう。」

さて、このような事件は、とても教訓に富んでおります。もし、あなたが橋を造った技師であるとしたら、橋を一匹の猫が渡ったからと言って、その橋がりっぱである証拠だとは考えないでしょう。汽車がその上を通過しなければなりません。私たちは無神論の教義が美しい教えだけであるとは考えることができません。

共産主義者インターナショナルの総裁、ジノビエフはスターリンの手によって殺されました。彼の最後のことばはこうでした。「聞け、イスラエルよ。われらの神は唯一の神である。」同じようにスターリンによって殺されたソビエトの内容大臣イアゴダは言いました。「神はいるにちがいない。なぜなら、私の罪が私に及んだからだ。」ソ連無神論連盟の長イア

ロスラフスキーは、死の床からスターリンにお願いして言いました。「私の本を全部燃やしたください。ごらんなさい。彼がここにいます。彼は私を持っていました。私の本を全部燃やしてください。」

党を追放されて、仲間によって投獄された共産主義者といっしょに共産党の牢獄に入れられていた時、私は同じような場面に出会ったのを思い出します。

私たちの無神論の友人たちが、これらのことをよく考えるようにおすすめします。

さて、彼らの学習書のさらに細部にわたる分析にはいる前に、彼らの思想を文章で明らかにするために、ソビエト連邦の共産主義者に対する私たちの態度を、まず説明しておきましょう。共産党の党員はひとり残らずキリスト教信仰の敵になろうと考えていることを私たちは彼らから学びました。資本主義体制の下では、世界のそのほかのところでもそうですが、共産主義者はキリスト教の味方のようにふるまい、私たちのクリスチャンの兄弟たちに対話を求めてきます。しかしながら、これは戦略上の動きであることは、私たちにはわかっています。キリスト教に対する共産主義の真の態度は、〝無神論学習書〟に見られるとおりです。それは敵の一つときめつけられています。

宗教の定義

〝無神論学習書〟は哲学者たちによって与えられた〝宗教〟という言葉のさまざまな定義を分析することから始めています。

しかし、宗教と神への正しい態度であると言ったプラトーのことも、宗教と無神論を迷信の中間にあるものと言ったプルタークのことも、取り上げられていません。

この本は近代の思想家から始めています。そして残念なことに、うそから始めています。その引用されていたことばは、どれ一つとして正しいものがありません。

カーライルは書きました。「うそは見つけしだい踏みつけて絶滅しなければならない。うそが疫病のように私の周囲に息づいていると知ったら、周辺を消毒しなければならない。」

プラトーは、著者というものは自らを聖職者と考えなければならないと教えました。うそを用いることの悪は、真実を打ち消すうそにあるだけではなく、ついには、他の著者に対する信頼を人々に失わせるという事実にあるのです。

砂漠をラクダで旅をしたベドウイ人のこんな話があります。ひとりの男が立ち止まって、彼に尋ねました。「どうぞ、わたしをラクダの背に乗せてくれませんか。わたしは長い旅をしているのです。」ラクダの持主はその願いを聞き入れて、その見知らぬ男を彼のうしろに乗せてやりました。しばらく歩いてから、突然、悪い考えをもったこの見知らぬ男は、持主をラクダから振り下ろして逃げました。持主が彼のあとから叫びました。「あなたがわたしのラクダを盗んだからと言って、わたしは怒らない。わたしはもっとたくさんのラクダを持っています。でも、わたしが悲しいのは、これから道で出会った人を簡単に助けてあげてはいけないと思ったことです。」

無神論学習書は、真理や信頼については何も気を配っていません。

ソビエト連邦では、弁証法的唯物論の学課には哲学者たちの著書から引用がなされています。一般の読者は彼らを知りません。（地下教会の伝統者が投獄された理由の一つは、彼がそのような本を手に入れて、不法に配布したということでした。）このようにして、著者はその文献をまちがって引用し、そしてまちがった指導をされる読者は真理にたよることができません。

私の敵たち、イムマヌエル・カントが、宗教は道徳的義務をもった人間による理解であると書いたと、引用しております。この哲学者の言葉を次に直接引用してみましょう。

「宗教は立法者としての神に関する道徳である。それは、神の戒めと見なすわれわれの義務の認識である。」

私の敵たちはルーディッヒ・フォイエルバッハが宗教を人間相互の関係として定義したと言っています。これも、また、うそです。〝キリスト教要覧〟という本で、彼はこう言っています。「宗教は人間の心の夢である。」

無神論者の著者たちによって提供された定義さえ、偽りです。サロモン・ライナッハは、宗教は否定の系譜であると教えたとして引用されています。私たちは彼の著書〝オルフェース〟に正しいテキストを見ます。「宗教は人間の能力の正当な働きを妨げる迷信的信念の集大成である。」

彼らがウィリアム・ジェームズの言葉を偽らなければならなかったことは理解できます。彼らは、次の彼の意見を引用することができませんでした。「人間の宗教的信仰は（それが教義の特別な項目を含んでいるとしても）要するに私にとっては、自然秩序の存在に対する信仰で

ある。……重要なのは、神が宇宙のもっとも根源的な力として考えることであり、次に、彼は精神的な人格の形で考えられねばならないということである。」

〝無神論学習著〟は、また、ジェームズ・フレーザーに対しても同様な不正を犯しています。引用文では、彼は、また、反宗教として取り扱われています。実は、〝不死の信念〟という彼の著書にはこうあります。「われわれの意識のある人格が死後も生き続けるかどうかという疑問は、確信を持った人間のほとんどあらゆる人種によってですでに解答されている。この点では、壊滅的な、不可知論的な人は、それが全くわからないにしても、ほとんどいない。」

シュライエルマッハのような人たちの定義さえ述べられていません。彼の定義はこうです。「宗教は、われわれの運命のみえざる決定者と調和ある関係にはいりたいという意識的な願望をともなったそれに対する絶対的な信頼の感情である。」あるいは、エマーソンによればこうです。「宗教とは超霊魂、天にいます神に近づこうとするわれわれのうちにある神性との交わりである。」あるいは、ヤコブ・バルクルトによればこうです。「宗教とは、人間本性の永遠な、不滅の、形而上学的願望の表れである。その荘厳、それが人間が自らでは用意できないいっさいのものを表しているということである。同時に、全人類と、文化的時代の偉大な、異なる面の反影である。」

〝無神論学習書〟の著者たちは提出されたさまざまな語源から、〝宗教〟ということばに光を当てようとさえしません。シセロは relegate―〝考える〟からこのことばを引き出しました。オーガスチンによれば、それは、失ったものを一度見出すという意味です。ラクタンチウスは、それは religare―（より高き力）と〝結びつく〟という言葉の派生語であると考えています。

しかし、もっとも奇妙なことは〝無神論学習書〟の著者たちが、マルクス主義者であると名のりながら、宗教に関するさまざまな定義のリストからカール・マルクスの言葉を除外していることです。それは、疑いもなく、彼の定義が美しさ、また、彼が宗教に対して払った賛辞に困惑したからでありましょう。

オーソドックスだ、カトリックだ、プロテスタントだと言ってお互いに不仲のクリスチャンたちは次のイエスのことばを聞く人のことを思い出すのにためらいを感じるでしょう。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あながたはお互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたもお互いに愛し合いなさい。もしあたながたのお互いの間に愛があるならそれによって、あなたがたが私の弟子であることを、すべての人が認

めるのです。」（ヨハネ一三34、35）それと同じように、マルクス主義者は、単純に、宗教に関するマルクスの言葉を引用することができないのです。なぜなら、彼は〝生涯の仕事を選択する時の若者に関する考察〟という論文の中で次のように書いているからです。「人間に対して、神は、人類とご自身を高貴あらしめる普遍的な目的を与えられた。」

晩年になって、〝正当なヘーゲル哲学批判に対する貢献〟という論文で、マルクスはこう書きました。「宗教は抑圧されている被造物のため息、心なき世界の心である。それは、あたかも、精神なき社会の精神のようなものだ。」

マルクスがヘーゲルから何を学んだかがわかれば、これらの言葉の重要さが増加します。ハインリヒ・ハイネは後者についてこう言っています。「ある美しい星の夜私たちはふたりして窓辺に並んで立っていた。そして、私は感傷にひたりながら星のことを語り、それらは祝福された者の住いであると言った。ところが、その主人（ヘーゲル）は、つぶやいて言った。『星か。ウウム。星は空に光るらしい病だ。』」

星についてこのように教え、このように美しい定義を宗教に与える人を教師に持つことは全くすばらしいことです。

マルクスが付け加えて、「宗教は人民のアヘンである」と言っているのはほんとうです。しかし、先にあげた引用文をもってくるとこれらのことばは、その反宗教的意味を失います。アヘンには、本来、悪なるものは何もありません。麻酔の発見は、手術の驚くべき発展を可能にしました。

普通、マルクスは、宗教の大きな弱点をにぎっていました。それは彼のお気にいりの話題でした。彼の不朽の論文〝資本論〟で、彼は簡単にこう言っています。「このような社会にとって（彼は、商品生産に土台した社会を意味します。すべての社会は商品を生産します。）抽象的人間の信仰形式をともなったキリスト教、特にそのブルジョア社会がもっと発展すれば、プロテスタンティズム、自然神教が、もっともふさわしい宗教の形式となる。」

このようにして、すべてのプロテスタントのキリスト教信者は、マルクスから、その事情を証明することができます。彼は、その〝マルクス主義者〟の敵に、彼らは彼らの教師の名まえを悪用していることができます。マルクスの真の弟子は、彼がふさわしい宗教を持ちたいと思うならば、プロテスタントでなければなりません。それなのに、いわゆるマルクス主義の支配者たちによって、どれほど多くのプロテスタント信者が投獄され、殺された方を考えてごらんなさい！

無神論者でありながら、マルクスは宗教に対する傾斜を持っていました。彼の人格は分裂していました。のちになって、マルクスの弟子たちが、私たちに対する恐ろしい告発、「宗教は人民の阿片である」ということばを作り出したのです。

人々は、宗教のほかに多くのものを阿片として用いています。ある人は、家庭の悲嘆を逃れるために化学を選びます。

彼は、生涯、研究室で過ごし、有用な薬を発見します。その研究が悩みる心にとって阿片であったからと言って、その薬の価値が減少するでしょうか。人生において大いなる不幸に出会った人が、天文観察の静けさに逃がれ場を見つけるとしたら、彼の仕事は、彼にとって阿片です。しかし、彼が観察している天体は現実です。そのように宗教は、多くの人にとって阿片であるかもしれません。けれども、彼らが訴える神は、事実たり得ます。

無神論や革命活動は、しばしば破境された家庭の子供たちにとって阿片であり、親の権威に対する反逆の代用です。無神論は、大きな罪を犯す時、苦痛を与える良心を柔げる阿片になります。無神論は、ちょうど阿片が肉体の苦痛を軽くするように、良心の叱責を窒息させます。

マルクスの「宗教は人民にとって阿片である」ということばは、レーニンの「宗教は霊的な酒の一種である」あるいは、バクーニンのばかげた結論、「もし神が存在するなら、人間は奴隷である。しかし、人間は解放されるし、また解放されなければならない」とは全くちがうものである。それは、このように言っているのと同じである。「無神論者は、神はいないと主張する。しかし、神に対する信仰は私を助ける。それ故、無神論者は存在しない。」

聖書について、また聖書に反対して多くのことを書いている〝無神論学習書〟の著者たちが、キリストの使徒によって与えられた宗教についての定義、「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。」（ヤコブ一27）を知っていたならよかったのに、と思います。私たちの敵は、このように定義された宗教に対して、ほんとうに反対するでしょうか。分別のある人なら、この定義に魅了されるにちがいないと思います。おそらく私たちの無神論の友人が反対して戦っているのは、宗教でさえないこのように飾りたてられた偽りに対してです。困っている人を見舞い、この世の大いなる汚れから清く保つことに、だれが反対することができましょうか。

人類最古の記録はみな、われわれは神によって造られたと言っています。

宗教の起源

「宗教は、人間にとって生まれつきのものではない。それは、人間の本性の移譲できない性質ではない。」私たちの尊敬する敵は、化学がこのことを証明したと言います。「考古学上の発見が、なん万年もの間、人間はなんら宗教を持っていなかったとことを示している。」

私は科学アカデミーの会員ではありません。私は、無学ながら、考古学は過去に存在したものだけを発見することができたのであって、存在しなかったものは発見できなかったと信じています。

そうは言いながら、しかし、会員たちは冗談を言い合っているのではありません。彼らはまじめな論争をしています。現代人の先祖であるピテカントロプスやシナントロプスが住んでいた洞穴が発見されました。そこには、たくさんの石器や、食べられた動物の骨がありました。「しかし、その時代からは、もっとも幼稚なものでもその当時存在していた何か宗教的表現のしるしを示す発掘がなされたためしがない。」

このことは、私に、ひとつの物語りを思い出させます。あるイタリア人がひとりのユダヤ人と討論しました。「あなたたちユダヤ人はごうまん過ぎる。あなたたちが世界でいちばん知的な国民であると言って、大いに宣伝している。まったくばかげたことだ！イタリアでは、発掘が行われ、少くとも二千年前の地層から電線が発見された。それは、われわれローマ人の祖先が、その当時すでに電話を使用していた証拠である。」ユダヤ人が答えました。「イスラエルでは、四千年前の地層が発掘されたが、なにも見つからなかった。これは、あなたがたが電話を使用する前に、私たちが無線電話を持っていた証拠だ。」

先史民族の住居に宗教遺跡がないことが、宗派の見えるしるしを持たない宗教の霊的な形、瞑想、沈思、真理における礼拝などからなる宗教があった証拠であると言ったらどうでしょうか。正直にお話ししましょう。同志諸君、アカデミーの会員の皆様！

しかし、論議を進めるために、私の敵は、ある時、人間が宗教的になったということが、どのようにして起こったのかを説明しなければなりません。彼らは、ネアンデルタール人の時代に、二つの理由から宗教が現れたといいます。第一に、部族の死人たちが墓場から出て来て、生きている者たちに危害を加えるかもしれないという恐怖から連想される死に対する原始人の恐怖。第二に、自然の災害に対する原始人の無力。

ところで、ピテカントロプスはクロマニヨン人やネアンデルタール人よりもっと原始的でした。彼は、後者の二人種よりもっと無力でした。そうであるなら、論理的には、彼はもっと宗教的でなければならないことになります。

私は常識に訴えます。

私の敵たちはアカデミー会員であり、そのある者は歴史学者です。彼らはロシア国民と国家の起源をどのように考えているのでしょうか。そうです。彼らは、私たちの歴史の太古の記録によって自らを方向づけます。

そして、このことが、人類の起源の分野においても、良い考えをもたらすにちがいありません。人類の最古の記録は、マネバ＝ダルマ＝ソストラ、ギルガメシェピッタ、ベーダ、死についてのエジプトの書、モーゼの書、などです。それらは、どれもみな、異なる宗教が共通して持っている重要な真理を、いにしえの預言者たちに明らかにした神によってわれわれは造られたといっています。これこそ、宗教の起源にちがいありません。

もしも私が人類の太古の記録を受け入れることで間違っているとするならば、モスクワ・アカデミーはロシアの歴史において間違っています。

どの大陸にも、人間がさるから出たというさび形文字板、碑文あるいは回想録がありません。人間は、通常、その祖先について、何かを知っているものです。もしもむかしの人間が、知恵にたけた宗教を発明するほどの空想力豊かであったとするならば、どうして彼らはしっぽで木からぶらさがっている先祖を見て回想しなかったのでしょうか。

不滅の存在に対する信仰と願望が

すべての宗教に霊感を与えました。

もう一度言いますが、同志諸君アカデミー会員の皆さん、まじめに考えましょう。宗教は神から来ます。それは神との交わりです。

最古の人間は、「私は存在する」ということと「私をとりまく多くの対象が存在する」ということを知っていました。しかし、私や私の仲間や、私をとりまく物事が存在しているとするならば、そこには、もう一つのもの、存在そのものが存在しているにちがいありません。もしも私がおり、世界があるならば、そこには、また〝存在〟の単純な事実があります。私は年をとり、仲間が死にます。それが、私の子供たちが成長するにつれて、今度は私の死ぬ番がまわれてくることを警告します。私をとりまくすべての対象はく腐ちていき、枯れていきます。しかし、存在の単純な事実はけっして終わることがありません。そこには、私たちの生き死にとは関係なく、純粋なるものが存在しています。私は、いつも存在していたわけではありません。私たちをとりまくものは、いつもあったわけではありません。それらは偶発的なものです。しかし、存在の事実は変わらずにありました。原始人は、これを、そんなに多くのことばで言い表すことができませんでした。しかし、彼らは、また、〝私はある〟という名の神であるとして後に明らかにせられる唯一なるお方、至高の、不滅の存在について知っていました。彼に対する信仰と、彼をなだめたいという願望がその初めに、すべての宗教に霊感を与えました。これが、今日なおすべての宗教の基礎です。

もしもこのことが事実でないとするならば、どうしてあなたの本が書かれたのでしょう。

ひとりのロシア人農夫が、かつて、無神論講師に、彼が神を信じているかどうかと尋ねられました。彼は確信をもって答えました。彼はもう一度尋ねられました。「どうしてあなたは神を信じなければならないのですか。あなたは神を見ましたか。」――「いいえ。」と答えました。「しかし私は日本人も見たことがありません。それにもかかわらず、私は日本人の存在を信じています。われわれの軍隊は前の戦争で彼らと戦いました。これは私にとって十分な証拠です。もし神がいないというのなら、どうしてあなたは彼と戦うのですか。」

どうしてあなたがたは、七〇〇ページにも及ぶ論文を、存在しない人格に反対して書くのですか。〝無神論学習書〟もまた、〝もの〟の範ちゅうに属しており、永遠なるものを仮定しています。

キリスト教の起源

〝無神論学習書〟は私たちクリスチャンにほめことばをいうことから始めています。次のとおりです。

少なくともその存在の初期の時代に、キリスト教は犠牲のささげものをやめただけでなく、あらゆる種類の儀式も同様にやめた。F・エンゲルは、これは革命の第一歩であったと述べた。古代の他の宗教と異なって、キリスト教は、信仰に関すること、すべての部族や人民に対してなされる説教において、あらゆる人種的な境界設定を絶対的に拒否した。信条の問題において、キリスト教は、社会的障壁をも絶対的に拒否した。イエスの教えを宣伝する人たちは、あらゆる人に対して、人種的な起源や社会的立場の相違を超えて、語った。

初代クリスチャンが犠牲のささげものをやめたというのは事実ではありません。事実は、彼らは動物の犠牲をやめました。しかし、彼らは喜んで自らを犠牲にしました。

とにかく、一度だけ、私たちの敵たちは、私たちについてよいことばを言いました。キリスト教の内部は、国家的に、あるいは民族的差別がありません。そして、このことは、すでに二千年前からです。ポーランドにおいて、そしてソビエト連邦において、ユダヤ人に対する差別が見られます。ロシアでは、全タタール人、チェコ人、インガシュ人、カルミクス人、バルカー人、ボルガ・ジャーマン人が、ただある一つの国籍を持っていたという理由で追放されました。共産中国では、チベット人が抑圧されています。共産国では、どこでも、あなたが最初に尋ねられる質問は「あなたの社会性分は何か?」です。もしもあなたの父親がたまたま工場の経営者であったら、災いです。キリストが教えられたとおり、キリスト教には社会的な障壁がありませんでした。

〝無神論学習書〟は、それ以上私たちにはほめことばを与えません。

それは主張します。「一世紀のギリシャ、ローマ、ユダヤの著者たちは、私たちに、キリスト教について、絶対に、何の情報も与えていない。」〝絶対に〟というすてきなことばに注目してください。この否定は、絶対に誤りです。

ローマ人歴史家タキタスは、紀元六〇～一二〇年ごろに生きていました。

紀元六四年に起こったローマの大火について、彼は次のように書いています。

あらゆる人間の努力、皇帝の祝儀、神々へのそなえものは醜聞をしずめることができなかった。火が放たれたという考えを追放することができなかった。そして、このうわさを取り除くために、ネロは、犯人を作り上げ、この上なく残忍な方法で、普通、クリスチャンと呼ばれてとてもいみ嫌われていた人たちを、罰した。クリスチャンという名まえのもととなったキリスト人、チベリヤ地方の代訴人、ポンテオ・ピラトの手によって死刑にされた。この時をきっか

けにして、この有害な迷信が、再び、悪の源なるユダヤだけでなく、あらゆるきたないもの、世界中から流れてくる堕落した者たちの貯まり場であるローマにももち上がった。

そのために、まず最初に（クリスチャンであると）告白した者たちが逮捕された。次に彼らの証言によって、とても大勢の人たちが有罪とされた。放火罪ほど人の憎しみをかりたてるものはないからである。ただ死刑にされるだけでなく、彼らは、娯楽の対象として奉仕させられた。彼らは野獣の毛皮を着せられ、犬に食い殺された。ある者は十字架に付けられた。ある者は夕闇をいろどるたいまつとして火をかけられた。ネロは、この見世物のために彼の庭を解放した。曲芸団まがいのショウを行った。そこに、彼は盛装した戦車隊を参加させ、戦車に乗って自ら行進した。このようなことは、すべて、当然罰を受けなければならない人たちに対してさえも、同情の心を良俗のために殺されたのではなく、ひとりの人間の残虐心を満足させるためにそうされたのだと思わせたかである。

美しい初代教会の証しは私たちの励まし

そのようなわけで、〝無神論学習書〟が一世紀にはキリストに関する記述が絶対にないという〝絶対〟は絶対ではありません。私たちは、キリストの存在について証言している一世紀のローマの歴史家を知っています。

私たちは第二の人物、スエトニウス（だいたい七五～一六〇年頃）によって敵に反撃することができます。彼は〝ヴィタ・クラウディ〟に書いています。

「……キリストの扇動にのってユダヤ人たちがひき続き騒ぎを起こしているので、彼（クラウディアス）は、彼らはローマから追放した。……」

このように、もうひとたび、キリストの存在が確認せられます。そして、もっともっとできます。皇帝クラウディアスの時代に、このキリストは、すでに、多数の弟子をローマに持っていました。六四年に、彼らは既に残虐な迫害を受けました。そのことを、この同じ著者が〝ピタ・ネロニス〟の中に書いています。

「彼（ネロ）の支配下で、多くの残虐行為や抑圧が行われた。そして、多くの新しい法律が制定された。……不思議な、奇妙な迷信を信じる人たちの集団である」クリスチャンたちの上に刑罰が課せられた。

次に、第三番めのローマの歴史家、プリニーがいます。（六二〜一一三年頃）彼は、皇帝トレイジャンに書いています。

閣下、私はわからないことをお尋ねするのが私の主義であります。私のちゅうちょを取り除き、無知を教導するのは、だれにとってもよいことではないでしょうか。私は、これまで一度も、クリスチャンの裁判に立ち会ったことがありません。それで、一般に行われている刑罰や調査がどんなものか知りません。私はとてもためらいながら次のことをお尋ねしたい。年令によって差別があるものでしょうか。弱いものも強い者も同じ取り扱いを受けるものでしょうか。転向する者は敵されるのでしょうか。かつてクリスチャンだった者は、そうあることをやめることによって、何も罰を受けることがなくなるのでしょうか。それとも、罪人だけに、その名まえがかぶせられるのでしょうか。

これが、私のところに、クリスチャンとして持ってこられた人々の事件で、私が採用した鉢路であります。私は彼らに、クリスチャンかどうかと尋ねます。

彼らがそれを認めたら、私は、大変な罰を受けることになるぞといって、二度、三度とその質問をくり返します。彼らががんとしてそういい続けるならば、私は彼らに死をいい渡します。

私たちは、第四番めの文書によって敵に反撃することができます。私たちは、ネロの迫害のすぐあとに書かれたローマのビショップ、聖クレメントの最初の手紙を持っています。とにかく、それは一世紀のものです。それは、またキリスト教についてのたくさんの情報を記録しています。そこから私たちは、当時のコリントの教会の状態を知ります。それは、私たちに、使徒ペテロが殉教者として死んだこと、パウロが七度投獄されたことを知らせてくれます。私たちは、ダナイド一族や、ディルケなどの殉教者の名まえを知ります。

一世紀に書いた聖クレメンテを歴史的事実として、キリストを知っています。彼は書いています。「キリストは心の貧しい人たちのものであって、人々の前に高ぶる者たちのものではない。神の権威をもった王である私たちの主イエス・キリストは、高ぶりやごう慢の装いをもって来られたのではない。彼はそうすることができたにもかかわらず、低い姿で来られた。聖霊が彼について言ったとおりである。」

四世紀のキリスト教作家・サルビシウス・セベラスの一節が、同じように、批評家に調べられました。そして、それがタキタスの過去の作品からの引用に基づいていると判断されています。それは、私たちに、紀元七〇年のエルサレム捕囚後にタイタスによって開かれた戦争議会の様子を知らせます。タイタスは、ユダヤ教とキリスト教の宗教がもっと完全に根絶されるために、エルサレムの寺院は破壊されなければならないという意見を述べたと報告されています。キリスト教はユダヤ教の中から起こりました。それで、根が切り倒されれば、幹は容易に破壊されるでしょう（〝初代キリスト教と異教〟ドナルドスペンス著）

一二五年にクリスチャン哲学者アリスタイデスが、皇帝ハドリアンに、教会の道徳要綱の全写本を提出しました。それが精密な思考体系を持つためには、既に古くなってしまったかもしれませんが、次に引用しましょう。

彼ら（クリスチャン）は迫害する人たちに、彼らは（聖書の言葉をもって）熱心に説きすすめ、彼らを友人にします。彼らは、彼らの敵に対して良いことをします。王様は、彼らの妻は処女のように清純で、彼らの娘はしとやかです。彼らの夫はすべて悪い性的関係から身を守り不純なことを謹しみます。彼らは他の世界に行く時に報いを受けるという希望を持っています。

奴隷の男や奴隷の女、またその子供たちについては、もしそこにだれがいても、彼らは彼らを説得してクリスチャンにします。そうしたあとでは、彼は、何の差別もなしに、彼らを兄弟と呼びます。

彼らは異教の神々を礼拝することを拒みます。そして彼らはけんそんと喜びの道を行きます。彼らの間に、偽りを見られません。彼らはお互いに愛し合います。やもめの必要は無視されません。そして、彼らは、孤児に暴力をふるう人から助けます。惜しげなく、高ぶらずに、持てる者は持たない者に分け与えます。クリスチャンは他国の人を見ると、家に連れて行き、彼をもてなします。彼らのひとりに赤ん坊が生まれると、彼らは神を賛美します。もしそれがみどり子のうちに死ぬと、それが罪なくこの世を過ぎ越したと言って、もっと神に感謝します。しかし、彼らのひとりが不正を行い、罪を犯して死ぬと、彼らはいたく嘆き、その破滅に会おうとしている者のように悲しみます。

このように、王さま、クリスチャンには戒律が与えられており、このように、彼らは行っております。神を知っている者として、神が与え、彼らが受ける正しい要求を彼らは神に尋

ね求めます。そして、彼らは彼らに対する神の神性を知っている故に、ごらんなさい！彼らのために美がこの世に溢れます。彼らのなす善を、彼らは大声でおおぜいの人に聞こえよがしに語ることはありません。彼らは宝を隠す人のように、彼らのほどこしを隠します。彼らは正しくあるように努めます。それは、ちょうど、彼らのメシヤにあいまみえることを待ち望み彼から約束のものを受けようとしている人たちのようです。

実に、この人たちこそ、新しい人たちです。彼らの中には、何か聖なるものであります。彼らの書いたものを手にして、それをお読みください。そうすれば、私が、私自身の権威でこれらのことを押しつけようとしているのではないことがおわかりでしょう。彼らの書いたものから読んだことを、私は固く信じます。現在のことについてだけでなく、来たるべきことについても同様です。私は疑いなく思いますが、この世は、今は、クリスチャンのとりなしがあればこそ立っています。彼らの教えは光の門です。

それで、神を知らない人たちに近づき、すべての時と永遠から来る朽ちざる言葉を彼らに受けさせてください。そうすれば、メシヤなるイエスによって全人類に臨む恐ろしい裁きから彼らは逃れることができるでしょう。

これでもまだ、一世紀には、キリスト教に関するなんらかの情報を〝絶対に〟私たちに与えていないと主張しつづけるのでしょうか。

しかし、私は、一世紀に書かれたキリスト教についての記録が絶対にないというのは事実でないと主張する必要はありませんでした。〝無神論学習書〟の著書であるアカデミー会員たちは、続いての文章の中で、自らを否定します。彼らは、黙示録は紀元六八に書かれたものだといいます。それなら、私たちは一世紀にいることになります。ひとりのユダヤ人がそのことを書きました。そして彼は、パレスチナからずっと遠い所にさえ、すでにキリスト教が存在し、組織されていたと、その冒頭に書いています。黙示録は、小アジアの教会に対する七つの手紙で書き出されています。

福音書の証明

福音書は一世紀に書かれたものでないというのが、無神論の聖典の公理です。それらは、のちの、賢明な偽善者たちによって書かれたものです。ヨハネによる福音書は、言われるところによると、二世期の終わりにだけ書かれたものです。

しかし、イグナチウスはそこから引用しています。実は、彼は紀元一一六年前に殉教しているのです。哲学者ジャスティンがそれを引用しました。彼は、およそ一四〇年頃に死にました。フランスの聖書批評家ロイジイさえ、この福音書は一三〇年までに、すでにローマに届けられたことを認めています。

福音書の内容の簡単な分析が、それが後世の偽造によるものではないことを証明します。（このことを主張するために、私の敵たちはエンゲルスにさえ反対します。彼は、キリスト教が偽造者たちの作品であるとする考えを笑っています。F・エンゲルス著〝ブルーノ・パウェルと古代キリスト教〟参照）

言われるように、福音書が二世紀の終わりに作り出されたとすると、その時は、使徒たちの名まえがキリスト教世界では、とても尊敬されていました。その時、彼の作品が神の霊感によって書かれたものであることを保証したいと考える偽作者が、なぜ、イエスがペテロを〝サタン〟と呼び、他の弟子たちを叱責しているのをわざわざ教会に教える必要があるのでしょう。このような言葉は、それが実際に言われたのでなければ、福音書の中に書かれることはなかったのではないでしょうか。使徒たちは、教会では、高く評価されていました。彼らに対する非難の言葉は、クリスチャンによって作り出されたものではないと思います。

二世紀の終わりには、キリストは、全教会で、神として礼拝されました。どんな偽作者でも、彼がわずかな女たちとの交友関係しかなかったとか、十字架上で、「わが神、わが神、どうして私を見捨てられたのですか」と泣き叫ぶというような弱点を彼に帰することは、彼の作品を聖なる書として受け入れさせるために得策でないと考えたのではないでしょうか。同じように、ゲッセマネにおけるキリストの恐れと不安の記事についても考えられます。これらの出来事は、救い主の名を攻撃にさらすことになりました。

一七八年に書かれた本の中で、セルサスは、彼の弟子たちが深い沈黙の中で苦しみに耐えていたことを指摘しながら、十字架の悩みの故にイエスをあざ笑っています。彼は、福音書から、イエスに関する事実を知っていたにちがいありません。伝道者たちは、彼ら自身の利己的な目的を達成するためにそれらを書いたのではなく、ただ、彼らはそれらを証しするためにだけ書いたのでした。そして彼らは、もしも、ため息や涙、悩みや苦痛が、多くの人たちの意見で、イエスの品位を低下させるとしても、かまわないと思ったのでした。このような説明は福音書の純粋性のあかしであり、それらが初期の時代に書かれた証拠です。

のちの偽作者であれば、イエスに対するこびへつらいでいっぱいだったにちがいありません。彼らは、彼が同時代の人びと、彼自身の民たち、彼をもっともよく知っていた人たちによって、彼ご自身が若者に〝何故なんじはわれを良き者というか〟と問うたように、悪魔と考えられていたということを私たちに教えるようなことはしなかったでしょう。

福音書と書簡聖書は、わずかながらアラマイク語を留めています。アラマイク語は、パレスチナで、ユダヤ人たちによって話された言語です。もし福音書がギリシャ語を話す世界で、二世紀の終わりに書かれたものならば、どうして偽作者たちは、アラマイクの言葉を残したのでしょうか。それは、クリスチャンの大部分がユダヤ人であったキリスト教歴史の最初のなん十年間だけ通用したのです。

福音書は、安息日の正しい守り方について、ユダヤ教の儀式の価値について、イエスとその反対者たちとの論争を書いています。一世紀のユダヤ人読者にとってはそれらは重要でした。二世紀の異邦人クリスチャンたちには、そのような論争が理解できなかったり興味がなかったりしたでしょう。偽作者ならば、経札、十分の一税、ユダヤ教の洗いきよめの儀式、パリサイ人とはだれで、サドカイ人とはだれかなど、その意味をいちいち説明しなければならなかったにちがいありません。しかし、福音の著者は、このような知識は当然のことと思っていました。それは、これらが非常に速い時代に書かれたもので、彼らの間に起こったことを正確に、イエスの生涯のエピソードとして記録したものだからです。

新約聖書のどこを見ても、村に教会があるという記述が全くありません。キリスト教は、最期の頃には、都会の現象だったにちがいありません。それなのに、偽作者たちは、なぜ、鳥だの花だの、百姓だのと、いつもいなかの生活のことばかり、イエスの口から語らせているのでしょうか。

この時代には、偽作の大家たちが横暴していました。彼らは、のちになって、彼ら自身が犯罪人であるときめつけた人の頭に聖者の後光を描きました。もしも、伝道者が偽作者だったならば、このような重大な過ちを犯さなかったでありましょう。また、聖書として、彼らの本を受け取らせることに成功しなかったでしょう。

聖書の記述がその古い年代と同様、歴史的に正確であることを証明している記事がヨハネ福音書一九34に見られます。兵士のひとりが、私たちの十字架の主を槍で突き刺した時、「血と水が出てきた」と書かれています。その理由は書かれていません。しかし、伝道者ヨハネは目撃しました。そして、彼は見たとおりを書きました。その時代の彼のみならず他のだれも、

何が起こったのか説明することができませんでした。それから十八世紀経って、クロロフォルムの発見者であるシンプソン博士が、イエス・キリストの死因は科学用語でいう溢血、あるいは現代用語でいえば、心臓破裂であったと説明しました。人がそのように死ぬと、両腕がぐったりと垂れ下がります。（もちろん、イエスの両腕は、その時、十字架に釘つけられていました。）イエスが叫ばれたように、大声で叫びます。そして「血が心臓に集まって鼓動を止めます。しばらくの間、血が流れなくなります。それは血清（水）と凝固体（血液中の赤血球）に分離します。兵士がわき腹（心臓）を突き刺した時、血と水が流れたのです。」

筆者がありもしなかったことを書いて、それが二千年後に、事実とぴったり符合する厳密な科学的説明がなされるなどということは考えられることでしょうか。

福音書がのちの偽作であるという物語は、のちの偽作そのものの中にあります。

存在しない架空の人間が世界のどの帝国よりもその数において凌駕したキリスト教市民とその文化の全部の創造主であったなどということは、考えられることでしょうか。

二千年間にわたる迫害と、憎悪と、欠乏に耐えて生き残って来たキリスト教帝国のような帝国は、この二千年の間に存在したためしがありません。

キリスト教は世界のもっとも偉大な事実です。―そして、この偉大なる事実が存在しない人間によって作られたと言うのですか。全くばかげたことです。だれがそんなことを信じることができるでしょうか。

ジョン・スチュアート・ミルは書いています。「福音書に書かれているようなキリストは歴史的でないと言うことは、意味のないことだ。彼の弟子たち、あるいは改宗者の中のだれが、いったい、イエスが言ったとされていることや、福音書で明らかにされたその生涯や人柄を作り出すことが出来ただろうか。ガリラヤの漁師たちにそのようなことができないのはきまっていることだし、聖パウロにも出来っこない」

イエスの人格―その神話や柔和だけでなく、人を導き、問題を解決する才能、洞察、伝道者としての能力などを、だれが作り出したと言うのだろうか。

それで、だれがイエスを作り出した人だと言うのだろうか。ユダヤ人たちが彼を作り出したとは考えられません。なぜなら、一世紀においては、彼らの一神教が非常に厳格に主張されていたので、見えざる神の化身としての人間を作り出すなどということはけっして出来ない相談だったからです。

ユダヤ人は他の部族をさげすみました。彼らはサマリヤ人の手から一杯の水を飲むことさえしませんでした。そのような彼らが、異邦人を友とするイエスを作り出すことなどはとても出来なかったことです。彼らは、自ら、選民であると信じていました。どうして、彼らが、すべての民族の差別を取り去り、すべての人を受け入れるような人物を作り出すはずがありましょうか。

初代のクリスチャンたちもまた彼を作り出すことができませんでした。

私たちは、彼らにイエスという人間を作り出すことなど及びもつかない、彼らには彼の美しい名に少しの傷をつけることもできないことは、初めから分かっていることです。

聖パウロが既に書いているとおり、その当時説教した人たちは、みな、大欲、むさぼり、名声欲、自己本位の動機からそうしたのであり、神のことばをねじ曲げていました。欲ばりな、自己中心な伝道者には、イエスを作り出すことなどできません。

そして、たとえ、人びとが肉体となった神を作り出すことに成功したとしても、彼らは、彼を、ユダヤ人として、さげすまれている民族に属する人間として、その中の一大工として、馬小屋のかいば桶の中に生まれ、十字架で死に、死後に一冊の本も残さなかった無学な男として作り出したとは考えられません。

このような事柄は作り出すことのできなかったことです。

悪魔が荒野でイエスを試みた時になされた三つの質問、「あなたが神の子なら、この石に、パンになれといいつけなさい。」「あなたが神の子なら、ここ（神殿の頂）から飛び降りなさい。」『神は御使いたちに命じてあなたを守らせる。』とも、『あなたの足が石に打ち当たることのないように、彼らの手で、あなたをささせる。』とも書いてあるからです。そして、「もしあなたが私を拝むなら、（この世の権力と栄光の）すべてをあなたのものとしましょう。」を引用して、ドストエフスキーは、〝カラマゾフの兄弟〟に次のように書いています。

この世に、実際に、ばかげた奇跡がかかってあったとするならば、それは、この三つの誘惑の日に起こった。これら三つの質問のことばそれ自体が奇跡であった。単に議論のための仮定であるが、悪魔のこれら三つの質問が聖書から全く消され、われらがそれらをもとどおりにしなければならず、そうするために世界中のすべての賢者―支配者、高僧、学者、哲学

者、詩人―が一緒に集められ、この場面にぴったりの三つのことば、三つの人間のことばで、世界と人類の未来の歴史を全部いい表すような、三つの質問を作り出す作業を彼らにさせたと考えることができるとするならば―この世の知恵は、みんなして、荒野で知恵と力のある霊によって、その時、実際にあなたになされた三つの質問に匹敵する深みと力あるものを作り出すことができたと、あなたは考えるだろうか。これらたった三つの質問から、これらの言葉の奇跡から、われらは、はかない人間の知恵によってではなく、絶対の、永遠の知恵をもって、ここでなされなければならいことが分かる。

有名な無神論作家、インガーソルは、イエスについて次のように言いました。

レナンと共に、私はキリストはひとりの完全な人間だったと思う。「ひとにしてもらいたいと思うことは、ひとにもそのようにしなさい。」とは、宗教と道徳の極致である。それは、最高善である。それは、ソクラテス、プラトー、マホメッド、モーセ、あるいは孔子の教えよりもはるかに高いものだった。それは、モーセが神から授かったと言った十戒に取ってかえられた。なぜなら、キリストの「ひとにしなさい」を実践すれば、殺人も、うそも、むさぼりも、あるいは戦争もなくなるにちがいないからである。

完全な人間が非常に不完全な使徒たちによって作り出されたものではないことは明らかです。

福音書の初期の紀元に反対する議論

さて、しかし、公明正大にいきましょう。私たちは自分たちの議論ばかりをたくさんし過ぎて、福音書の初期の起源に反対するアカデミー会員たちの重要な議論を忘れるところでした。それらは三つあります。

（1）福音書は宮から商人たちを追い払ったことを書いています。「しかし、その宮では、何の商売もなされていなかった。」無神論の博士たちは、どうしてそのことが分かるのか書いていません。しかし私たちは、ユダヤのことに関する信頼すべき参考文献であり、私の敵たちよりもこのことではずっと権威のあるタルムードから引用しましょう。学術論文〝ジャパット〟15ページａによると、それは、宮の破壊前四十年に、それはちょうどイエス存命中になりますが、そこに商店がありました。

（2）「聖書はパレスチナのガダレナ地方の二〇〇〇頭のぶたの群れのことを書いている。しかし、ぶたを飼うことは、旧約聖書の時代からユダヤ人たちに対して禁止されていた。それ故、パレスチナにぶたの群れがいたはずがない。」

この議論の結論について、読者の皆様はどのように考えますか。まあ、聞きましょう。アカデミー会員たちが話しています。私たちの国にはそれを禁止する法律がありませんから、とがめだてすることができません。これらの提議がもっともらしく聞こえるでしょうか。

その上、モスクワのアカデミーは地理上の区分を知らねばなりません。ガダラはヨルダンの東、ペラエにありました。その地方はおそらく、パレスチナの領土ではなく、住民はユダヤ人だけではありませんでした。

（3）福音書の著者たちはユダヤ人ではあり得ない。なぜなら、この著者たちは、その当時パレスチナに住みついていた野ねこ、ジャッカル、パンサーなどの動物のことを書いていないから。

またなんと確信に満ちた言いかた。

それで、思い出しますが、〝無神論学習書〟はソビエト連邦で書かれたものではない、なぜならそこで、しらみや、南京虫や、ねずみのことが書かれていないからという考えに導くことができます。しかし、どれほど多くのクリスチャンたちが、恐怖の初期の年代に、刑務所でこれらに苦しめられたかを私は知っています。

私は、私の敵たちに公正に対処しました。私は、また、単に私の考えだけでなく、福音書についての彼らの議論を考えました。それは、読者の皆様がこれら二つの考えを比較検討するためです。

新約聖書のメッセージ

新約聖書が幻覚による、のちの偽作であるという批評は根拠のないものです。

しかし、もしそうなら、なぜ批評するのでしょう。

新約聖書が悪い本だったと仮定しましょう。それなら、どうしてそれに反証するために七〇〇ページもの論文が書かれなければならないのでしょう。毎年、ソ連には良い小説、悪い小説

―時には非常に悪い―読み物が現れます。だれひとり、長い年月をかけて、悪い小説に対する全世界的な規模な反対運動をする人はいません。共産党の路線はくるくる変わります。重要と考えられていた本が突然燃やされます。二十年前には、だれもスターリンの本をないがしろにすることができませんでした。しかし、ある日突然、命令が下りました。この本は、いっぺんになくなりました。だれもそれに反対する者がいません。それらは、あたかも書かれなかったように、沈黙のうちに葬られました。その後、フルシチョフが、彼がスターリンの追徒者であったことが読者に気づかれないようによく編集されて、出版されはじめました。これらの本も、また、消え失せました。なんの反論もありません。だれひとり、トロッキーの多数の論文に反論する者がいません。

なぜ、新約聖書を批判し、これを粉々に破り捨てるようなことが行われるのでしょうか。いっぽうでは、同時に、ソビエトの大衆は、聖書から自分たちの考えを引き出すための写しを持つことも禁じられているのです。

信仰というものは、公に試された証拠の上に立つものでなければなりません。科学が暗示することは、特定の真理の重要性ではなく、真理を追究し、しばりつけられ、制限されているその有用性を引き出す権利です。特定の信仰はそれが反対者に対して正当化される時だけ、命脈を保つことができます。

それなのに、どうして諸君は人びとに新約聖書を持たせないようにするのでしょう。

その理由は、福音と新約聖書が全体として、すべての人に必要な最も重要なメッセージを含んでいるからです。

料理人がいないのにおいしいごちそうが食べられるなどということが考えられるでしょうか。自然は宴会です。そこには、天然の小麦があり、いもがあり、牛乳があり、肉があり、さまざまな種類の果物があります。そこには、光があり、雨があり、美しい花や、小鳥のさえずりがあります。そこにはあなたがたの肉体を楽しませ、あなたがたの魂を喜ばせる、役に立つにものや、美しいものがあります。だれが自然の宴会の料理人でしょう。それは聡明な創造主、神です。

こんな話があります。ある科学者が研究室から家に帰って来ると、彼の妻が夕食ですよと言いました。彼の前にサラダが運ばれて来ました。無神論者の彼が言いました。「もし、レタスの葉、塩のつぶ、ソースや油のしずく、うすぎりにした卵が永遠の昔から空中に浮いていたとしたら、ある時偶然にサラダが出来上がったかもしれない。」「そうね。」と彼の妻が答えま

した。「でも、私の作ったのより、見た目も、味もよくないわよ。」原子が無造作に結合しても、こんなに美しい宇宙はできなかったに違いありません。

原子は神秘です。いのちは神秘です。科学者たちは、その秘密を発見するところから遠いところにいます。それならば、物質や生命の創造主なる神については、もっとそうです。ヨハネの福音書はこう言っています。「神を見た者はいない。」モーセが、「わたしに分かるように、あなたの顔を見せて下さい。」と主なる神に尋ねた時、至上命令の答えが返って来ました。「あなたは、わたしの顔を見ることができない。人はわたしの顔をみると、死ぬ。」

どんな哲学者も彼を理解できません。しかしどんな素朴な人でも彼を理解できます。それは、ちょうど、どんな科学者も原子の秘密を理解できないが、しかし、どんな人でも原子から出来ている物質を操作することができるのと同じです。

新約聖書は、この神について私たちに語っています。また、自然についても語っています。

私は共産党員である刑務所の係官と話しをしたことがあります。彼は私に打ちあけ話をしてくれました。「ある秋の日に、わたしが窓越しに木の葉の落ちた裸の木を眺めておりました。春になれば、また、芽ぶき、小鳥がさえずるようになるのを私は知っていました。そして、わたしは、力、あるいは見えざる人を崇えます。わたしは、それがだれで、何であるか知りません。それは善をもって悪に酬います。そして、時には、醜い生活、それまで悪党だった人の生活を、聖なることのために殉教する美しい生活に変えます。わたしは、あなたがたクリスチャンの中に、そのような人がいるのを知っています。」この共産党員は神が理解できませんでしたが、実は、すでに神を理解していたのです。

私たちがイコン（宗教絵）に見るように、玉座に白いひげをはやして坐っているというような、神についての原始的な概念を笑うことは〝無神論学習書〟にとって簡単です。

クリスチャンは子供の頃、神について子供らしい方法で教えられます。彼らの多くは、おとなになってから、聖書のことばを、子供らしいことに置きかえる過ちを犯します。彼らには子供じみた考えが残っています。それは簡単に、無神論者の物笑いの種になります。しかし、神はそのような未成熟な概念とは全く違うお方です。

これらの宗教絵は、偉大な科学者ニールス・ボーアによって画かれた原子の絵ほどばかげたものではありません。原子は画ことのできないものです。そして神は、私たちが考えている以上のお方です。しかし、科学は近道なしには何もなし得ませんでした。私たちクリスチャンも、人間の言葉を用い、神についての私たちの感情を表現するために絵を画きます。しかし、

私たちの偉大なる教師のひとりである聖トマス・アキナスは、次のように書きました。「神はあなたがたが考えているような、あるいは、あなたがたが理解していると思っているようなお方ではない。もし分かっているなら、あなたは間違いを犯しているのだ。」

私たちの心はあまりにも小さ過ぎるので、無限なるお方を包含することができないのです。しかし―先に言いましたように―私たちは彼を理解することができます。

ひとりのクリスチャンが、ある時無神論者といっしょに草原を連れ立って歩きながら尋ねました。「だれがこんな美しい花を造ったんでしょう。」「知らないね。」と相手が答えました。「神についてのばかげた話は二度とくり返さないでくれたまえ。花は自ら存在しているんだ。」クリスチャンはそれ以上言いませんでした。数日後、この同じ無神論者が彼の家を訪ねてきました。彼は、居間に美しい花を画いた絵を飾っていました。無神論者が彼に尋ねました。「だれがこれを画いたのかね。」クリスチャンが答えました。「宗教くさいばかばなしはやめてください。この花はだれが画いたものでもない。花は自分で絵の中にはいり込んできたのです。自然が額ぶちを造りました。そして自分で、それは壁にとびついて、だれの手も借りずに、ちょうどそこにあった釘にひっかかったのです。それだけのことですよ。」無神論者が悪い冗談を言いました。しかし、そのあとでクリスチャンが尋ねました。「谷間や丘の上で強い香りを放つなん千なん万という生きてる花が創造主によって造られたものでないと信じられているのに、香りも、いのちもない絵の中の三本の花がだれかによって創造されたものだと信じることは理屈に合っているでしょうか。」

神は神秘です。イエスは私たちに教えて言われました。「天にいます私たちのお父さま」であって「街を歩いている、どこでも見かけるような、お父さまではない」と。彼は世界の変わり者です。

蝶は板にピンでとめたら、それは死んだものです。それはもう蝶ではなく、死骸です。そのように、私たちは神をどのような定義の中にも閉じ込めることができません。私たちは、不適当であると知りながらも、彼に名まえを付けます。私たちが彼について言うことの出来る最上のことは、彼以上に偉大なものは考えることのできないお方、です。

しかし、神は、かつてこの地上に来られた神の子イエス・キリストの人格においてご自身を現わされました。彼について、新約聖書は語っています。多くの人たちが彼によって生涯を変えられました。

愚かにも〝無神論学習書〟は、キリストの教えは、生のよろこびを破壊すると言っています。よろこびを捨てたら、クリスチャンではありません。よろこびを拒絶することは、私たちクリスチャンが神の被造物であると考えることを拒絶することです。どうして、よき父が私たちに与えられたものを私たちが拒絶しなければならないのでしょうか。旧約聖書は、人は短い一季節の間に地上の全部の楽しみを捨てると誓うものだと限定しました。この季節が過ぎ去ると、彼は神のすばらしい賜物を侮った罪のためのあがないとして、神に犠牲を持って行かなければなりませんでした。キリスト教は人のよろこびを奪い取ることはしません。反対に、キリスト教は、真の地上のよろこびに、天のよろこびを付加します。愛のよろこび以上の大きなよろこびはあるでしょうか。

私たちに向けられるこれらすべての証明できない愚かなこと、特に、クリスチャン作家が答えることができないでいるようなことに耳を借さないでください。無神論者は彼らが書きたてているのに私たちの口をふさいでいるという明白な事実は、彼らが不公平でそれ故信頼できないことを示しています。

あなたがたの信仰を神に置きなさい。

この神は私たちと共に苦しんでおられる。彼は私たちすべてと悲しみを共にされる。彼は私たちのために御自身を犠牲にされる。彼は私たちをのぞんでおられる。

マルクスと歴史的唯物論は、そのまさしく魂の実体、神を奪い取り、そしてそれを荒廃させました。

神についての知識は、この世を深く知るための鍵です。私たちは実体と神を別々に持ち合わせておりません。しかし、神の美に包まれた実体を持っています。同じように、絵の中に、私たちは風景と夕日を別々に持つことはできません。そうではなく、すべての山や谷が夕焼けに染まっているのです。

タイのある洞穴で、人間や魚を置いた先史時代の絵が発見されました。その中には〝X線風〟と言われる絵があります。三千年以上もむかしの芸術家が、彼が見ることのできなかったが、存在することを知っていた微細なものを画いています。人間や動物を画きながら、彼は頭蓋骨やその器官を、胃や肺と同じように画きました。このような画は、初期のオーストラリア原住民の間にも見られます。

私たちは、このような絵を原始的だと考えます。それは私たちの絵のように美しくないかもしれませんが、それはもっと実体に近いのです。肖像画の画室で私たちが見る画かれたものは

もとの対象ではなく、よそ行きの着物です。ひとつの対象について、私たちが見ることのできるのは、顔と手だけです。もし、裸になれば、私たちははだを見ることができます。私たちはごくわずかなもので満足しています。原始の芸術家はもっと実体に近づきたいと思ったのです。なぜなら、感覚的に、彼は詭弁的な現代人よりも、ずっと実体に近かったからです。

新約聖書は世界と歴史について同じ〝X線〟の方法で語っています。唯物論者は、単に、物ごとの外面だけを見ます。信者は、外面なことだけでなく、それに加えて、うちにあって世界と歴史を浮かすもの、その被造物に働き、行動するとき愛としてご自身を現わしなさる神を見ます。

神は私たちのために、御自身の御子、イエス・キリストをたまいました。パンやがあなたがたのパンを心配し、お百姓が野菜の心配をするように靴やがあなたにその製品を供給するように、学者が世界中から集めた知識をあなたに与えて、あなたを啓発するように、一度も罪を犯したことのない唯一のお方なる神の子イエスは、あなたのために心配してくださったのです。彼はご自身の義をあなたに与えます。あなたは新しく生まれた赤ん坊のようになり、一度も罪を犯さなかった者になります。神と一つになった新しい生涯が始まります。あなたの罪のために、彼は身代わりとなってくださったのです。

あなたは、あなたの罪が非常に重大なものであったと、いくらか感じています。その罪が他の人の中に苦しみを作り出しました。多分、涙と血が流されました。そして、あなたには罪があります。そうです。彼（イエス）は、あなたの罪だけでなく、あなたの罪の罰も受けました。彼は、エルサレムの近くのゴルゴタと呼ばれる山上で、十字架で死に、それを受けました。彼の傷によって、私たちは癒されます。

新約聖書は言います。「神は、そのひとり子をくださるほどにこの世を愛された。それは彼を信じる者はだれでも滅びないで永遠のいのちを得るためである。」（ヨハネ三16）〝だれでも〟ということばに注意してください。〝無神論学者〟の著者でも、だれでも、です。最大の罪を犯した人でさえも、です。

新約聖書は、イエスが私たちの心の扉の前に立って、いつも叩いていると私たちに教えます。もしだれでも、彼の声を聞いて戸を開くなら、彼は中にはいって、彼と心と心で語り合います。

生活は国のために働くためにだけあるのではありません。食べることも、飲むことも、セックスを楽しむことも生活です。キリストは霊的存在です。彼はあなたに、罪と死と地獄に勝た

しめたいと願っておられます。そして、あなたの決断だけを待っておられます。そして彼は来るべき天国のみならず、あなたの魂に、今すぐ、元国の生活を約束しておられます。

新約聖書は、神の子キリストはとても人たちを愛されたので、十字架の苦しみに耐えながらも彼を殺す者たちのために祈られたと、私たちに教えます。あなたはどろぼうだったかもしれません。キリストは二人のどろぼうと一緒に死にました。十字架にかかりながら、悔い改めた彼らの一人を、パラダイスに救われました。彼は悪党や売春婦を避けませんでした。大きな罪を赦すことが、彼の最大のよろこびでした。

新約聖書は無神論者によって非難されます。その理由は、それが生活の指導原理として愛を口説き、人の心に天の一隅を作るからです。心は正直に考えはじめます。なぜなら、人生のあやまちは、しばしば愛の欠如によることが少なくないからです。一度、キリストなる真理の鏡をじっと見つめると、全人類に対する大いなるあわれみがあなたの魂に満ちて来て、あなたは驚くほど自由になるでしょう。

ソビエトの大衆は新約聖書のメッセージを禁止されているので知ることができません。その理由はそれが彼らを神と一つにするからです。それ故、それに対して、激しく、理由もなく攻撃するのです。罪とあがないの偉大なる実体に対するこの深い洞察を持っている私たちクリスチャンには、どうして私たちの友人の無神論者が十字架の前に身震いし、それに反対して七〇〇ページもの本を書くのか、容易に理解できます。ありがたくない直感ながら、無神論者は聖書は最終的な真理を含んでいると感じています。

スターリンは死にましたが、共産主義者のだれも、「スターリンわが魂の愛する者」とは歌いません。また、「フルシチョフ、わが最愛の人」とも歌いません。またその子孫が、今後一〇〇年間、プレジェネフに対して、「わたしには、いつもあなたが必要」と歌うこともないでしょう。

しかし、イエスさまについては世界中で、彼が十字架に死んでから二千年たった今も、このように歌われています。

そして、彼らがどんなに努力しても、聖なる母国ロシアでこれらの歌をうたわせないようにすることはできません！

彼らについては、何の歌もうたわれないでしょう。

既に、今日彼らについて語られている冗談が、彼らが将来受ける評判がどんなものか示しています。

世界にはたくさんの悲しみがあります。世界には笑いが必要です。私は人びとの喜ぶのがとても好きなので、みんなが私のばかさかげんを笑っても、気にしません。私は、私の敵が同じ感情を持ってくれることを希望します。そして彼らが、私がロシアにいきわたっている二つの冗談を彼らに語っても、悪い気持ちを起こさないように希望します。

第一、高等学校の生徒が、歴史の時間に、「スターリンとはだれか」と質問されました。彼は答えました。「自己礼賛が好きで、人殺しになった人です。彼は身近な同志をさえ殺しました。これが私たちの二十回党大会が私たちに教えていることです。」

「よろしい。」と教授が言いました。「それでは、どうぞ答えてください。フルシチョフはどういう人でしたか。」

直ちに、その少年は答えました。「フルシチョフは、中央委員会の決定によって、正当に指導部から追放された、ばか者でした」

「それも、よろしい。それでは最後の質問。プレジェネフとはどんな人ですか。」

「彼はもうひとりのばか者です。」という答えが返ってきました。

教授が彼を止めました。「それは、賛成決議の行われる一、二年後には、多分、ほんとうになるでしょう。それまでは、彼は天才的な指導者です。それで、あなたの答えは間違いです。」

二つめの冗談。学校で、先生が生徒に教えました。「党は私たちの父です。そして、赤軍は私たちの母です」それから、彼は子供のひとりに尋ねます。「あなたは何になりたいと思いますか。」子供は答えます。「孤児」。

人々はイエスさまを愛しています。ある者たちは彼を憎んでいます。大部分の人たちは彼のメッセージに無関心です。しかし、今までに、だれひとり、彼について悪意のある冗談を言った人がいません。

聖書に対する不敬な攻撃

新約聖書の批評から、〝無神論学習書〟は聖書全体の批評に移ります。ここでも、また、攻撃が通俗的で、浅薄なのは残念です。私たちはもっとほかのことを期待したいのです。上品で、寛大な不信仰の形というものもあります。

たとえば、ルドウィヒ・フォイエルバッハの無神論がそれです。彼は神を信じませんでしたが、人間を、高貴に、やさしく、正しくする宗教は残しておきたいと思いました。フォイエルバッハ（〝キリスト教の本質〟第二巻）は、宗教を〝聖〟と呼んでいます。なぜなら、それは彼にとっては子供時代を意味する〝最初の良心の伝統〟だからです。人類の幼児期の思い出をとどめて置くことは美しいことではありませんか、と彼は尋ねています。

イエスさまは、宗教を子供らしいと呼ぶことに反対なさらないと思います。彼は私たちに幼子のようになりなさいと教えました。私たちは、皆、子供時代の思い出を大事にします。そうしてそれらを、共産党がそうするように、邪険に放り出すのですか。それは彼らに、彼らの魂が今よりももっと美しかった時のこと思い出せるからではないでしょうか。

私たちは、私たちの敵が、オノレ・ド・バルザックの〝無神論者の祈り〟を読むように推薦したいと思います。主役は無神論の外科医、デスプレインです。彼が非常に貧乏で飢えた学生だった時、クリスチャンの愛によって生き生きしているポールギートという名まえの水運搬人が、重労働と個人的な犠牲を払って彼を助けました。その後、彼は有名な医者になりました。

その時、デスプレインは不信心者でした。しかし、ポールギートは死に床から、彼に、彼の魂の平安のために祈ってくれるように頼みました。その時、この無神論者の教授は感謝の念に打たれて、そうすることに同意しました。それからというものは、彼はいつも、彼にいいことをした病気の信者のために、頼まれると祈ってあげるのでした。

私たちは無神論者に対して理解を示そうとしましたが、しかし、私たちは、教養ある無神論者が、彼らの教養は聖書によるということを認め、少なくとも、彼らの攻撃が上品であることを期待する権利を持っていると思います。

フリードリッヒ・ニーチェは、「神は死んだ」と宣言した最初の人でした。彼はヒットラーのお気に入りの哲学者でした。ヒットラーは正しい結論を引き出しました。もし神が死んだのなら、彼ヒットラーは、何百万もの無実な人や、子供たちさえも殺すことに、なんらためらう必要はありませんでした。しかし、ニーチェは彼の将来の弟子とはだいぶかけ離れておりました。ニーチェは聖なる恐れをもって神の死について語りました。彼の狂人は、神の死を宣言したあと、違う教会に行って、神の死をうたむ讃美歌、〝鎮魂歌〟をうたいます。ニーチェに対

して、神は死にました。彼にとって、この結論は高いドラマの源でした。しかし、人は、彼の神がもはや生きていないということを彼が本気で悲しんだと感づくことができます。

〝無神論学習書〟の著者たちとそれはちょうど正反対です。彼らは神の死を喜んでいます。今、彼らはもはや、良心、事実、そして愛について気にする必要がありません。彼らはしたいほうだいのことをすることができます。

一時、フランス共産党中央委員会のメンバーであった、R・ガラウディは書いています。

「われわれは、もっと貧しくならなければ、キリスト教の本質的な寄写を無視できない。」

（対話に対する呪いから）

かつてソビエト政府の教育相であったラナチャルスキーは書いています。「神の概念は、いつも、何か不変の美しさを含んでいる。……悲しみは、いつも、人々のうちに宿っている。世界を宗教的に考える方法を知らない人は、悲観論にならざるを得ない。……」

共産党の無神論者は、彼ら自身にとって正しい思想の歴史を、悲劇的結末をもって始めます。彼らは、数千年の発展期間に人類によって捕獲された真理に負うことを無視するかそれとも探ね求めるかどちらかでなければなりません。

当然の結果として、彼らは宗教を風刺します。私たちは、このことを残念に思います。風刺は、いつも、それをする人たちにとって危険だからです。

ある時、ある若い婦人が、画板の前に立っている偉大な風刺詩作者ホガルスと論じ合いました。彼女は風刺詩の書き方を学びたいと言いました。それに対して、ホガルスは答えました。

「ああ、お若い方、それはうらやましがられるようなものではありません。私の忠告をお聞きなさい。けっして風刺詩を書こうなどと考えてはいけません。それを長く続けてきた結果、私は美のよろこびを失いました。私はゆがめられた顔しか見ることができなくなってしまっています。私は神性な人間の顔を見る満足を持つことができなくなっています。」

真の宗教を風刺する人々は、同じような立場にいます。彼らのねじけた心のゆがんだ鏡にうつるものは、天使でさえも悪魔の顔に見えます。

彼らは、もしも聖書が価値のない本としてしりぞけられるとするならば、それとともに、世のあらゆる有名な文字が消滅するであろうことに気が付いていません。ドストエフスキー、トルストイ、ミルトン、ジョン・バンヤン、ウォルター・スコット、アナトール・フランスのどれが残ることができるでしょう。テニスンは、彼が読んだ中、聖書のヨブ記は最高の詩である

と言いました。彼の作品には聖書から三百の引用があります。シェイクスピア、そこから五百以上の思想や章節を引用しました。バイロンの詩〝暗黒〟はエレミヤ書から霊感を受けました。

マルクスの〝資本論〟さえ、彼のほかの著作やエンゲルスの作品といっしょに変更されなければなりません。なぜなら、それらは、聖書から引用でいっぱいだからです。

もし聖書が取り上げられてなくなってしまったら、ミケランジェロ・ラファエル、レオナルド・ダ・ビンチ、レンブラント、その他世界の多くの偉大な画家たちは理解しがたいものになってしまうでしょう。バッハ、ベートーベン、モーツァルト、ハイドン、ブラームス、その他の多くの偉大な音楽も作品も同様です。

著名人の証言を聞いて下さい。

四度、大円帝国の首相を務めたウィリアム・グラッドストンは言いました。「この人間の心の深い悲しみをいやすものは何か、試練の中で彼を支え、言い難い苦しみを慰めることのできる力として、人が特に見るものは何であるかと問うならば、私は、有名な讃美歌の中で、『むかし、むかしの物語り』と呼ばれている何かを、その人に指摘してあげねばならない。それは、人類に与えられた、最高、最善の贈り物である。」彼は聖書を引き合いに出したのでありました。

ジャン・ジャック・ルソーは書いています。「聖書と比較するならば、すべて矛盾だらけの哲学者どもの言葉は、なんとみじめで、なんと卑しむべきものであろうか。かくも素朴で、かくも壮厳な本が、単に人間のことばであるはずがあろうか。」

ゲーテは書いています。「聖書は、理解されればされるほど、いっそう美しくなる。」

ハインリッヒ・ハイネは、宗教的な熱狂者からほど遠い人でしたが、こう書いています。「……天の青い神秘の中に書かれた創造の深み。日の出と日没。約束と成就。生と死。人間のドラマの全部―何から何まで、この本にはある。それは本の中の本、聖書である。」

ある意味で、英語とドイツ語は、聖書によって変形させられなかったならば、いまあるものとはちがうものだったかもしれません。何百という国民や部族に、最初の文字を与える原動力となったのは、この一冊の本です。献身した男女の労働をとおして、それは、彼らが読むことを学ぶ最初の本です。

祖国を解放し、統一したイタリアの愛国者ガリバルディは、聖書について、こう言いました。「これこそ、イタリアを自由にする大砲である」

以下は、アメリカの最も有名な大統領の、いくつかの証言です。

ワシントン。「結局、黙示録の汚れのない、まっすぐな光が、人類に輝かしい影響を与え、社会の祝福を増進させた」

リンカーン。「私は、いつも、神の議会を召集し、私の計画を彼に訪問し、彼の提案であると確信することなしには、進行中の方針を変えるようなことはしないことにしている。私がこの立場にいて、私に課せられた義務を、何ものよりも賢明で力あるお方の助けと示唆なしに果たそうとするときがあるならば、ここで、私は最も生意気な、のろまになってしまうだろう」

グラント。「あなたの自由のいかりとして、聖書にしっかりとしがみつきなさい。その戒めを心に書きつけて、それを生活の中で実行しなさい。真の文明におけるすべての進歩はこの本の感化に負うており、この本に、私たちは将来の導きを求めなければならない」

ガーフィールド。「あなたの永遠の友、、また助け手として、死なざるイエスを選びなさい。ナザレとび、ガラリヤ出身の人物としてだけでなく、生と死と永遠の時にわたってあなたのそばにいてくださる、永遠に生きる霊の人、愛と慈しみに満ちた人として、彼に従いなさい。この世の希望は誤りである。しかし、ぶどうが枝に実るように、キリストはクリスチャンのうちに住み、彼は永遠に死ぬことがない」

マッキンリー。「われわれは、聞くだけでなく、実行する者でなければならい。みことばの実行者となるには、まず、われわれがみことばを聞く者となることが必要である。しかし、教会に出席するだけでは足りない。われわれは聖書を学ばねばならないことが、そこにとどまっていてはいけない。われわれは、それは実生活の中にも生かさなければならない」

ウイルソン。「もしもアメリカのすべての人が、毎日、聖書の一章を読むとするならば、わが国の大部分の問題は消滅するだろう」

フランクリン・D・ルーズベルト。「私は、これまでになんどか言ったことをもう一度くり返す。―この国がもっとも必要としているものは、宗教の復興である。この復興によって、われわれは、政治、経済、社会のあらゆるわれわれの問題を解決できるようになる。」

しかし、共産主義者自身はどうでしょうか。

マルクスは書きました。「ルターは、自国語の聖書を人びとに与えることによって、彼らの手に遺族、地主、聖職に反対する強力な武器を渡した。」

スターリンとミコヤンは、ふたりとも神学生でした。後者な神学の学位まで持っていました。彼らの教養な基礎となったのは、聖書でした。フルシチョフはおおやけに告白して、聖書から読むことを学んだと言いました。社会主義者の憲法の根本思想―「働かざる者、食うべからず」は、聖書からの引用です。（Ⅱテサロニケ三 10）

共産主義の思想は、全部聖書から取ったものです。そこには、次のように書いています。

「（イエスを）信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。……彼らの中に乏しい者はひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金を持ってきて、使徒たちの足元に置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた」（使徒四 32～35）

イエスの最初の弟子たちは、共産主義のもとに生きていました。しかし、愛と自由な意思にもとずく共産主義でありました。だれも強制されず、何一つ没収されませんでした。愛がすべての人をかりたてて、兄弟と分かち合わせたのです。似ても似つかぬものながら、今日の共産主義に起源も、また、聖書にあります。

聖書を信じない人がいるのは認めますが、その遺産に敬意を払うのを妨げてはいけません。ヨーロッパで印刷された最初の本が聖書であったことは、まぎれもない事実です。キリスト教の宣教師が、アフリカ原住民に人食いの習慣をやめさせ、読むことと、文明人として振る舞うことを押し得たのは、まぎれもない事実です。

以前、人食い人種だったい人が、ある時、共産党の宣伝要員に言いました。「なんだって。この本がほんとうではないだって。わたしはそれを家に持っています。ひざまずいて、それを読みます。するとわたしの心はよろこびで燃えてきます。どうして、これがうそのはずがありましょう。わたしは、人肉を食い、飲んべいで、盗びとで、うそつきでした。この本がわたしに語ってくれたので、わたしは新しい人間になりました。いや、この本はうそでありません。」

もしも宣教師たちが、彼らに最初にキリスト教の信仰を教えなかったならば、共産党の宣伝要員は世界のいたるところで土着民に食べられてしまっていたにちがいありません。いっぽう

で無神論を広めながら、これらの宣伝要員たちは、文明を創造し、彼らに働く自由を与えたことについて、キリスト教に感謝しなければなりません。

りっぱな無神論者は、人類がキリスト教に負うところのもののために、ていねいに教会の前で頭を下げなければなりません。しかしもしも泉につばをするならば、そこから、あなたと文明世界の全部は恐ろしく汚いものを飲まなければなりません。

十七世紀に、ユダヤ人の間に無神論者がまれであった頃、ひとりのユダヤ人がラビにいいました。「わたしは神を信じない。」ラビはその人を抱き寄せていいました。「兄弟、わたしはなんとあなたをねたましく思うことだろう。あなたは、わたしよりはるかに霊的に良い状態にいます。わたしは悩める人を見る時、わたしはひとりごとをいいます。〝神は彼を助ける〟と。そして、その人を助けてやろうとしません。あなたは神の存在を信じていません。それで、あなたは彼を助けなければなりません。あなたは、もしも神がいるならば、神がなすことをなさねばなりません。今、行って、そのようにしなさい。飢えを養い、病める心を慰め、求める人に真理と喜びを与え、すべての人を愛をもって抱擁し、いつも、もしも神がいますならば、神がなされるようにしなさい。そして、それから一年たって帰って来て、神がいますかいないかを、わたしに告げてください。」

このラビは、彼の無神論から最善のものを引き出すように彼を勇気づけるために、無神論者に対して優しい態度を取ることができたのでした。あなたがた、私の共産党の敵たちは、信者に対して、このような態度は取りません。

あなたがたは、もっと低いところに生きており、あなたの立っているところは、みな、もろいうのです。

無神論学習書は私たちの理性に訴えて、その点を証明しようと議論をもちかけます。今、もしもこの著者たちが、私たちが論じることが出来ると認めるならば、どうしてソ連の本屋にはどこにも聖書がないのでしょうか。大衆は自分たちでそれを読むことができなければなりません。その敵が何を言うべきなのかをそれと比較し、その後、彼ら自身の結論を引き出さなければなりません。どうして聖書が燃やされるのですか。あなたがたは、〝正当に〟論ずる人間の力を信じないのですか。それなら、どうしてわざわざ議論をする必要があるのですか。ただ、〝信じるな！〟という命令を出しさえすればいいではありませんか。そして、それでもっと全部を片づければよいではありませんか。

アダムとエバはすべての一般人の原型です

聖書原典に対する批評は、人間精神の当然の関心事です。クリスチャン神学者たちは、〝無神論学習書〟の指摘を待つまでもなく、聖書と世俗の年代を調和させ、考古学資料を分析して聖書の歴史を立証しました。私たちが、神の霊感と聖書の無謬を信じているという事実は、その原典とその内容をつぶさに吟味する妨げにはなりませんでした。間違いなく、私たちは、神がそれに霊を吹き込まれた、のちの写真家や翻訳家たちのよってそこなわれたことのない聖書を持っています。

しかし、私たちの無神論の敵によってなされる聖書批評は、全くちがう種類のものです。彼らは聖書の物語りの最も重要な出来事を否定し、基本となる聖書の人物を神話の領域に追放します。

クリスチャンは、聖書が科学の本であるとは考えます。それはたくさんの詩や象徴主義を含む何千年も前の東洋の作品です。そして、それは、現代の科学の教科書として使えるものではありません。

〝無神論学習書〟の著者たちにとって、アダムとエバは神話の人物です。

アダムとエバが実際にエデンの園で生活していた、そしてそこから追放されたという聖書の記録を否定する確かな理由は何もありません。人類によって保存されているほかの歴史上の記録を理由もなく投げ捨てないのと同じです。

しかし、私たちの敵は、神話を持ち出すことによって、私たちに奉仕してくれます。神話は非現実的なものではありません。それどころか、むしろ、形となって現れ、訴える現象や象徴で、人間の魂の深みを表現した最高の現実です。

アダムとエバの物語りは、歴史以上のものです。それは神話であると同時に、歴史です。

私の敵である皆さま、あなたがた自身の生活は、アダムとエバに起こったことの繰り返しです。大きな問題にわずらわされない世界には、子供らしい無邪気さがありました。きっと、あなたがたは思い出すことでしょうが、あなたがたがそれによって生活していた道徳律を犯して、罪が最初のあなたがたの生活の中に侵入したとき、あなたがたは神から隠れたではありま

せんか。のちには、それは、党からあなたがたの行跡を隠すという形を取ったかもしれません。私たちは、私たちの始祖を責めるべきではありません。もしもアダムとエバが罪を犯さなかったとしても、私たちは禁じられた木の実を食べたかもしれないからです。

アダムとエバは、すべての魂によって引き起こされる一般人の経験の原型です。神話は現実とくい違うものではありません。それらは、非常にしばしば隔離された何かの事実の意味の典型をそこにのぞかせます。あなたがたは、モナ・リザの価値を、それが単なる肖像画であるからと言って、無視することができません。それは、生きている人間の肖像画です。肖像画は、それが示す人間と同様に現実です。モナ・リザは、ある意味で、それが写した人物よりも、もっと現実でさえあります。それは、さらに美しく、さらに永遠です。それは、彼女の最良の姿の集大成です。それは自然を正します。肖像は人物を否定するものではありません。アダムとエバの物語りの霊的な意味は、彼らが歴史上の人物であることを否定するものではありません。

私がアダムとエバについて語ったことは、罪の贖い、キリストの犠牲にも当てはまります。何か悪いことをした人は、だれでも、身代わり、だれか彼自身の罪の代かを払ってくれる人を探します。罪びとの中に宿るこの心理的な律法をご存じのキリストは、自らを身代わりとして捧げられたのです。神の御子なる彼は、善であれ、悪であれ、私たちの全生涯のすべての責任を取られます。彼は愛の心から、御自身を私たちと同一のものと考えられました。そして、私たちの罰を受けられました。ゴルゴタの十字架で、彼が耐えられたことが、あたかも、私たち自身が彼の悩みの全部を通過したかのように、私たちに役立ちます。私たちは、キリストが私たちのために御自身の血を流されたことによって罪と罰から解き放たれます。その後、彼は、死人から生き返り、彼を信じる私たちもまた、パラダイスでよみがえって、彼と共にいるようになることを、私たちに示されました。

彼の死と復活は、歴史の現実です。しかし、罪のための犠牲として死んで生き返る神についての神話は、キリスト以前のものです。〝無神論学習書〟は、エジプトのホラス神や、ミトラ神や、その他の神が、ほとんど同じように信じられていると私たちに言うのは、間違っています。キリストとちがって、これらの神々は歴史上のものではなく、原型だけの実体です。これらの〝神々〟はみな、人類にたいして、そしてキリストの再臨の前ぶれという意味において約束された真正の贖い主の偽せものでした。ホラスも、ミトラも、デオニサスも、人類が待ち望んでいた罪からの救い主に与えられた名まえでありました。そして、クン＝インや、アイシス

や、ダイアナは、清純、柔和、自己犠牲、そしてすべての女性の徳の完全な姿を熱望する表れである、主の母の前ぶれでありました。

私たちの敵が、アダムと、エバと、堕落後に彼らに約束された贖い主を、天国の神話と呼んでも気にしません。

全世界を破壊したノアの時代の供水だって？別の伝説もある、と私たちの敵は言います。

しかし、聖書の物語りは、洪水の物語りが、中国、ギリシャ、イギリス、メキシコにあることによって、かえって裏づけられます。一八七〇年にバビロニヤで発掘された楔形文字版にも、大洪水のことが書かれてありました。それは聖書の記録と似ているので、注目されています。BC三〇〇〇年頃に、大洪水をなまなましく想い出した人たちが、この石板を書いたのにちがいないと考えられています。

ギルガベシュ叙事詩と呼ばれているこの物語は、大洪水の英雄ウトナピシュティムが、どのようにして人類全滅から逃れることができたかを書いています。シュルパク（現在のファラ）の古代都市の偉大なる神々は、洪水によって人類を滅ぼす決心をしました。エア神はウトナピシュティムに天のおきてを開いて、彼とその家族を救いました。

アッシリアやバビロンより以前の言語、サマリヤ語で書かれた別の洪水の物語りが発見されました。

有名な人類学者、サー・ジェームズ・フレイザーは、さまざまな遠い地域、たとえば、リーワド群島、ベンガル、中国、マレーシアなどの洪水の伝説を収集しました。どこの地方の人々も、後進部族も、この恐ろしい出来事を記憶にとどめています。彼らは、大筋において、大洪水は重大な罪の罰であって、ただ僅かな正しい人が救われると認めています。

ヨセフス・フラビウスは、一般に、最も信頼できる古代歴史学者と考えられています。彼は、〝ユダヤ古代史〟で、こう書いています。「アルメニア人は、この場所（ノアとその家族が箱舟から降りた所）を、〝アポパテリオン〟降り立った場所と言います。」

洪水の物語で、事実と神話が、また入り混ります。

人間の心の最も深いところに刻み込まれた真理は、一般化した重大な罪が破局を引き起こすだろうということです。私たちは、また僅かな義人が、奇跡的に、一般の破壊から彼らを救った数々の場面があったことを知っています。洪水の歴史物語が、この真理を表現する伝説と共

に、多くの人々の記憶の中におおいかぶさっています。これらの伝説は、洪水そのものと同様に現実です。

ノアの時代の洪水は、特別な出来事ではありませんでした。イエスは言われます。「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらっていくまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう。」（マタイ二四 37〜39）

世界は、今や、罪びとたちのために、新しい破局の瀬戸際にいます。聖書はこの時、それは、火によって滅ぼされるだろと言っています。（「分子は燃える熱で融かされるだろう。」このことばは二千年前に漁師のペテロによって書かれたものです。その頃は、だれも、化学分子や、破壊力や、原子核分裂や、その燃える熱のすべてを破壊し尽くす力を知っている者は誰もいませんでした。）ノアが神から警告を受けたように、今日、教会が警告を受けています。ノアの時代の世界は、その悪がノアの説教を禁止するほどではなかったにもかかわらず、滅ぼされました。警告を禁止している今日の世界は、どんな裁きを受けるでしょうか。今日、世界が直面している危険を人類が知ったら大変です。それ故、〝無神論学習書〟では、むかしの大洪水を否定し、歴史上の証拠を否定するということさえするのです。

私たちの敵は、更に、アブラハムとその子孫が存在した証拠がないと言います。社会主義の歴史には必ず出てくる男、奴隷反抗の指導者、スパルタクスの存在が、歴史の発掘において確かめられたでしょうか。それならば、歴史の発掘が彼らの存在を何ら裏づけることがないとしても、聖書の人物に対して、同じ基準を、社会主義歴史学者は、どうして適用しないのでしょうか。どうして、彼らは、遊牧民としての生涯の大半を過ごしたアブラハムについて語らないでしょうか。私たちは、聖書の歴史上の存在を信じます。聖書の著者である歴史家たちは、彼の生涯と、旧約聖書のほかの人物の生涯について語っているからです。

さらに、あらゆる時代の、すべてのユダヤ人は、彼らがアブラハム、イサク、ヤコブの子孫であることを知っていました。いつからとも知れない時から、アラブ人はみな、アブラハムが彼らの父であると考えました。世界のすべてのクリスチャンと回教徒は、いつも、唯一の神を信ずる彼らの信仰の祖先として、アブラハムを尊敬してきました。

これらは、みな、意味のないことでしょうか。

アブラハムは、サラを葬るために、マクベラの洞穴を買いました。のちに、この洞穴は家族の墓になりました。そこには、イサク、リベカ、レア、そしてヤコブが葬られました。現在、この洞穴の上に、回教寺院とユダヤ会堂が建っています。そして、それは、回教徒にとって、巡礼の最も聖なる場所の一つです。

何百年、あるいは何千年後に、レーニン廟を見て、だれかがレーニンは歴史上の人物ではなく神話の人だと言うのを創造してごらんなさい。レーニンの亡骸は、蝋細工にすぎない、と言われるかもしれません。二千年後、スターリンのことを聞いた人類学者が、彼に関するものは何も発見できない、死体もないし、蝋人形のようなものを見つけることができないとします。その時、彼らは間違いなく、彼の存在を否定するでしょうか。

「ばかげたことだ。」とあなたがたは言うでしょう。しかし、それなら、アブラハムの存在を否定することもばかげたことです。

イスラエルにある敷地が、アブラハムの思想の歴史性を示しています。イエスがサマリヤの女と語ったヤコブの井戸は、今なおパレスチナにあり、その上に、小さなギリシャ教会が建っています。その井戸そのものが、高い祭壇の真下にあります。

しかし、私たちの敵の言うところによると、ヤコブとその子孫も歴史上の人物ではありません。

このような責任ある本を書く人には許されないことですが、〝無神論学習書〟の著者たちは無知であるか、あるいは、故意に、真実を隠しています。

一九三三年、テル・ハリリで有名な人類学者、パロット教授によって発掘が行われました

テル・ハリリは、アブラハムの家族がそこからカナンに来たといわれているまさしくその場所で、ダマスカスとモスルの中間にあります。現在、そこで、マリ文明が発見されました。そして、アッシリア学者が粘土板を解読することができました。それは、砂漠警察の長官バナムの報告でした。それは、だいたいＢＣ一七〇〇年頃のものです。この報告には、次のように書き込まれていました。

「あなたのしもべバナムから、わが主に、このことを申し上げます。きのう、私は、マリを出て、ツルバンで夜を過ごしました。ベニヤミン族全員が合図を送っていました。サマナムからイルム＝マルクへ、イルム＝マルクからミシュラムへ、タークア地区のベニヤミン族の村

は、みな、火の信号で答えました。しかし、この信号がどんな意味なのか、私にはわかりませんでした。」

さらに、その場所から発見され遺物には、ベニヤミン族のことがたくさん書かれています。「イアドリムがヘンに出向いて、ベニヤミン族の領土に手を置いた年」は、イアドリム王治世の碑文です。マリの最後の王の治世の二つの碑文があります。その一つ。「ジムリ＝リムがベニヤミン族のダウイダムを殺した年」。第二。「ジムリ＝リムがベニヤミン族のダウイダムを殺したのちの年」。

聖書によると、ベニヤミンはヤコブのいちばん末の子でありました。それでは〝無神論学習書〟の著者はヤコブのむすこは歴史上の人物ではないと、どうしていうことができましょうか。

イスラエルという名前が聖書以外の記録に見られる最初は、現在カイロ博物館に保存されている、テーペの近くの埋葬院から出た碑文です。それには、リビア人に勝ったパラオ・メゼンプタの勝利が記念されています。彼の勝利を宣言するために、この王が達成したと言われる他の特筆すべき勝利も書き込まれています。賛美の歌の終わりの次のように書かれています。「カナは略奪される。そのすべての悪はそれと共にある。アスケロンは捕虜となる。ゲゼルは征服される。ヤノアムはかき消される。イスラエルの民は荒廃する。イスラエルの子孫は断たれる。パレスチナは、エジプトのためにやもめとなった。」

そのように、イスラエルという名前は、ＢＣ一二二九年までにはすでに歴史に登場しています。

その当時の支配者は、ユダヤ民族を打ち負かすことを自慢しました。その追従者であるナセルが、イスラエルによって打ち負かされる前まで自慢したと同じことです。しかし、イスラエルは、完全に打ち負かされることはないのです。

確かに、七〇〇ページも費やして四〇〇〇年以上も昔のアブラハムという男は存在しなかった、彼はイサク、ヤコブ、ベニヤミンという名の子孫はいなかった、そしてイスラエルに関する聖書物語はうそであるということを証拠立てるために本を書くということは非常にばかげていることのように思われます。どうして、このことが、どこの共産党の学校でも、そう、工場や、集団農場においても教えられなければならないのでしょう。ロシア人は四千五〇〇年前の彼らの祖先には興味を持っていません。どうして、彼らは、ユダヤ人がアブラハムという男か

ら始まる歴史を持っていることを特別に否定することに興味を持たなければならないのでしょうか。

この否定は、深い意味を持っています。それはユダヤ人のことを論じる時にはユダヤ人にならなければならないというジョークによって説明されるのがいちばんかと思います。

ゴールドスタインが汽車に乗っていました。彼の反対側に、もうひとりのユダヤ人、ハーシュコビキがいました。彼らはお互いに見知らぬ者同士でした。ゴールドスタインは何か話をしたいと思って、ハーシュコビキに尋ねました。「同志、すみませんが、今何時か教えてください。」ハーシュコビキは答えませんでした。同じ質問をなんどか繰り返し、そのたびに声が前より大きくなりました。それでも、反応なし。とうとう、ゴールドスタインは言いました。「ねえ、同志、あなたは腕時計をしているではありませんか。どうして、私に時間を教えてくれないんですか」

ハーシュコビキは答えて言いました。「同志、あなたは時間を聞きたいのではありません。あなたは少しおしゃべりしたいのだと思います。もし、わたしが、九時ですよ、と言うと、あなたは尋ねるでしょう。『あなたの時計はどこの製品ですか。』私は答えます。『スイスの金時計です。』あなたは言うでしょう。『それなら、あなたはさぞかし地位の高いかたでしょう。そうでなければ、そんな時計を持つことができないはずです。』私は答えます。『さよう、私は対外商業省の長官です。』そうすると、あなたは、私が、モスクワのどこに泊まっているかと聞くでしょう。私は答えます。『アルチレリナイヤ通りです。』あなたは私に家族があるかと尋ねるでしょう。私は、妻と三人の娘がありますと答えます。あなたは、もしかしたら家族の写真をお持ちではありませんか、と聞くでしょう。私は、はい、と答えて、あなたに写真を見せるでしょう。あなたは私の美しい上の娘エスターが気に入って、もう一度私の家を訪問していいかと聞くでしょう。私は丁寧に、どうぞ、というでしょう。あなたはエスターと恋に落ちて、娘と結婚したいと言うでしょう。そして、どうして、私は、時計を持っていない男に娘を嫁がせなければならにのですか。」

アブラハムとその子孫の存在が否定されなければならないのは、もし私たちの敵がアブラハムの存在を認めれば、聖書の記録と、おびただしいユダヤ人、クリスチャン、回教徒の伝説にもとずいて、私たちが、どうして、アブラハムは、四〇〇〇年もの歴史の間、その名前が生き続けるほど著名だったのか、と尋ねるからです。唯一の答えは、彼は神を信じ、神の命令に従って、神のために、最愛のむすこをさえ犠牲にしようとしたということで、彼が有名であるからです。それに対して、私たちは、アブラハムは神と出会ったかどうかと尋ねられるでしょ

う。その答えは、彼はしばしば彼にはっきりと語りかけられる神の声を聞いたということです。私たちは神が彼に何を語られたのを知りたいと思うでしょう。それは、こうです。神は、ほかでもない、彼と契約したいと思っておられると語れたのです。彼の子孫において、すなわち、彼の子孫のひとりを通して、すべての国民が祝福されるでしょう。そこで、すべての人が祝福された人生を望んでいるので、私たちは、祝福を与えようとしたアブラハムの子孫とはだれかと尋ねるでしょう。その答えは簡単です。新約聖書は、私たちに、イエスが、アブラハムのこの子孫であると告げています。そして、私たちは、福音のメッセージを聞くでしょう。イエスは私たち罪びとのために十字架で死にました。彼を信じる者はだれでも、すべての罪からきよめられ、今も、またパラダイスにおいても、永遠のいのちを受けます。

それだから、〝無神論学習書〟の著者たちは、ゴールドスタイン同志が冗談で言ったように、注意深く続けるのです。彼らは議論を途中でやめます。聖書の人物は存在しなかった。彼らは腕時計を持っているのに、時間を教えようとしないのです。

聖書の真理をほかの点で否定しようとするのも、彼らの目的です。聖書のあらを探し、その中にある矛盾を探し出すのも、彼らの目的です。

エジプトからのユダヤ人の救出

聖書は、ユダヤはエジプトの奴隷であったと言っています。しかし、神は、彼らのために奇跡を行われ、全能の御手をもって、彼らを縄目から解放しました。彼らを追跡したエジプトは紅海で溺れ死にました。この聖書の物語りは奴隷をかかえている者たちには、確かに危険思想です。それは、奴隷たちに対して、独裁支配に苦しんでいる人たちに対して、神は奴隷解放を望んでおられることを示唆するかもしれません。

それ故、歴史のこの部分も、削除されなければなりません。〝無神論学習書〟の著者たちは、私たちに対して、うれしそうに、これは全く作り話であると言います。彼らは次のように書いています。

「一世紀半の間、エジプトにおける考古学者の発掘が徹底的になされてきた。しかし、発見されたおびただしい数の記念碑、解読された碑文、彫刻、その他のものにエジプトの奴隷についての聖書物語を裏付けるものは何も発見されていない。」

聖書をこのように批評する権利が、共産主義者にあるでしょうか。エジプトからの脱出は、三千年以上も昔のことです。ロシア革命は、わずか六十年前に起こったことです。今、ソビエ

ト連邦を旅行して、本屋から本屋を渡り歩き、ボルシェビキ党を育てることに何らかの役割を果たしたトロッキーのことが書かれている本を一冊でも探してごらんなさい。私たち年配の者は、その当時、トロッキーはペテログラードのソビエトの長で、レーニンのもっとも緊密な協力者であったことを知っています。真実には、レーニンとトロッキーが革命を行なったといわれなければなりません。しかし、のちに、スターリンがトロッキーに腹を立てて、彼の名を簡単に歴史から抹殺しました。それ以来、革命は、実際におきて、レーニンと、そのもっとも親しい協力者であるスターリンの協同事業であるといわれてきました。スターリンの役割は一二十年ほど前までは、もっと重要な人物として画かれました。さて、今日、この革命において、スターリンが何か重要な役割を持っていると書いている本を、ロシアの本屋で探してごらんなさい。一冊もないでしょう。それは、フルシチョフが反スターリンにまわって、彼の名まえをも抹殺したからです。もっと最近になって、フルシチョフの名前が消されました。もしも政治的な敵意が、今日の世界の主な歴史的出来事にたずさわる人間の役割を、証明するために書かれたすべてのものを、文書や写真やマスコミを利用して抹殺することができるとならば、エジプト史における空白は肯定しがたいものではありません。

しかし、すべての証拠が抹消されたわけではありません。

私の尊敬する敵（〝無神論学習書〟の著者たち）は、またもや、考古学上の知識不足をさらけ出します。一九二三年、ペイサンで発見されたラムセス二世時代の石柱に、彼が雇った奴隷のセム族（テル＝エル＝アマルナの物語りの中に、〝カビリ〟という名前が出てくるヘブル人たち）が、彼の名で呼ばれた町を建設したことが記録されていることを、彼らは知りません。

カイロ博物館に保存されている倉庫街のれんがに、〝ラムセス〟という語が刻印されています。そのあるものは、わらでしばられており、あるものには麦の刈株だけが付着しており、遂には、あるものは、わらも、その他のものも付着していません。これらは、皆、イスラエルは、もはや、わらを与えられないという命令を出した、聖書の出エジプト記に記録されているパラオの布告を裏付けるものです。

聖書は、ユダヤの奴隷たちを導き出すために、神がエジプトに十の疫病を贈られたと書いています。最後の疫病はやがて王座にすわるパラオの長子に始まるすべての初子の死でありました。

聖書のいうところがただしければ出エジプト記のパラオの息子アメンホテップは、そのさばきにあって死んだにちがいありません。アメンホテップ二世自身は、ＢＣ一四二三年に死にま

した。そしてソトムス四世が彼の後を継ぎました。ギザのスフィンクスの足元に置かれていた巨大な赤いみかげ石に、ソトムス四世の夢物語と呼ばれるものが刻まれております。その中で、この将来のパラオが、若りし時、眠りながら夢を見ました。それはスフィンクスが彼のところにやって来てやがて彼がエジプトの王になると予言したので、彼はとても驚いたというものです。

始祖の律法がエジプトでは厳格に実施されていましたから、彼がアメンホテップの長子であるはずがありません。あるいは、彼が王位を継承するなどということは及びもつかないことだったからこそ彼がスフィンクスの約束に驚いたものと思われます。そのように、パラオの長子の十の疫病で死んだものと思われます。

これは、聖書の説明の不思議な確認ではありませんか。

古代エジプトの歴史はとてもよく知られています。たくさんの記録があります。しかし、私たちの敵たちが指摘するように、海で消滅したエジプト軍とその王に関する記述は一つもありません。

敗北の記録を克明に行った民族があったら知りたいと思います。ソビエト軍隊がスターリングラードの防衛線から撤退する時、スターリンは敗北を公にしませんでした。戦況が変わって、ドイツ軍が撤退した時に、彼らもそのことを公表しませんでした。エジプトの歴史家たちは、彼らの現代の客観的な反面の事実を、ほとんど取り上げませんでした。

この事では、私たちは、史実のエジプト側の資料を持ち合わせていません。これがすべてです。しかし、私たちは聖書を持っています。それは、ユダヤ側のことだけでなく、神の言葉と、神の不思議を伝えています。それが奴隷保有者とその追走者たちにとって不愉快なことかもしれませんが、奴隷の驚くべき救出は、少しも疑う理由がありません。

〝無神論学習書〟は、また、聖書が言うように、おとなの数で六十万ものユダヤ人がエジプトから脱出するはずがない、なぜなら、もしそうだとすると、ユダヤの全人口は少なくとも三百万だったということになるからだ、と言います。さと、三百万もの人間が、一晩で紅海を渡ることができなかったことは確かです。また、そんなにも大勢の人が小さなシナイ半島で生活できなかったのも確かです。

ここに、ヘブル語の問題があります。聖書のもっとも古い部分はヘブル語で書かれています。ヘブル語の〝アルフォト〟という語は〝千〟という意味でもありますが、また、〝家〟と

いう意味も持っています。聖書のヘブル語原典では、六十万のユダヤ人がエジプトを出たのか、それともそれはただ六百の家、六百の大家族だったのか、私たちには分かりません。

言語は進化するのです。言葉は今日使用されているものと三、四千年前のものと、同じ意味を持っていると限りません。概して、聖書は修辞学で言う誇張法を用いているので、聖書のこのような部分は、それが書かれた当時のとおりに私たちが理解するのは、容易でないかもしれません。しかし、明らかに、それが大きなうそを含んでいるとしたら、聖書は当時、聖なる本として受け入れられなかったでしょう。それは、第二次世界大戦中、赤軍は二百億の兵士から成っていたというソビエトの公認の歴史よりも、もっとお粗末です。その言葉は、今日使われている者とは、その当時、別の意味を持っていたにちがいありません。

聖書に記録されている歴史の聖書外の証拠は、非常に多く記述されています。それらは打ち消し難いものです。

聖書の矛盾

〝無神論学習書〟は聖書の矛盾を述べています。

サムエルは後書八章四節に、ダビデがハダデゼルとの戦いで、彼から騎兵七百を取ったと書かれてあり、いっぽう、歴代志下十八章四節には、ダビデは騎兵七千を捕虜としたと書かれています。私の敬愛する敵は、この二つの違った表現を調和させることができません。

第二次世界大戦の歴史をひもどくならば、キエフの戦役で十万のロシア軍が捕虜となったと言われているいっぽう、その五十ページあとに、キエフの戦いで、わずか一万のロシア軍が捕虜となったと言われているのを、彼らはどう考えるのでしょうか。

説明は簡単です。あの大戦中、キエフで三つの戦役がありました。捕虜の数は、その戦役ごとに違っていたのです。それなのに、どうして私たちは、聖書のこれら二つの違う本の中で、ハダデゼルに対する同じ戦いが書かれていると考えなければならないのでしょうか。

聖書に対するもう一つの批評。ダビデ王のなしたことは〝神の目に正しかった。そして彼は、彼の生きながらえる日の間、主が彼に命じたことがどんなことでも、拒むことはなかった〟と聖書は書いています。〝無神論学習書〟は言います。「しかし、彼は罪を犯さなかったか。」聖書はそれ自体彼が犯した大きな罪を他の箇所に記録しています。

彼は確かに罪を犯しました。しかし、その罪は赦され、あがなわれ、それらはもはや、神の前に数えられることがありませんでした。驚くべきは、悔い改めた罪びとは神の前に義とされるということであり、それ故に、ダビデについてかくも美しいことばを聖書が書きとどめているのは、神の愛のことばのあやです。赦された罪びとは、神の目から見ると、雪よりも白いのです。

私たちの無神論の友人は悔い改めなければなりません。そうすれば彼らもまた、赦されます！

〝無神論学習書〟の著者たちはマタイによる福音書ではタデスと呼ばれる使徒が、ルカ書ではヤコブの子ユダと呼ばれているのを見つけて大よろこびします。なんと重大な間違いでしょう。しかし、私たちは、彼らにお返しをしましょう。ウリアノフなる人物が、一般にレーニンであると言われており、ある伝記作家がジュガシビリと呼んでいる人物が、他のものではスターリンとなっている事実を彼らはどのように調和するのでしょうか。

私たちの敵は、聖書の中に、このような〝矛盾〟をたくさん発見します。それらは考えるに価しないものです。

このようにして、例えば、ある時、イエスが、弟子たちに彼らの着物をも売って剣を買うように言ったことを指摘します。他方ペテロが剣を抜いてイエスを守ろうとした時、イエスはペテロに言いました。「剣をさやにおさめなさい。」

さて、「着物を売って剣を買いなさい」という言葉は、彼が逮捕されるということを知りつつ、ゲッセマネに行く途中の最後の晩餐の時にイエスによって言われたものです。それは夕方おそい時間でしたので、弟子たちには何かを買う時間の余裕はありませんでした。彼は、明らかに、今すぐ使うために剣を買うようにと言ったのではありませんでした。そうではなくて、その後いく世紀もの間に彼らが大いなる危険に直面するであろう、だから、彼らは、彼ら自身と義のもとを守る備えをしなければならないと、彼は警告しているのです。義のもとを守る備えをしないものは、それを、愛していません。子供を愛する母親は、だれでも、子供を誘惑しようと、あるいは殺そうとやって来る侵入者に対して、子供を守るために、噛みついたり、ひっかいたりして戦うでしょう。

弟子のひとりが、「私たちはふたふりの剣を持っています」と言って、イエスを安心させようとした時、イエスを皮肉をこめて、「それで充分だ」と答えます。主はもっとよく理解するために、弟子たちには時間が必要でした。

「剣をさやにおさめよ」は特別な場面での命令した。イエスは守ってもらおうとは思っていませんでした。彼の願いは、世の罪びとのために死ぬことでした。

〝無神論学習書〟の著者たちはルカによる福音書に、別の矛盾を発見しました。人々はイエスの側についたので、大祭司は彼を秘かに殺そうとしたほどだから、大祭司の同調者たちが集会を開くことはできなかったと思われるのに、実際には、二、三日後、群衆が叫んで言いました。「彼を十字架につけよ。十字架につけよ。」私たちの敵は、地方の民衆がわずか一晩でこんなに急激に考えを変えることはあり得ないと言います。それで、伝道者ルカによって語られたこの話は事実であり得ないと言うのです。

科学アカデミーの会員たちは、あわれにも、彼ら自身の民衆の悲劇を何も知らないのです。

すべてのラジオ放送局が、モスクワで、スターリンの讃歌を流し始めたのは、ある朝のことでありました。そして、それは、その後二十年間続きました。その朝の新聞は同じように、スターリンの讃美の記事で埋まりました。それは、ソビエト連邦共産党第二〇回大会の開かれた日でありました。その日フルシチョフは演説をして、スターリンは実際には、大量殺人者であり拷問者である、敵に対してだけでなはなく、味方にもそうしたと言いました。それまでは、全国民と彼自身が、長年の間、最大の天才として彼に追従していたのです。全ロシア民が前の神の定められた指導者の反対にまわり、彼を責めるかわりに、彼をののしりはじめるのに時間はかかりませんでした。やがて、彼の遺体さえ、墓から取り去られました。

この話を、〝無神論学習書〟の著者たちは信じることができるのでしょうか。それとも、彼らは、それは伝説だと言うでしょうか。

民衆の心の状態は、非常に急に変化します。それが、人類の最悪の指導者ヨセフ・スターリンの場合でした。そして、それは、人類の最も美しい手本、ナザレのイエスの場合でした。

科学アカデミーの会員たちは、一度スターリンの賛歌をうたって、のちに、そのことばを変えたことを思い出さないのでしょうか。

彼らが、中国や、ルーマニアやユーゴスラビアの共産党と永遠の友好を結んでいることについて、共産主義人民の永遠の安定についてスローガンをかかげ、街頭行進したことを、早くも忘れてしまったのでしょうか。〝永遠の安定〟がどんなに早く、あわれな争いに変わったか、彼らはわかっているのでしょうか。彼ら自身のにがい経験を二千年前の出来事に適応して、すべての時代において人間の性質は同じであることを認め、言うところの矛盾が福音書にあるの

ではなく、人間の精神と心にあるのであるとすることが、どうして彼らにはできないのでしょうか。

イエスは逮捕に来た兵士たちにユダが認知の合図をする必要はなかったという論争は、ばかげており、子供じみてさえいます。なぜなら、パレスチナは非常に小さな国で、イエスはガリラヤやユダヤを広く旅されましたが、彼の顔が広く知られていたと信じるべき理由がなかったからです。今日の有名な人物は、その写真が新聞に発表され、テレビで報道されますがその当時は、このような大衆報道機関がありませんでした。それでイエスのことについて聞いてはいたものの、顔と顔とを合わせて彼を見たことのない人が大勢いたと思われます。ローマ兵士たちと大祭司カヤパの手下たちは、イエスの説教をそれほど真剣に聞いたとは思われません。今日共産党の秘密警察が共産国で、説教家の話を特別の悪い目的のほかは、聞くことはなかろうと思われることと同じです。それで、逮捕する人間の認知の合図をだれかがするのは、全く当然のことでした。その上、その出会いは夜のことで、十二人の疲れた、際立った特徴のない顔をたいまつの光だけで判定するのですから、これというきめてが必要だったのです。

〝無神論学習書〟の著者たち―スターリンの残虐を批判したが幸運にも獄につながれずにすんだすべてのスターリン時代の英雄たち（彼らがスターリンを批判しなかったか、それとも、彼らが信じていない神のあわれみによって護られた）まさしくこれらの者たちは逮捕の現場、ゲッセマネの園で、恐れを見せたイエスを、そして十字架に消えたイエスをさげすんでいます。

大いなる徳を所有することは、確かに非常に美しいことです。これらの徳を、木がその葉かげに実を隠すように隠すことは、さらに賞賛すべきことです。キリストの目的は、最も弱い者たちのために天に至る道を開くことであり、彼らさえも神に受け入れられることを示すことでありました。このような橋を造るために、彼は英雄のように振る舞われなかったのです。もしも彼の行動が、あらゆる場面で、英雄のように、また到達しがたいもののように見えたならば、私たち一般の、また一般以下の人間は、人生の模範として彼を受け入れることはできません。それ故彼は私たち人間の弱さのところまで下りて、ゲッセマネで祈られました。「神よ。私からこの杯を取り去ってください。」そして、十字架で叫んで言われました。「わが神、わが神。どうして私を見捨てられたのですか。」このために私たちが、しばしば失望に陥り、苦しい運命の杯を私たちから取り去って欲しいと思うとき、彼のうちに、信頼に価する友を見出すのです。それが、キリストの行為の目的です。それを臆病というのは間違いです。

〝無神論学習書〟の著者たちは旧約聖書と新約聖書の間の矛盾を指摘します。

このようにして、ヨハネによる福音書に、神を見た者はだれもいないと書かれているのに、旧約聖書で、ヤコブは「私は顔と顔とを会わせた神をみた」（創世記三二30）と言っていると言います。

その説明は非常に簡単です。

聖書時代のヘブル語は非常に貧しかったので、多くの意味を一つの言葉に持っていました。ヤコブが「私は顔と顔とを合わせて神を見た」と言ったのは、天使を意味したのであり、聖ヨハネは、その言葉の最高の意味における神、最終の実体、天地の造り主について言っているのです。

これで十分です！

その角度から見ると、実に、それはなぞです。婦人の作った美しい縁取りを取り上げて、裏からそれを見てごらんなさい。それはなにがなんだかわからない糸のじぐざぐです。それは表から見なければ美しく見えません。そのように聖書は下から、神に逆らい続けてきた人間の観点から見られるべきものではありません。

霊を通じて、クリスチャンは見えざる世界と直接交流します。彼らは、この点から聖書を見ます。それ故、その全体の調和と、深い意味を捕らえることができるのです。彼らは、また、聖書の限界を知っています。それは、人間の言語の枠組みの中の神の黙示です。

こんな話があります。南アフリカに遣わされた宣教師、ロベルト・モハトが、現地人にイギリスの汽車を説明したいと思いました。それで彼は、大地に二本の鉄道を敷いて、いくつかの牛車を順々に並べて、最後に大きな湯わかしを牛の頭の前にぶらさげました。きっと、アフリカ人が、のちに、ヨーロッパに行ってほんものの汽車を見たら、モハトの説明のばからしさに気がつくでしょう。しかしアフリカの言語では、汽車とはどんなものか、彼には説明できなかったのです。同様に、神は、天井の、また霊のことを説明するのに地上の経験から言葉を探さなければなりません。そのためには、人間の言語ではぴったり表現できないのです。

しかし、今なおこの本は、なんと心をかき立て、鼓舞することでしょう！

ポルテアは、聖書は百年以内に流行遅れの、忘れ去られた本になり、博物館に行かなければ見られなくなるだろう、と言いました。しかし、その百年後、彼自身の家が聖書協会によって使われるようになりました。

聖書は千三〇〇の言語に翻訳されて、なお百万部も毎年売られています。―しかし、ポルテアの本を読む人はだれもいません。

生まれつきの能力から言えば、プラトーは貧しい漁師であった聖ヨハネよりはるかに優れており、あるいは、マルカス・アウレリウスのほうが思想家としてはペテロよりもはるかに優れているのは間違いありません。しかし今日は、マルカス・アウレリウスやプラトーを読む人はほとんどいません。それなのに、聖ヨハネや聖ペテロの著作は、二千年後の今、世界中の人々にとっていのちのことばとなっています。

科学者は学問のデータを、いつも同じように適用するとは限りません。

自然についての事実も、間違って解釈されることがあるし、また間違って適用されることがあります。しかし、そのことは、その本来の価値を減少するものでありません。

私の敵たちは、彼らには全く知識のない本、聖書に反論するために、何百ページもの本を書きました。

私がひとりの人と相まみえるとします。しかし、私はその人を知ることとなりません。私はただ、その人の着物や靴を見るだけです。彼の体について言えば、ただ、頭と手が見えるだけです。彼を裸にしても、それでも私は彼を知ることになりません。なぜなら彼の魂は以前としてなぞのままだからです。聖書の文字に書かれた経典は、外側の着衣に過ぎません。そのたとえ話はその体であり、その霊的真理は魂です。その神秘の美しさは、喜んで彼らの目と心を天の霊に対して開く神の愛する者たちに対してだけ明らかにされます。美しい光景は解剖学的な目によって受け止められ、脳により判断されます。ちょうどそれと同じように、霊的な事柄は、聖パウロが言うところによれば、霊的に識別され、神の霊によって取り次がれます。

聖書は神の黙示

キリスト教は独裁専制に従うようにとは教えません。

「シーザーのものはシーザーに返しなさい」というイエスの言葉は、〝無神論学習書〟の著者たちにとって、私たちが今日、植民地支配者と呼んでいるものに対して隷属するようにと教えている明らかな証拠であると言います。

ところで、イエスは、この言葉を弟子たちに言ったのではありません。彼は、このことを、彼の最悪の敵、パリサイ人に対して言ったのです。彼らの生活はすべて、宗教に対するあざけりでありました。それで、彼は、彼らに対して「シーザーのものはシーザーに返し、神のものは神に返しなさい」と言われたのです。そうしようと努力することによって、彼の敵たちは、やがて、彼らが気遣いの支配者に対して、満足するならば、（事実、多くのローマ皇帝たちは気遣いでした）神に与えるものは何もなくなるだろうということに気が付くにちがいないと、彼は考えられたのです。

イエスの弟子たちは、非常にしばしば間違って使われてきたこれらの言葉の意味することを、よく理解しなければなりません。

もしも、ある人が不正を働いた人が償いをしようとする時に、まず、いちばんよいことは負債をはっきりさせて、それを返済することです。ところで、ユダヤ人は肯定にどんな負債があったでしょうか。チェコはコスイギンにどんな負債がありますか。何もありません。

ローマにおいてさえ、正当な皇帝の所有物は何もありません。勝利のローマの将軍、ジュリアス・シーザーは、ガリア戦争から帰ると、武力で共和国を覆しました。このように、彼は合法的な支配者ではありませんでした。彼は専制君主によって受け継がれました。彼らの大部分は、王座よりも精神病院のほうがふさわしいような人たちでした。彼らは、それに対して何も与えませんでした。シーザーに所属するパレスチナでは、もっと何もしませんでした。ユダヤの党派間の分裂を利用して、ガエウス・ポンペイウスはこの小さな国を武力で占領して、それに、恐怖と破壊の支配を押しつけました。

シーザーは、パレスチナでは一つの道路も造りませんでした。ユダヤがその事業をしました。彼は一軒の家も建てませんでした。彼は一本の木も植えませんでした。「シーザーのものはシーザーに返しなさい」とは、革命的な、愛国的な言葉です。それは、結局、支配者のすべての権利を否定することです。

ソビエト連邦の正直に考える市民が、ナチ侵略時代に、「ヒットラーのものはヒットラーに返しなさい。神のものは神に返しなさい」と言ったとすれば、だれでも、この言葉の意味は、「ヒットラーに利益を与えよ。そして彼の軍隊を追い出せ。なぜなら、ソビエト連邦に彼のものは何もないから。彼はここにいる権利さえもない。」ということであると理解したでしょう。同じことが、チェコスロバキアのソビエト侵略に対してもいわれると思います。

ローマの官僚とユダヤの彼らの手先であった高僧たちは、明らかに、イエスの言葉に対して、私と同じ解釈をしました。その証拠に、彼らは彼を帝国市民とは考えず、謀反人と考え、彼らは彼を十字架につけたのでした。

〝無神論学習書〟は、新約聖書の著者を、ローマの支配者の追従者として画いて、事実を間違って伝えています。

「それには、ローマ政府に対する非難は含んでいない。」と彼らはいいます。「十字架につけて罪のすべてはユダヤ人に帰せられる。ピラトは、消極的なオブザーバーとして書かれている。」

聖書がない国でこのように主張をすることはやさしいことです。使徒行伝四章二七節に、「ヘロデとポンテオ・ピラトは異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油そそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり。…」と書いてあります。

ユダヤの暴走は祭司たちにそそのかされて、イエスの十字架刑を要求しました。しかし、ピラトは自ら先頭に立って、残虐に残虐を加えました。私たちはそのことを次の言葉から知ります。「そこで、ピラトはイエスを捕まえて、むち打ちにした。」（ヨハネ一九1）聖書は、明らかに無実であると思われる囚人をむち打って喜ぶローマの支配者の下劣な姿を暗示しています。それで、福音書は、非常にはっきりと、ピラトが彼を十字架につけるために引き渡したと言っています。

どんな権利によって、共産主義者は、ローマ政府に隷属していた初代のクリスチャンがピラトを消極的な観察者として記録したと言うのでしょうか。出版と、クリスチャンの追放と、返答の自由についで独占権を持っている横領者の〝権利〟によってでしょう。

聖ヨハネ一人だけが、ローマ政府を非難しているのではありません。伝道者全員が、彼を追従者と言っています。聖マタイは、「ピラトはイエスをむち打ってから、十字架につけるために引き渡した。」と書いています（マタイ二七26）聖マルコは、「ピラトはイエスをむち打った後、十字架につけるようにと引き渡した。」と書いています。（マルコ一五15）聖ルカは、ピラトがはっきりこう言ったと言っています。「私は…この男に、別に何も罪を見出せません。……それで、私は懲らしめた上で、釈放します。」（ルカ二三14,16）

新約聖書の著者たちは、イエスを十字架につけてローマ人の罪をけっして無罪にはしませんでした。彼らは同罪です。のちの教会歴史家は忠実に報告して、ローマ政府がクリスチャンを野獣の餌食にし、彼らにあらゆる種類の残虐な仕打ちにしたさまを、書いています。

非難されているような、奴隷の身分とはかけ離れた、あらゆる時代の真のクリスチャンたちは、その合法的な支配者として、専制君主を認めませんでした。彼らは、また、彼らに服従することを義務とは考えませんでした。私たちが知っているキリスト教に反対する最初の本は、セルサス著〝真実の言葉〟です。それはだいたい、紀元前一七五年頃のものです。それは、クリスチャンを叱責して、皇帝を防衛しない、彼のために戦わない、遠征に、あるいは軍事活動に参加しない、といっています。ソビエト連邦のクリスチャンたちは共産党の指導者たちを圧迫者として見ています。彼らはキリストの弟子たちからちやほやされることはありません。

〝無神論学習書〟の著者たちは、ほかの聖書の箇所を引用して、キリスト教は不正な支配者たちに対して、盲目的に服従することを教えており、それ故、人間性の進歩にとって邪魔であるといっています。その聖書の箇所は、ローマ人への手紙十三章一節から三節までです。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神のさだめにそむいているのです。そむいた人は、自分の身にさばきを招きます。」

しかし、この同じ章に、クリスチャンが服従を誓う、〝上に立つ権威〟は何であるかを定義しています。神のしもべとして、善を行う者には賞賛を与え、悪をなす者には怒りをくだす人だけがこの名に価します。（3、4）もしも支配者が反対のことをなすならば、もしも彼が善を罰して悪に酬いるならば、私たちはもはや、彼の力を神からのものと認めることはできません。

この上にあげた聖書のことばが、クリスチャンをして専制暴君に反対させるのです。

中世に、サボナロラは火あぶりの刑にされました。彼がこういったからです。「キリストに仕え、清いクリスチャン生活を送る以上に暴君に対する嫌悪はない。これらは、彼自身の体質に真正面から反対するからである。」

次に、スコットランドのメアリー・クイーンとプロテスタントの宗教改革者ジョン・ノックスとの討論を引用しましょう。

メアリー。「あなたは王が許可する宗教ではない他のものを受けるようにと人々に教えました。神は王に従いなさいと命令しているのを知っていながら、いったい、神のいかなる教えによってそうするのですか。」

教会を破壊され野外で集会するソ連の信者たち

メアリー・クイーンとジョン・ノックスとの論争

ノックス。「マダム。正しい宗教は根源的な力を持たず、この世の君からの権威を持たず、ただ永遠の神からの権威のみを持っているのなら、彼らの王の欲求に規制される宗教というものは意味をなしません。……アブラハムの子孫が皆パラオの宗教に属すべきだったというのなら、……どんな宗教がこの世に存在したでしょうか。あるいは、使徒時代のすべての人たちが、ローマ皇帝の宗教に属していたとしたなら、この地球上にどんな宗教が存在できたでしょうか。」

メアリー。「そのとおりですが、彼らはだれひとり、彼らの王に対して剣を向けませんでした。」

ノックス。「しかし、マダム。それでもあなたは、彼らが抵抗したことは否定できません。抵抗の方法として……服従を拒むのです。」

メアリー。「しかし、それでも彼らは剣では抵抗しませんでした。」

ノックス。「マダム。神は彼らに、力と、手段を与えたまいませんでした。」

メアリー。「力を持っていたら彼らは王に反抗したと思いますか。」

ノックス。「王が限度を超えたなら、マダム……疑いもなく彼らは抵抗するでしょう。力に訴えてもです。父親が気が狂って、子供たちを殺そうとする時はどうでしょうか。彼らは彼を捕らえて、彼から力づくで刃や武器を取り上げるべきではないでしょうか。神の子たちを殺そうとする王に対しても同じことをします。彼らは熱心のあまりというのではなくて、まさしく気が狂っているのです。……それだから、彼らから剣を取り上げ、手をしばり、彼らがもっと穏健な心を持つようになるまで彼らを獄に入れるのは、王に対する不服従ではありません。それは、まさしく服従です。なぜなら、それは神のみこころにかなうことだからです。」

共産主義者が、スターリンに対して、このように話した者があっただろうか。

聖書は、リンカーンやウイルバーフォースを励まして奴隷廃止のために戦わせた。マルクスはその〝資本論〟において、大英帝国における労働者保護の法律を作るのに、クリスチャンのシャフテスバーグがその役割りを果たしたことを認めている。皇帝に対していかなる権威をも否定したのはロシアのクリスチャン、レオ・トルストイ伯爵であった。アメリカ大統領、トーマスジェファーソンは書いた。「私は人間の心を支配するあらゆる暴君を永遠に憎むことを神の前に誓った。」そして、「暴君に対する叛乱は神に対する服従である。」

エマーソンは書いた。「あなたが奴隷の首に鎖を巻き付けるならだれがあなた自身の首のまわりにそれを巻き付ける。」

エマーソンの言葉は予言であったことが証明された。ソビエト共産党はその政府の首に鎖を巻き付けた。まず、君主の首に。次の領主の首に。資本家の首に。反対派社会主義者の首に。抑圧された国民、ウクライナ、ビエロロシア、グルジンの首に。しかし、その時鎖の一方の端は共産主義者の首のまわりにも巻き付けた。フルシチョフ同志は第二十回共産党大会における演説で、同じことを言った。彼は、スターリンが中央委員のほとんど全員を不名誉な追放によって粛清した。

キリスト教は奴隷制の味方でもない。

リンカーンは、一八六二年一二月一日の議会の演説でこう言った。「奴隷に自由を与えることによって、われわれは自由人に自由を与える。」

第二次世界大戦後、クリスチャン国家はそのすべての植民地を解放した。一方ソビエト政府は、バルトの人々、ハンガリア、チェコを属国とした。中国共産党はチベットを属国にした。

私は、私の無神論の友人たちは「首吊りを自殺した人の家の縄のことはしゃべるな。」という昔のことばを気にしているのではないかと思う。共産主義者にとっては、奴隷制は思い出したくないことなのかもしれない。私自身、共産党の強制収容所の奴隷であった。

しかし、これらすべての議論は実際には不必要である。なぜなら〝無神論学習書〟は、いつもそれら自身を否定するからである。キリスト教の奇跡的な成長と勝利を説明するために、教会に神が働いていることを認めることのできない無神論者たちは、「クリスチャン社会では、奴隷たちはお互いに交際できない立場にあったから」それはほとんど奴隷たちに伝道したのだと言明する。

ピレモンへの手紙の中で、聖パウロは、奴隷所有者が逃亡した奴隷を連れ戻す時は、罰をもってではなく、〝兄弟の愛をもって〟するようにと言っている。

それなら、どうして初代のクリスチャンたちは奴隷制を廃止しなかったのか。彼は迫害されていた。彼らは国においてなんの力もなかった。彼らの大部分は自ら奴隷となった。ほんの少し前、スパルタクスによって指導された奴隷の大暴動は血を流して沈圧された。そして何万という多くの奴隷たちは十字架刑にされた。暴動の結果が敗北とわかっているなら、ばか者でなければ叛乱しない。

神は一度だけ、十戒を与えるためにシナイ山に現れた。その前置きの言葉はこうである。「われは主、なんじらの神である。エジプトの地から、奴隷の家からなんじを導き出したものである。」彼の国民に対する自己紹介では、彼は自らを、天地の創り主よりもむしろ、奴隷の解放者として性格づけることを選んだ。これがわれわれの神である。

キリスト教は、「支配階級に仕えてきたし、今も仕えている。それは搾取と圧迫などに基づく社会的、政治的欲求を支持し、強化する。など、など。」という〝無神論学習書〟の論説を読むと、私たちはこっけいに思う。

私たちは、そんな非難を気にする必要がないことを知っている。私たちは無神論の学者たちが何を考えているか知っている。本来、視野が狭いため、彼らは首尾一貫した書き方を知らな

いのである。それで、私たちは読んでいってもぴんとこない。同じ著者がこの本のほかのところでいわなければならないことを見てみよう。「宗教改革の指導者たちは、いろいろな国民の言語に聖書を翻訳した。聖書が多数の大衆に受け入れられる最初の時代が到来したので、その中に、急いで、社会平等のための彼らの戦いを正当化するものを発見したかったのである。」

ここに、それがある。「聖書は社会平等のための戦いを正当化する。」「聖書は暴君に対する隷属と服従を教える。」この二つの論説は同じ著者たちによって、一つの同じ本の中に書かれていることである！

〝無神論学習書〟を書いた学者たちは、彼らの好きなように考える。彼らの優れた者たちはもっとよく知っている。彼らは、クリスチャンは専制君主に隷属しないことを知っているのである。彼らはこのことを、信仰にある私たちの兄弟姉妹たちを何百万と殺すことによって、そして、私たちの中間である信者たちを何万と今も牢獄に閉じ込めていることによって証明している。

無神論者たちは、残虐な支配者たちの前に頭を下げることを気にしないことに、もっと、気を使った。彼らが現在、歴史上最大の大量殺人者と非難しているスターリンを、彼らは神として崇めなかっただろうか。科学アカデミーの会員たちは若い人たちだとは思えない。それ故、彼らは、きのうまでスターリンにこびへつらう人たちと一緒にいたにちがいない。あるいは、そうでなければ、彼らは、今日、生きていて彼を非難するはずがなかろう！

私はスターリンとその後継者たちの統治時代に投獄されていた。ロシアの地下教会は、無神論者たちが暴君に反対を唱えるよりももっと多くの権利を持っているとは思えないだろうか。もう一人の殺人者、中国の毛利東の最近の神格化についてはどうか。中国共産党は、皆無神論者なのに、彼に頭を下げる。百万以上の中国のクリスチャンが殺された。しかし、彼らは頭を下げるよりも死ぬ方を選んだ。

真のクリスチャンは、自由の戦士であったし、今もそうである。アメリカ合衆国、イギリス連邦、オーストラリアには奴隷労働収容所はない。ソビエト連邦と中国にはそれがある。暴君にこびへつらう集団としてクリスチャンを書くことは、彼らを風刺することにほかならない。それ故、無神論者が否定するのはキリスト教ではなくて、それのこっけいに改作したものである。

キリスト教はこの世において社会変革を実行する意志を持たない、それとは反対に共産主義運動は地上のすべての労働者の解放をめざしているというのは全くの作りごとである。

天上天国か地上天国か

〝無神論学習書〟は、キリスト教の希望は、天に、死後の永遠のいのちにあると言ったフリードリッヒ・エンゲルスの言葉を引用している。彼によれば、キリスト教は、この世において、社会変革を実行する意志を持たない。

それとは反対に、共産主義運動は、地上のすべての労働者の解放をめざしている。

これは全くの作りごとである。

キリスト教が天の終着点だけしか持たないというのは真実ではない。イエスは、私たちに、「天にあるごとく、地にみこころがなるように」祈るようにと教えられた。ヨハネ福音書三章十二節で、「私はあなたがたに世のことを語った……」といっている。

ルカ福音書の冒頭で、人々がバプテスマのヨハネに、何をなすべきかと尋ね時、彼は「永遠のいのちのために努力せよ。」とは答えなかった。ヨハネの答えは非常に地上的であった。「下着を二枚持っている者には一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい。」取税人に対して彼は言った「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません。」また、兵士たちに対して、「天国を求めなさい」とは言わないで、「だれからも、力ずくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい」と言った。兵士たちは一般の人たちよりも高い給料を取っていた。（ルカ三 11～14）

イエスは宮から商人たちをむちで追い出した。彼はおおやけに、学者とやもめの家をむさぼるパリサイ人を非難した。富める若者に対して、彼は言った。「完全になりたいと思うならば、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に与えなさい」（マタイ一九 21）

キリスト教も、その計画の中にこの世における社会変革を持っている。ソビエト政府当局者が、アメリカ合衆国のように、キリスト教の遺産を持った国の経済水準を達成し、追い越さな

ければならないと言っているのは奇妙なことである。そのようにして、彼らはおそらくソビエト市民よりもはるかにキリスト教の影の下にあるこの世において富める生活をしようとしている。

アメリカやほかの西側国家において、労働者たちは教会に行くのに自分の車で行く。あるいは、もっと高い賞金を獲得するために、ビケを張ることができる。ソビエトでは、だれひとり欠席することの許されない共産党の集会に出席するのに、自転車さえも持っていない。

西側の富と自由は闘争なしに獲得された。しかしながら、キリスト教に対するエンゲルスの叱責が正当であるとするならば、この闘争は必要でなかったにちがいない。エンゲルスは書いた。

> 福音書の社会的教義は、不正に対する消極的な宗教的対抗、ひざまづいてする反抗を表わす。それは、実際において、抑圧者の正当化を意味し、第一に古い制度と奴隷制度の根源的な社会悪の正当化を意味する。キリスト教は革命闘争に向かう抑圧された人々のイデオロギーではなかった。それは、戦うのぞみを失った。奇跡的な救いを祈り求める抑圧された人たちのイデオロギーであった。

これは間違いである。

福音書の主な教えは、クリスチャンはキリストの模範に従うべしということである。キリスト御自身は不正に対して消極的であったか。むちで商人たちを追い出した彼の態度についてはどう思うか。彼が宮で祭司たちとパリサイ人たちの前に立って、彼らを、まむし、また偽善者と呼んだのは消極的なことだったか。

祝福された処女マリアの〝賛歌〟は諦めの歌であったか。御子は力ある者をその座から引き下ろし、力なき者を導き出す、と彼女は歌いました。彼は飢えた者を良き者をもって潤ち足らせ、富める者をむなしく去らせる。これは、搾取者に対する柔和な服従というようなものではない。

賢者は、暴君を倒すのぞみが全くない時は受身の柔和な態度であれとキリストの弟子たちに教えた。しかし、このような転覆の機が熟した時にはいつでも、クリスチャンは戦ってきた。

宗教改革の時代に、少作人が領主に反抗した時、その原因に関する根本的な問題は、宗教であった。その次のような革命的な賛美歌がある。

アダムが拝し、エバが紡ぐ。
その時だれが領主であったか
そして、
われらの神は堅固な要塞。
城壁は崩れることがない。

工業プロレタリアートの運動がイギリスで始まった時、チャーティスト運動の主題歌は次のようなものだった。

ブリタニアの息子たちよ。なんじらが奴隷であった時、
創造主なる神はなんじらを解放した。
すべての人に彼は生命と自由を与えた。
しかし、もう決して奴隷とはしなかった。

ロシアにおける一九〇五年の革命に導いてデモを組織した最初は私たちの共産党の友人たちではなく、ガポン司祭に率いられたクリスチャンの労働者たちであった。共産党はそれを利用したあとで、その司祭を絞首刑にした。

キリスト教は共産主義同様革命的であるが、革命が違う。

共産主義革命はその敵対者、罪のない人たち、あるいは立場の違う人たちの地を流すことから始まる。そして流血は習慣となり、楽しみにさえなる。そして遂には、転覆前のものよりももっと悪い専制が行われる。

かつてレーニンは、「恐怖とチェッカは絶対に必要だ」と書いた。皇帝ニコラス二世は、専制政治に恐怖を導入したことはなかった。

彼は何人の人を殺したか。ケレンスキーはどうか。そして、考えていただきたい。スターリンはどれほど多くの人を殺したか。

彼が、彼に恐怖の技術を教えたレーニンを自ら毒殺した可能性は非常に高い。その後、彼はレーニンの親しい友人をほとんど皆殺しにした。

今日でさえ、ロシアの強制収容所で、飢えと過労のために、数えきれないほどのソビエト市民が死んでいる。共産主義は、共産中国において、何百万の人を殺している。恐怖は、ソビエトの新聞さえ報ずるところである。ポーランドやゴムルカなど、プロレタリアート独裁の実施されている所ではプロレタリアンを射殺している。共産革命は、いかなる時にも、否定的で破壊的である。

私たちクリスチャンは、全く異なる意味において革命的である。クリスチャンは第一に、そしてまっ先に聖霊の剣を用いる。それは罪びとを殺すことなしに罪を殺すことができる。

聖霊の剣によって、クリスチャンは多くの腐敗を正してきた。キリスト教文明の行きわたるところ人々は自由であり、そこでは無神論者さえ自由である。私は私の敬愛する敵の皆さんが、アメリカ合衆国で、イギリスで、あるいは西ドイツで、無神論者であるという理由で投獄されている人を一人だに名前をあげて指摘できないだろうと思う。しかし、共産主義国では、私の信仰の兄弟姉妹たちは投獄されるか、あるいは殺されるかしている。だれが自由のために戦ってそれを獲得したのか。—無神論者か、クリスチャンか。

クリスチャンは暴君に対する謀反の必要性を否定しない。しかし彼らの乱暴に痛めつけられている者たちが、力づくで彼らに反逆して、環境が良くなるのであれば、彼らの目的は、いつも、独裁のかわりに、平和と公正をのぞむ政権に置きかえることである。それはいわゆる、マルクスの作り出した言葉で言えば〝永遠の革命〟である。永遠の革命は何のためか。革命は革命のためのものか。その終着点には、けっして到達できないのか。目指すユートピアさえ、到達不可能なものか。これは全く自虐主義である。

クリスチャンは、最初の謀反は悪魔であったことをけっして忘れない。彼らは簡単に反逆に訴えることはしない。共産主義政権に対してさえ反逆しない。

しかし、彼らが地上の運命に関心を持っているのは、彼らが地上の目的以上のものを持っているからにほかならない。人は暗い泉の底に住んでいるかえるのようなものだ。そこから、彼らは外界のことを何も見ることができない。信者は、そのような所に住んでいながら、ひばりのさえずりを聞いた者である。そして、奇跡中の奇跡—彼らはその歌の意味を理解したのである！それは、太陽や、月や、星や、木におおわれた山や、丘や、すばらしい海のことを語っている。彼らはこの歌を信じた。彼らは天国があることを確信する。彼らの地上での務めを怠ることなしに、彼らはそれに向かって努力をし、彼らに加わるようにと他の者たちに呼びかける。

ダーウィンよりももっと進化の可能性を信じている者があるとすれば、それはクリスチャンである。彼は新しく生まれることを信じている。彼はかえるがひばりになれると信じている。人間が天界の一員になれると信じている。しかもそれは長い時間をかけてではなく、イエス・キリストを信じることによって瞬時にしてそうなれると信じているのである。

これらはすべてを信じているので、クリスチャンは、天国を求めて努力しながら、この世において正義のために戦うのである。

神は存在するか

今まで、私は、この論文において、次のイエスの教えに従って来た。「一マイル行くように強制する者があるならば、彼と共に二マイル行きなさい。」

私の敵たちは、一つの議論のコースを取るように要求した。私は彼らと一緒に歩いた。私は、問題が全く重要でない時でさえ、彼らと議論を交えた。

しかし、今、私は、無神論者とクリスチャンの間にある問題の基本的な疑問に集中しようと思う。礼拝すべき、信頼すべき、守りとなるべき、慰めとなるべき神は存在するか、それともしないか。

フランス共産党の理論家、R・グラウディによれば、神は、完全に絶対に存在しない。それは〝架空の存在〟に過ぎない。人間より優れているものは存在しない。クリスチャンは神を信じている。この世において彼らを助け、永遠の命を備えてくれるという彼の約束を信じている。グラウディは書いている。「われわれ無神論者にとって、約束されているものは何もない。まだ、だれもわれわれを待っていない。」なんと悲しい言葉だろう！　無神論者にとっ

て、彼ら自身の仲間の忠誠さえ約束されていないのである。グラウディは、全生涯を共産党に捧げたあとで、そこから追放された。彼が失意の時に、だれも待っていて、彼に助けの手を差しのべる者がいなかったし、また友情を示す者ものもいなかった。彼は孤独であった。

ある若い作曲家は貧乏で、賃間に住んでいた。ひとりの友人が彼を元気づけて言った。「あなたの死後、この家の壁に碑銘が刻まれるだろう。」作曲家は熱心に聞き返した。「ほんとうにそう思うかい。」「ほんとうだとも。」と友人は答えた。「〝貸間〟という碑銘が書かれるのさ。」これよりももっと、ガラウディの死後には待ち受けている者がなかった。現世でも、彼が党から追放されたことは、彼と同じように、だれかほかの放逐される人のために、ただ場所を残したに過ぎない。

人は神である。共産主義信条のすべては、この信仰を言い表している。

このごまかしに気がついて、ソビエトの地下詩人のひとり、I・ガバイは、次のような詩を作った。

現今労働信条

われはわれら自らの神なり。されど弱く、過ち多き神。

不合理で、狂気で、ひ弱。神よ、人が神のごときものを愛するのを禁じたまえ。

そして神のようになることをも—神よ、なんじをそれより守りたまえ。

神だって?—多分。邪悪な神。

しかし、実際、私が〝罪なき顔〟をしているのなら、

神よ、なんじを平和な無神論者にならしめたまえ。

神になること—そのことから、神よ、なんじを守りたまえ。

われは神なり。—されど動乱には力なし。

曲解された境界の論理によって、

今や博物館が寺院の中に造られている。
そして神々が人ぼこりのただ中に住んでいる。
われをわが壮大なる狂気の故に赦したまえ。
されど、わが運命に神の偉大さはない。
自ら罰し、自らおのれの罪を赦す。わが壮大なる狂気を赦したまえ！

神の偉大さ—それは罰することだ—
私はどんな隣人に対してもそうしたくない。
私はそのような命令を彼に求めたくない。
神よ、なんじが神の前にひざまずくのを禁じたまえ。自ら身のあかしを立てたり、自らに罪の赦しを与えること禁じたまえ。

われは有りて有る者。神—彼のみぞ神。
なんという大いなる自負。なんという悲しみ。
神よ。なんじがなんじの良心に信頼することを禁じたまえ。

そして、それを無視して生きよ！

人は神である。共産主義信条のすべてはこの信条を言い表している。

人間に優る存在があるであろうか。普通の意味で、天地の創造者、イエスが私たちに、私たちの父と呼ぶように教えられたお方、神は存在するだろうか。
エルサレムの神殿に（多くのエジプトやペルシャの神殿の場合と同じように）至聖所がある。そこには、大祭司だけが、年に一度、印象的な宗教儀式を取り行うために入ることを許された。

イエスの時代にはこの至聖所は空であった。いわゆる契約の箱、神の戒めを刻んだ石の板を収めた黄金の箱はバビロン捕囚の時に、エレミヤによって持ち去られ隠された。（Ⅱマカビーズ、二1～7）ユダヤが捕囚から帰還後神殿を再建した時、聖なる箱は発見されなかった。至聖所には、まったく何もなかった。

この空の状態は象徴的な発見を持っている。

古代の宗教慣習を記録しているユダヤの聖書、カバラは、神をエイン―非存在と呼んでいる。深い宗教文書に無神論者が喜びそうな神の名を見出すことは奇妙に思われるかもしれない。しかし、その意味は、神を知っている者には明瞭である。

神は、われわれがかくあるはずと考えるような意味では〝存在しない〟。神の思想はわれわれの思想ではない。そして、彼の方法はわれわれの方法ではない。

フォイエルバッハが、人間は彼ら自身のイメージに従って神を造ったと言ったのは正しい。しかしフォイエルバッハは独創的ではなかった。彼は神を非難するためにこう言ったのである。歴史上、最も深遠なる宗教思想家のひとりであるルーテルは、三百年前にこう言った。

「信仰は神の創造主である」。

人は、物事の原因と結果について、自然と人生の不思議について考え、心は神の概念を造り出す。神は、人間の思想の愛する子、そのむすこである。しかし、ひとたび彼がこのことに思い及ぶと、彼は直ちに、彼の心に誕生したこの神は、すべてのもの、そして彼自身の人格の創造主であり、彼は彼自身の意識外の客観的な存在を持っており、人はすべてのことを彼に負っているという結論に達する。そのように、子なる神から、人は父なる神の概念に達する。これら二つの概念は、われわれが聖書から学ぶように、言語に尽くし難い愛、聖書によって互いに一つに結ばれている。神は信仰を持つ人間を創造した。信仰は〝神〟の概念を造り出す。

このように深く、われわれは、神についてのわれわれの概念を理解する。

しかし、われわれを造った神はわれわれの理解をはるかに超えている。神はわれわれの理性が考えることができるようなものではない。

神学は神が存在するという多くの議論は提供してきた。このことに対して、宗教に反対する者たちは、反対の議論を提出した。

私は議論するつもりはない。弁護してくる者を必要としている神こそ悲しかれ。神は御自身を表わすことができる。あなたは太陽の存在を証明する必要はない。―ましてや、それの創造

主についておや。太陽が雲におおわれている時がある。その時、それを見たいと思う者たちは、待たなければならない。もしも神が、熱心に彼をたずね求める者にのみ見出されるようにと彼自身を隠されたいと思うならば、私は彼の意志を受け入れなければならない。

神は生きとし生けるものに命を賦与するために光を用いられる。しかし、神も光も目には見えない。これまで、光を見た者があろうか。全く真空の管の中では、光の線は見ることができない。私たちが光が見えると言う時、光によって輝いてる空気、物体を見ているのである。このような光は見ることができない。理由は神を指摘するかもしれないけれども、人は神を知るために、意味と理由を超えなければならい。

あなたは自然の中に目的を観察する。大地にまかれた種は、その環境から、窒素、空気、水などの花になるために必要な養分を吸収する。あなたは、やがて、それが成長するのを見る。それは達する目的を持っている。妊娠した卵巣は、母親の胎から、それが赤ん坊になるに必要な養分を取る。再び最終目標に到達する。しかし、種子も卵巣も目的を追求することはできない。それらは知恵ある存在から来る。そのお方が、その被造物にそれらを課するのである。

さらにその上、私たちはその環境に順応する人間を見る。そうでなければ、彼はそんなに長い年月生き延びることができなかっただろう。人間の悪習にかかわらず、時には努力して、時には努力せずに、われわれの生存に必要なものをわれわれに与えてくれる必要なものをわれわれに与えてくれる現実の中で私たちが生きているのは、そのためである。私たちはミルク以外のものを消費することのできない赤ん坊として生まれる。そして、私たちが生まれる少し前、私たちの母親の乳房にミルクが蓄えられる。成長するにつれて、私たちは次第に濃いミルクを必要とする。そこで、私たちの必要に応じて、母親の乳房のミルクが変化する。

私たちは肺を持って生まれ、空気に触れる。私たちは水を必要とする。すると、それは供給される。数か月すると、私たちは野菜や肉に含まれている栄養を必要とする。そして、世界にはそれがある。

私たちは病気に対して敏感である。しかし、私たちは、今では、だれかが、地上の草木、きのこ、貝などからいろいろな種類の病気のために薬を準備したということを知っている。

すべての人間の必要のために、その必要を供給する通信の役割をするものがある。

根本的な必要のために、神を慕う私たちの魂の渇きのために—多くの神話や宗教を造り出した渇き—そこに目的を達成する実在がないと考えるのは、あまりにもごうまんで無知に過ぎるのではあるまいか。

ある秋の日、からすがその年に生まれた若いつばめと話しをしていました。からすがつばめに言いました。「あなたは長旅の準備をしていますね。どこに飛んで行くのですか。」つばめは答えました。

「ここはだんだん寒くなります。こごえてしまう。私はもっと暖かい国へ飛んで行くのです。」かしこいからすは笑っていました。「でも、よく考えてごらん。あなたは生まれたばかりではありませんか。あなたは、ほんの二、三か月前にここで生まれたばかりです。それなのに、どうして、ここが寒い時にあなたを守るもっと暖かい国があることがわかるのですか。」つばめが答えた。「暖かい気候に対する願望を私の心に備えられたお方は、私をだますはずがありません。私はその方を信じます。それで出発するのです。」そのようにして、つばめは探し求めていたものを発見したのである。それは、すべての信仰者の出発の様に似ている。

人間の魂は、神がなければ、この世で氷柱になってしまう。

ファーストの第二幕に出てくるホムンクルスは試験管で造られた人造人間だった。彼はいつも寒さにふるえていた。あなたが、あなた自身のことを化学反応の複雑な組み合わせであると考えるならあなたは震え上がる。私たちは暖かさ、愛、光の源である父なる神を恋い慕う。すべての根本的な人間の必要が現実に達成されるように、魂の必要も同様である。私たちは神を見出すことができる。私たちは神を知ることができる。

しかしながら、知識の分野は特別の道具を用いなければ探求できない。あなたは望遠鏡を通さなければ星を見ることができない。正しく考えることのできない人間は、物質の分野における生命の機能である知覚を通して神を見出すことができないから神は存在しないのだという結論に達する。近くは神を見るための正しい手段ではない。

微生物学は特別な器具を持っている。天文学はまた違うものを持っている。それと同じように、信仰もまた、創造主なる神を見ることのできるものを持っている。イエスは言われた。「心の清いものはさいわいである。その人は神を見るであろう。」そのような心を持つなら、あなたは見ることができる！

読者の皆様は〝見る〟という言葉は多くの意味を持っていることを悟るにちがいない。私が物質の対象を見るのは、それに反射した光子が私の目に入るからである。心の中に思いめぐらす推量によって、私は、原因の正しさを見る。彼の態度によって、私は、私に対する愛の人格を見る。私は目を閉じて、愛するお方のお姿を思い出すことができる。彼は遠くにいる。そこ

から光子は私の目にとどかない。しかし、私は見る。私は、私の夢、白昼夢、空想を語ることができる。生活の半分を、私たちはこの方法で見る。

私たちはいかにして神を見るのか。

私たちの空想の中にイメージが貯えられる。そして私たちは、あたかもアルバムの中から引き出すように、必要なイメージを排出する。しかし、私がこの金庫の中に持っている物質世界からだけイメージがひき出されるのではない。私の存在は、私の誕生日の日から始まるのではない。私は神のみこころと御計画の中に、永遠に存在していた。私は、このように、ほんの短いとき、巡礼として、また旅人として来たのである。

私は捕乳時を通過して生きてきた。私は、その時に蓄えたイメージを私の中に持っている。赤ん坊は自分から生活のイメージを呼び出すことはできないということのほかは、全く成人と同じようなイメージを持っている。しかし、心理分析や睡眠はそれらがそこにあることを証明している。それらは再現することができる。

そのように、すべての神の認識や再認識に過ぎない。罪や、情欲や、過ちや、恐れや、わずらいや憎しみを取り去った心は、再びその源である神を見ることができる。

しかし、この関係において、私たちは〝見る〟という言葉と〝想像する〟という言葉を同一のものと考えなければならない。なぜならあなたは、人間の言語にはない実在を見るのだからである。

中国に行った最初のヨーロッパ人であるマルコ・ポーロは帰国後彼は、吊り上がった目をした髪を束ねた黄色い人間を見たと人々に語ったので、「マルコ・ポーロはうそつきだ」と言われた。どんな方法で、彼は自分の言葉を証明できただろか。彼は、ただ、人々にこう言うことができたに過ぎなかったのではなかろうか。「私の行った所に行ってごらんなさい。私の会った危険に会ってごらんなさい。私が通過した苦労をしてごらんなさい。そうすれば、わかります。」

私はウィルスの存在を疑う人を得心させることはできない。彼自身が顕微鏡をのぞくのが一番である。

心の清い者はさいわいである。その人は神を見る。神を知るという問題は、人格の清さの問題である。最終的な真理は、きよさの独占物である。賛成の立場からであれ、反対の立場からであれ、だれかが私に神について語る時、だれかが私に神について語る時、私は彼に尋ねる。

「あなたが信頼できると考えられるために、どれほど清いでしょうか。雪より白い人だけがこの問題を理解できます。」

神とは誰か

無神論者は、私たちを罪からきよめるために十字架にかかったキリストの犠牲を受け入れない限り神を見ることができない。しかし私たちに彼らが次のようにたずねることは正しい。「あなたは神を見ると主張する。神とは誰か教えてくれ。」

たいへん重要な質問だ。それは両方にとって言えることだ。無神論者は〝われわれが否定する存在である神とは誰か〟と言うことができるにちがいない。ちょうど、クリスチャンが〝われわれの信じている神とは誰か〟という質問に答えなければならないのと同じである。

神とは誰か。

その問題に関する現代の最大の理論家、ド・プログリエは、こう書いている。「光線があると知ったら、われわれはなんと多くのことを知ることだろう。」偉大な生物学者、ヤコブ・フォン・ウエクスキルは、こう書いている。「われわれのだれも、生命がどのようなものか、知らない。」そして、私たちは生命と光の賦与者は誰でもあるかという問題に答えるようにと言われたのである。

答えのむずかしさはどこにあるのか。あなたが「光、あるいは生命とは何か」あるいは「神とは誰か」と尋ねる時、むずかしさは〝何か〟とか〝誰〟とか〝生命〟とか〝光〟とか〝神〟とかという言葉にあるのではない。とにかく、私たちは、これらの言葉によって何を意味しているかは分かっている。分かりやすさを阻害しているのは、質問文の中の最も小さな言葉、すなわち、〝ある〟という単語である。この〝ある〟という言葉はどんな意味なのだろうか。このことが理解できなければ、ほかのすべてはなぞのままに残る。

キリスト教は大きく二つに分かれる。それは〝ある〟という言葉を中心として起こっている。新約聖書によれば、それは実際にはギリシャ語で書かれたものであるが、十字架刑の前に弟子たちと一緒に持った最後の晩餐において、イエスは彼らにパンを与えて言った。「これは私のからだである。」そしてぶどう酒の杯を取って言った。「これは私の血である」正教会とカトリックのクリスチャンは、この文章にある〝ある〟という単語はただ一つのことだけを意味すると信じている。すなわち、クリスチャンは聖餐式の時に、本当のイエスのからだと血を食べかつ飲むものだというのである。儀式の時に司祭がイエスの言葉をくり返すうちに、その

成分に変化が起こる。外見的にはそれらは相変わらずパンとぶどう酒である。しかし、その中味が変化したのである。パンとぶどう酒だったものがキリストのからだに変化したのである。プロテスタントは同じ聖書を読んで〝ある〟という単語を別の意味に解釈する。それは、彼らにとっては、聖餐式におけるパンはキリストの体の象徴であり、従って、それはなおパンに過ぎず、別の価値を持っていることを意味する。ちょうど、指輪は、それが愛する者からの物である時には、受ける者にとって価値が増大するのと同じである。

何千という書物がこの問題に関して書かれ、大教会が二つに分裂するという事実は、〝ある〟という単語は見かけほど単純なものでないことを示している。〝神とは誰であるか〟あるいは〝光とは何であるか〟を知りたいと思うものは、まず、〝ある〟ということをどのように理解しているかを明らかにしなければならない。

キリスト教は以前の文化に対して否定的ではなかった。先にも言ったように、それは、その考えにおいて、アリストテレス哲学と同じ立場を取っていた。キリスト教は、神の概念を、自らは動くことなく、世界のあらゆる運動を造り出すものと考えた。彼は揺るがない王座に静かに坐っていて、絶えず動いているすべてのものと人間を支配している。アリストテレスは、言葉の非常に厳密な意味で、〝ある（存在する）〟と言ったに違いない。

しかし、動かざる運動者というものは考えることができない。静かなるものは活動できない。機械を動かす原動機はそれ自身の運動をもっている。原動機のもう一つの概念は、単なる存在というだけでなく、―それは動く、ということである。

実体は存在を知らない。カントは純粋理性批判で「存在するということは真実に叙述することではない。……論理的語法において、それは判断の単なる連辞か連結にすぎない。」神は善である、あるいは義であるということは意味をなす。神、あるいは他の何かがあるというだけでは、虚しい言葉の領域に留まっていることを意味する。

存在の意味とは何かを私たちが自ら問う時、答えは、存在は単に成ることか、進化することか、動くこととか、変化することとかしてだけ存在するということである。ヘラクリタスは〝パンタ・レイ〟―

〝すべてのものは流れ行く〟と言った。〝あなたは同じ流れで二度水浴することはできない〟なぜなら、あなたが水浴する間に、あなたのからだは変化し、流れもまた変化するからである。

世界が構成されている基本的な微分子、化学的な要素は、霊的な実体と同様に、存在ではなくて、出来事、事象である。私が〝鋼〟という単語を発音する間に、鉄の原子中の電子は中性子のまわりを何千億回と旋回するにちがいない。私が〝テツ〟という語の最後の音を発する時には、鉄はもはや私が最初に音を発した時の状態と同じではない。微小物理学の領分にくだって見ると、このことを理解することの重要さがわかる。その連続運動の中にある微分子は、私がそれについて〝それである〟という時間の余裕を与えるほど同じ状態に留まっていない。私が〝原子がある〟と言う間に、それは人類の全歴史をひとまとめにしたほどたくさんの過程をたどる。ジェイムズ・ジーンズ興は、「物質は存在する何かではなくて、起こる何かである」と言った。物質は存在ではなくて、流れである。すべてのもの―特に生物―は絶えず変化し、新しくせられる。

すべてを動かすお方が、どうして動かないでいられるのだろうか。もしも神の像が許され、現実に伝えることができるとすならば、神の最も忠実な像は、カペラシスティナの天井にミケランジェロによって画かれた、あらしの中を飛んでいる神だろうと思う。ルツ書には、神の翼のことが書かれてある。

私の敵たちは、神はいないと言う。彼らは、ずっと昔に、上位のクリスチャンの教師がそう教えたことを知らない。ただし、彼らはこの否定に正しい意味を与えていた。スコラ派の哲学者ジョン・スコタス・エリゲナは書いた。「文字通りに言えば、神はいない。なぜなら神は存在を超越しているからである。」聖トマス・アキナスは言う。「その実体である神なる〝存在〟は普通の〝存在する〟というものではない。それは他の存在から明瞭に存在するものである。神なる〝エッセ〟（ラテン語で存在すること）は通常の〝エッセ〟ではない。」

〝存在するもの〟という語は単に名詞であるだけでなく、動詞でもある。創造物は単に名詞だけによって説明できるものではない。なぜなら、それは進化し、それは運動し、それは歴史を生きているからである。あなたは、創造に対して固定の形を持つ限定された意味において、〝ある〟という言葉で言い表すことはできない。創造主なる神に対してはもっとそうだ。あなたが〝神はある〟と言う時、あなたは神について全くといっていいほど何も言っていない。神は現象である。

〝神〟という出来事がある。彼は巨大な来臨であり生成である。彼の名はヘブル語で〝エル〟という。それは関係を表わす言葉である。〝エル〟とは〝方向〟を意味する。アルファ（初め）からオメガ（終り）に至る運動のことである。

モーセに対して明らかにされた彼のヘブル語の名前〝エジャ・アシャ・エジェ〟は、文字通りに翻訳すると、〝私はあるだろうところのものであるだろう〟である。

詩篇の作者ダビデは、神はだれであるからと自ら問うて答えている。「彼は天使の翼に乗って飛んだ。しかり。彼は風の翼に乗って飛んだ。」聖書は私たちに教えている。神は翼のあるものに乗っている、あるいは、むしろ、翼のある出来事の上に乗っている。なぜなら、天使たちもまた〝存在〟ではなく、現象だからである。ほかの詩篇にはこう書いてある。「彼は雲を戦車とする。彼は風の翼の上を歩く。」

世界についての現代の科学的な概念の温和な予見であること東洋の空想と、宇宙の動かざる原動機という思想とを比べてみれば、聖書がいかに正しいかがわかるだろう。神にあっては、彼の愛の固定した品性に関して、変化しないということはない。回転の影も同様である。しかし、この愛の表れは新しいすべての瞬間である。

これが、〝神とは誰であるか〟という質問に答えるのを困難にしている。なぜなら、彼はいつも新しい形で人類に彼の善きものを注いでいるからである。彼の愛の炎は火の炎のように絶えず変化している。あなたは実際には人の肖像を作ることができない。すべての人は多くの表情の連続である。あなたは実際には真理を言うことができない。真理は、いつも、変化する物や人に関する主張の鎖の全部である。

それ故、神が初めに御自身の啓示を与えられた言語であるヘブル語は〝顔〟――〝パニム〟という言葉だけがある。すべての人、またすべての物は、絶えずその局面を変化する。神御自身についても、聖書は、この複数形の〝パニム〟を用いている。彼はまた、絶えずその愛と義の表現を変化する。

あなたが自ら〝神とは誰であるか〟と問う時、何千というイメージが万華鏡のように、それぞれが他よりももっと美しくあなたの目の前を過ぎて行く。それ故、彫像を作ることがユダヤ人には禁じられた。

ヘブル語は〝有る〟という表現を避ける。イエスはヘブル語かそのアラマイク方言を話されたが、〝これは私のからだである〟とはけっして言わなかった。単に〝これ―私のからだ〟と言われたのである。（ロシア語では、中国語でも、〝ある〟という動詞を省略する。）もしも神学者たちがもっとよく聖書の言語を知っていたならば、イエスが言わなかったことについての争いを一つ減らすことができたことだろう。

私たちは、神が初めのお方、天と地の創造主であることを知っている。私たちは、彼が〝すべてのすべて〟なるお方となることを知っている。それでは、今、彼は何であろうか。彼は〝有る〟というものではない。神は一つの極から他の極へと飛んでいる。

多くの科学者が神を認める

無神論者は一つの勝ち点を持っている。私たちは、彼らが無神論とは何であるかを言えないように神とは誰であるかを言うことができない。これは、また、絶えざる進化の中にある。単に神を否定したに過ぎない昔の愚人の無神論は多くの場面を経過して、軍国的な科学的な基礎づけだれた、共産国に支配される無神論になった。

しかし、私たちが神が誰であるかを言うことのできない事実は、私たちの思考を停止させるものではない。

使徒パウロは書いた。「神の見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性とは天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。」

ギオルダノ・ブルーノは言葉あそびをして〝インテレクティオ〟（知性）は自然に私たちに与える〝インテルナ・レクティオ〟（内面の訓練）であると言っている。

機械のことを知れば知るほど、それを考案した技術者を賞賛させられる。美しい宮殿であればあるほど、その設計者に尊敬の念を抱かせられる。

敵たちによって提出された無神論科学者の一覧表は疑わしい。私たちの宇宙はアインシュタインの名に関係がある。彼はそれについて何かを知っているにちがいない。彼は〝私の見る世界〟という本で次のように書いている。

もしも人が預言者のユダヤ主義と、イエス・キリストが教えられたキリスト教、それに続くすべての教え、特に聖職の教えを追放するならば、人類の社会悪をいやすことのできる教えを捨てることになる。彼自身の小さな世界において、できる限り、この真実の人間の教えを生ける力にするように不断の努力をすることは、善意の人すべての義務である。もしも彼が同時代の人々に踏みつけられたり砕かれたりすることなしに、この方面において正直な努力をするならば、彼は、彼自身と、彼が幸運にも所属している社会のことを考えるにちがいない。

パーネットによる彼の伝記の序文で、彼は言っている。「宗教の宇宙の生存は、自然の科学的探究のために、もっとも強力な、崇高な動機である。」

ミルナーは、その著書〝星の相互関係と構造〟という本を次の言葉で始めている。「初めに、神は天と地を創造した。」

生物学者ハンス・スペマンはこう書いている。「実験をしている時は、しばしば、だれかと対話をしているような気持になった。私の相手は、その時、私にとってもっと大きな知性の人のように思われた。」

イマヌエル・カントは書いた。「顔が美しいのは、それが魂を現わしているからである。世界が美しいのは、あなたが、それを通して神を見るからである。」

現代弁証法の創始者で、カール・マルクスの師であるヘーゲルは、哲学に宗教の救いを求めた。フランシス・ベーコンは言った。「哲学は、浅い所では、神からの疎遠を学んだ。深い所ではそれがあなたを神に連れもどることを学んだ。」

多くの科学者を信者にする多くのことがある。彼らは自然の法則と近く、理性、直感、信仰を通して理解する私たちの可能性との間の一致について不思議に思う。

不審者は、彼らが論理的であろうとすれば、無神論者ではなくて、不可知論者にならざるを得ないだろう。創造主はいないだろうか。よろしい。そうすれば、宇宙は、どんな知恵にも導かれない、鉄と、電子と、光子と、陽子の偶然のかたまりである。私の脳もまた、法則を設定した者にない法則によって、このように自然に進化した結果である。そうだとすれば、意図された期間ではない、知的に形成されたものではない私の脳が、宇宙のかくも多くのことを正しく理解することができるのはどうしてだろうか。スターリンは、すべてのことが知られているわけではないが、すべての事は知り得る脳を持つためには、どうしたらよいのだろうか。あらかじめ考えられた設計図なしに投げ出された電球、電池、電線が、ラジオの電波を受信することができるだろうか。車輪、スクリュー、レバー、ブレーキが勝手に集まって、人の運転できる車をつくることができるだろうか。

生物学者マックス・ハートマンは〝宇宙と私たちの思考との間の調和の不思議〟について語っている。ド・プログリエは、化学が達し得る単純な事実よりもさらに不思議なことがあると言っている。アインシュタインは書いている。「宇宙において永遠に理解しがたいことは、それを理解することができるということである。」

無神論者が、あやまって彼らの仲間のひとりと考えているエバン・ポルテールは、次のように言っている。「世界は知性によって造られている。……ニュートンの知性は他の知性から来ている。」

誰が、造った者のいない時計を信ずることができようか。私たちの時計は地球の動きに従って時を刻む。だれがこの精密時計を造ったのだろうか。

創造を注意深く観察する人を驚かす第二のことは、自然界の厳密な秩序である。それは、また、偶然の結果ではあり得ない。

ウエックスケルは言う。「われわれは、自然の中にすべての楽府を読み取る。」地質学者クルーズは書いている。「われわれは大地の音楽を聞く。」

神の存在を信ずるための神学によってもたらされる多くの合理的な証拠に非常に批判的であるカントは、いわゆる宇宙論的証拠の合法性を認めている。自然の秩序は創造主を指さす。

当時の大英帝国の商業主義と功利主義の生活様式の犠牲者であるチャールズ・ダーウィンは、自然もまた、功利主義の原理に従って動いていると考えた。しかし、これはそうではない。自然界では、空想力をもった、ひとりの偉大な芸術家であり、建築家である者が動いている。

孔雀の羽の美事な美しさは、小さな変異の積み重ねによって進化してきたとは説明できない。なぜなら、彼らはもっと簡単に仲間をひきつける有利なものを持っているからである。

めすのからすも仲間を見つける。豪華なゆとりと同様に、路傍の草花は蜂を引き付けて受粉する。

どうしてある種の小さな魚はあんなにも不必要な美しさを持っているだろ。まちがいなく、それは芸術のための芸術である。オウムはどうしておしゃべりの能力を持っているのだろうか。小さな鈴を鳴らすようにさえずるベルバードはどうして存在するのだろうか。それはちょうど、芸術家の夢のようである。鹿の角はどうであろうか。ゼブラはどうしてああも規則的な縞模様をしているのだろうか。どうして、ひとつひとつの花は、それぞれ違う色をしているのだろうか。

ニーチェは言った。「われわれ各人の中には遊び盛りの子供がいる。」これらすべてを創造した神の中に、なにか子供らしいものはないであろうか。それは、まさしく神の本性と言えないだろうか。それはまぶねの中に生まれた赤ん坊の中に、またナザレの町で他の子供と遊ぶ少年の中にも見られる神の本性ではなかろうか。

推奨に見られる性格な角度、左右対称、美しい形はどこからくるのだろうか。

東洋にいる葉縫い鳥が自分でつむいだ綿の糸ではを縫い合わせて巣を作るのはどうしてだろうか。

くもの巣作りが人間の技術に勝っているのはどうしてだろうか。天体望遠鏡に、くもの糸がメジャーとして使用されている。人間は耐久性や耐熱性の上で、それに優れるもっとよいものを作ることができないように思われる。

人間はレーダーを発明した。しかし、彼らはそれをこうもりから学んだ。今日、私たちはすばらしい光学機器を持っている。しかし、その一つでも人間の目に勝ものがあろうだろうか。

私はひとりの共産主義者が、幼児の耳の繊細ならせん状の形を見てクリスチャンになったのを知っている。それらは、まちがいなく、設計通りに作られたものにちがいない。それらは、原子の自然の結びつきによってできたのであるとは思えない。

あなたがもっと人間の耳を調べて、その中で二万四〇〇〇の神経が一つに結び合わされ、脳に情報を伝達する役割をしているのを見たら、賢明な創造主を信じないではいられなくなるではあるまいか。

小麦の茎をよく注意して見てごらんなさい。その高さは四フィート半ほどもあるのに、その直径は一インチの十六分の一に過ぎない。比較するために、千二百五〇フィートの高さの建物を創造してみよ。（それは、だいたい一〇〇階建てのビルデングである。）その床面積は一平方ヤードに過ぎない。さて、その茎のてっぺんには重い実がなっている。それは風に由来でも、折れることはない。茎は驚くほどよく考えられた力学的構造を持っている。そのてっぺんにどのようにして水を送るかは人間によって今だになぞのままである。高層住宅の上の階に水を送るのに、私たちはポンプを必要とする。私たちは茎のようなすばらしいものを作ることはできない。

重水の発見者である物理学者ユーレイは書いた。「世界の起源についての現存する理論は奇跡という仮説なしには働かない。」

さて、水のことを話したので、ちょっと立ち止まって、その不思議を見てみよう。すべての物質を熱で膨張し、冷やすと収縮する。冷やされて氷になって体積を増やすのは水だけである。その氷は水よりも軽いので、上に浮く。それは覆いを作って、冬の寒さから魚をまもる。このような水の特性がなければ、川の中での生存は不可能である。そして、魚を食べて生きていた原始人は生き延びることができなかったであろう。

このような例外はどこから来るのだろうか。それは、単なる偶発的な事なのだろうか。それとも賢明な創造主の命令によるものだろうか。

有名なテクニシャン、ワーナー・シーメンスが次のように言うのを許してあげよう。

厚いベールによって私たちの完全な理解から隠されている、永遠の動かざる法則によって動かされている自然の調和のとれた力の領域に私たちが入り込めば入り込むほど、この科学の止めることの出来ない源から飲みたいと思う私たちの願望と知識は増進する。そして、同じ尺度で、また、すべての創造に浸み込んでいる無限の秩序の知恵に対して、私たちの驚嘆は増大する。

私たちが「神とは誰か」を言うことができないのはそのとおりであるが、しかし、私たちが注意深く彼によって造られたものを見るならば、私たちはその見えざる力を見ることができる。それらは、全能なる支配者、また偉大なる芸術家として神について語っている。それから、私たちは、神が秩序の神であることを知る。

イエスが弟子たちに父なる神を見せて下さいと尋ねられた時、答えて言った。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は父を見たのです。わたしが父におり、父がわたしにおられることを、あなたは信じないのですか。……わたしのうちにおられる父が、御自身のわざをしておられるのです。」（ヨハネ一四9、10）

これらのことばによって、イエスは、私たちが彼の人格について考えるべきこと、しかしまた、私たち自身について考えるべきことを教えている。

釣り合いのとれた感覚を持っているなら、私を見た者は誰でも、あるいは、あなたを見た者は誰でも、あなたが無神論学習書の著者であっても、父を見るのであるということに注意せよ。なぜなら、私たちはみな、彼の像のように、彼に似せて造られたものだからである。

ニッサの聖グレゴリーは「人は神の人間の顔である」と書いた。聖マカリウスは、「神と人との間には、非常に近い家族的な関係がある」と書いた。聖バシルは、「人間は神になれという命令を受けた存在である」と書いた。

人は、すべての人は、どんな人であっても、—無神論者でも、犯罪人でも、聖者でも—まず、その肉体の構造がすばらしい。どんなに悪い、卑しむべき人間でも心臓を持っている。そ

れは人には造ることのできないポンプである。―それは、一日に六〇〇回体中に血を送る。五十年間とすれば十八億四千万回になる。そしてこれはひとときの休みもなく行われる。

第二に、人間は魂という徳をそなえたすばらしい被造物である。それはもう一つの驚くべき実体であって、ほとんど定義することができない。それは全く完全なものであって、ある意味で、肉体なしにも存在できる。そのことは、耳の聞こえないベートーヴェンの第七交響曲で、その独立性が証明されている。あるいは、おしで、つんぼで、めくらという三重苦を背負ったヘレン・ケラーの奉仕の生涯において、それを見ることができる。彼女は著作家であり、偉大なる博愛家となった。あるいは、九才にしてユークリッド幾何学の公理を再発見したパスカルの場合にそれを見る。あるいは、五才にして音楽を作曲し始めたモーツァルトの生涯にそれを見る。

それは、また、透視力、テレパシー、予知力、そしてまた催眠術の経験からして、感覚からも独立していることが証明される。

睡眠状態では、心臓の鼓動がほとんど消えてしまうほどに薄くなる。人はほとんど呼吸を止めてしまったようになる。血液が脳の血管にわずかに動いている。それは毛細血管には届かないかもしれない。適当な酸素がなければ、それは腐敗が作り出すもののためにふさがれてしまう。脳の活動はほとんど停止状態になっているが、睡眠をかけられた人の心は、非常に活発になる。一度、その人に長い詩を読んで聞かせるだけで、彼は一つの間違いもなくそれを繰り返す。彼に、ヘブル書の一ページを読んで聞かせるとする。彼は言葉を知らないかもしれないのに、それを正確に反復する。彼は子供の時からのささいな出来事を思い出す。

魂の領域には非常にたくさんのものがある。

しかし、人間は第三のすばらしい構造を持っている。肉体の上で人間は動物世界に類しているとしても（進化論に科学的に反対している人もあるが、このことは何も恥ずべきことではない。アシジの聖フランシスは〝仲間の狼〟と語らい、〝仲間のモンキー〟とよろこんで話をしたと伝えられる。）人間は、また精神を持っている。それによって、人は神に似ている。

私の敵たちは、それの存在を認めようとさえしないかもしれない。なぜなら、それは感覚では補えられないからである。それが立証者自身である場合はどうか。目はそれ自身を見ることができない。鼻はそれ自身をかぐことができない。精神は感覚に従って動く光景には属していない。それは傍観者であって、その範囲内にくるものに対して、それ自身の好みに従って反応する。

アリストテレスは言った。「あなたが人の中にただ人間だけを認めるなら、あなたは人を裏切り彼を惨めにする。なぜなら、彼の存在―精神―の必要欠くべからざるすべてのものによって、人は単なる人間のいのちよりも、もっと高度なものに呼びかけられている。」単に人間であるということは、人間ではないということである。単なるさなぎに過ぎないと考えられることは、さなぎとして価値がない。それは、また、過程を経て、蝶になる。そのようなわけで、私たちには、人間の品性を下げることが許されない。人に対して、イエスは〝あなたがたは神である〟（ヨハネ一〇34）と言われた。種子の中には種子以上のものがある。それは潜在的な花を持っている。

人間は神の像を持った存在である。私は、神がどんな姿をしているのか言うことができない。しかし、人間を見よ。人類の最良の典型を見よ。そうすれば、あなたは神の何かを見るだろう。あなたは生きる喜び、創造的な熱狂の喜び、知識の深み、美を求める心、いのちの横溢、可能性を見分ける識別力、いと高き所に到達しようとする能力を見るだろう。

人間とは、なんと偉大なる存在だろうか。人は神の似姿であり、神の像である。なぜなら、人もまた、宇宙の創造者である。彼自身の内なる宇宙の創造者である。私の外なる自称は、渦巻くエネルギーの大あらしであり、おびただしい電波や放射能の渦であり、電子や陽子や基本的な微分子の振動である。しかし、物言わぬ電波が耳に聞こえるものとなり、見えざる放射能が目に見えるものなる。そして、理解できない世界が、人間の心に理解できるものとなる。

私の外には、実体がある。私はそれに、量、性質、原因性、究極性、形態を求める。私はこれに、外見上の混沌たる実体を私が編んだ縄で捕えて、それから秩序ある宇宙を作ります。自然がそれ自身の美しさを表わすのは、私の中においてである。私がばらの花を見る時、それは深紅の光をはなって生き生きとし、かぐわしい香りを放つ。もし人間が存在しなかったとするならば、ばらはなんの価値もなくなるだろう。そして、単なる原子の集合に過ぎなくなるだろう。内側から私が親しく知る自然の唯一の対象は、私自身である。そして、私自身の中には何かがある。混沌に秩序を与え、私自身の宇宙を創り出し、お慈悲かもしれないが、私に喜びを与え、あるいは悲しみを与え、私や他の人たちを失望に導く力である。知識のあらゆる局面において、私たちは部外者として生きている。私たちは知れる者から知らざる者へと進んでいる。もし私たち自身が、観察者が見ることができるどんな外部のものよりもまさる者であるならば、私たちを取り巻く世界に外面に表われるものよりまさるものが存在するのは、不可能なことではあるまいか。

レーニンは観念論哲学の創始者ビショップ・バークレーにお世辞を言って、もっとも打ち負かし難い観念論哲学者である、その理由は、バークレーは神に対する信仰のために、筋の通った議論を用意したというのである。ある議論は私にとって非常に強力に見える。彼は宇宙は心の中にのみ存在し得ると言う。心の外では、実体は混沌としている。それは、ト・フー・バー・ボーフーである。それはそれから宇宙を構成する心である。その法則を伝授し、それに秩序の枠組みを与え、それを分類する心である。宇宙というものは心にのみ存在し得る。しかし、人々は永遠には存在しなかった。人間の心もまた同じである。それ故、人間が出現する前には、宇宙に存在したもう一つの心があったにちがいない。人は、彼自身について、構成された宇宙の部分として考えている。宇宙にいつも存在した心は、神と呼ばれた。

私も、また、宇宙の創造主である。内なる宇宙の創造者である。—しかし、私は創造者である！　それ故、私を見る者はだれでも、父なる神を見るのである。

私は、神が誰であるか、あなたに言うことができない。しかしあなたは、人間を見ることによって、神について、何かを理解することができる。

ナザレのイエスを見よ

あなたが知っている、最高のそして最良の人類の典型に目を向け最も愛すべき存在に目を向けよ。そうすれば、あなたは彼の中にぼんやりではあるが、父なる神の何かを見るだろう。

しかし、あなたが特別な方法で神を見ることができる人の子がいる。それは、ナザレのイエスである。—なぜなら、彼は人の子であっただけでなく、神の受肉であったからである。

神はすべてを知っておられる。しかし、わずかながら、神にしても外からしか知ることのできないことがある。裁判官は刑法のすべて、刑罰のいっさいを知り得るがそれでもなお、正しく裁判できるとは限らない。なぜなら、彼は、罪人の生涯を生きたことがないからである。毎日毎日を罪人として刑務所の中で過ごす五年間と、法律に照らして罪を規定し、刑罰を言い渡して過ごす刑務所の五年間とは全く異なるものがある。

神はうそを言うことができない。彼は一度も、何かの道徳規範に違反したという経験を持たない。ところが、これらの罪は、あなたが毎日取り囲まれている生活の無視できない要素である。神もまた、聖天使たちも、死を知らない。死は、彼らにとっては、単なる光景にほかならず、外側から眺めるだけである。

それ故、神の子なるキリストは人間のすべての属性と制限を持った人となった。男性である彼は、女性の誘惑を知った。抑圧された民族の貧しい大工である彼は、反逆や、不正直の誘惑を知った。むち打たれ、そしてのちに十字架につけられた彼は、失望や恨みの誘惑を知った。罪を犯すことはなかったが、使徒たちが、彼の一二才から三十才までの出来事は記録しないほうが賢明であると考えた、このような罪の深みを、彼は知った。しかし、彼らは、彼の三年半の公生涯のことを記録した。それによると、彼の敵たちは、彼がならず者や、汚れた女と親しくしていると言って、しばしば彼を攻撃した。

神の子、イエスは、そのすべての負い目を持った人間の性質にあずかり、死を味わうことを選んだ。かくして、御自身が、ただ単に人を正しく裁くだけでなく、その弁護者、また救い主となったのである。イエスの生涯とゴルゴタの十字架における彼の死は—人間を救う力とは別に—人間の問題を、個人的に、親しく知るための神の方法であった。ゴルゴタの経験の前には、神は、のちに知ったところに比べれば、わずかしか知らなかった。そして、今や、肉において私たちと同じになることによって、彼は、私たちをよりよく理解し、よりよく私たちを赦すことができる。天の王国は、私たちのところにもっと近づいて来たのである。

神の子の、この大いなる謙遜を何に比べることができようか。

アメリカの刑務所の残酷な待遇を改めるために、自ら獄につながれ、多くの年月、囚人として拷問の生活を送り—のちの彼の勇敢な改革運動の準備をすべてととのえたオスボンの職務上の試みに比べることができるかもしれない。

有毒な病原体を自らの体に注射し、そこから得た経験によって同胞を助けたようとしたある医者の行為に比べることができるかもしれない。

しかし、ちがう。これらの類似は、何も私たちに教えてくれない。なぜなら、これらの場合、ひとりの人が彼の同胞である他の人たちのために、彼の命を危険にさらしたのであるが、イエス・キリストの場合には、それとはまったく異なるからである。

キリストは神である。彼の目には、私たちの世界は微々たるものである。すべての国民は、彼の前には、バケツの水の一滴のようなものだ。また、量りの上のちりの一つのようなものだ。彼の偉大なる行為は、むしろ、悪臭を放つ、血を吸う虫に対して人が示す愛の矛盾に似ている。その虫どもは、それらを殺したいと考えている人間の指の間をうごめいている。しかし、彼は、南京虫になり、人間を害する傾向を持った南京虫の生涯を生き、彼の以前の地位を

再び取り戻して、最後に、虫を正しく裁き、彼らの無慈悲な根絶者たちから彼らを守り、彼らを権威をもって擁護し、彼らを無害な利益をもたらす者にしようと考えたのである。

このような例は、多くの人の気に入らないものであることを、私は知っている。しかし、キリストが、醜い、いまわしい、罪深い種族の中に受肉することを選んだことは、天使たちには理解できがたいことに思われたにちがいない。

キリストは、単に、人間の基準にまで下がっただけではない。若い処女マリアの体内で、神秘をとどめる受精の過程を通って、単なる胎児となり、有機物からと同様に無機物から滋養分を取り、胎内で九ヵ月を経過して、赤ん坊となり青年になり、そして人となった。どんな人になったのだろうか。彼は、バル・コクバのような英雄になったのではない。タヤナのアポロニウスのような偉大なる始祖になったのではない。プラトーのような哲学者になったのではない。人を、すべての人を救うために、キリストは、人類がおぼれると同じ深みに身を沈めなければならなかった。それ故、人間の正常な成長過程を経た後で、彼は、教養のない社会階級の一員であるユダヤの大工になった。彼はたくさんの言葉を知らなかった。彼は、ときどき、卑しい基準の討論に参加しなければならなかった。なぜなら、彼が討論するのはこのような水準の人たちだったからである。彼は、弱さ、怒り、苦痛、恐れを知った。そして、彼は犯罪人たちの中に身を置いた。

イエス・キリストにある、人々の非難の的になるようなこれらのことが、理解する人々にとっては、彼の大いなる謙遜と底れない愛を崇める刺激剤となっている。

そして、キリストに、彼がどうしてこのような犠牲を払ったのかと尋ねるならば、彼は威厳をもって単純に、神はそのひとり子を給わるほどにこの世を愛してくださった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠のいのちを得るためであると答える。彼は父なる神が彼を遣わしたのだと言う。

私たちは、神が何であるかを言うことが出来ない。しかし、キリストを見ることによって、私たちは、彼の品性の何かを理解する。私たちは、神をもっともよく表現するものは愛、義、人類に対する慈悲であることを見る。私たちは彼がこのような愛であることを知る。そして、この愛が彼をして御子を与えせしめ、私たちのために死なせたのだということを知る。

神の品性は愛と義と慈悲である

創造

しかし、なぜこのような回り道をするのだろうか。どうして、私たちは、自然の中に、人間の中に、イエス・キリストの中に神を見るのだろうか。

バビロニヤのタルムードに、異教の皇帝がラビに質問したことが書かれてある。「わたしに神を見せよ。」ラビは答えた。「一つの条件の時に、あなたはご自分の目で神を見ることが出来ます。まずあなたは五分間、太陽を直視しなければなりません。」皇帝は太陽を見たが、すぐに目をそらしてしまった。そこで、ラビは彼に言った。「あなたは一分間も太陽を見ることができませんでした。太陽は神の創造のごく一部です。それなのに、あなたは、無数の星にその光を与えられるお方を見たいと言っています。」

確かに、現代の知識人には、信仰は分かりにくい。

彼は、世界では、すべてのことが自然の法則に従って生起していると思っている。存在する事物が前の発展の結果であるように、一つの物から他の物へと精密な法則に従って発展する。山や、谷屋、川や、生物は、この世で普通考えられている意味での創造ではない。星が創造ではなく、ある前の状態からの発展であるという考えと同じである。ある星は古く、消滅寸前である。ある星は成熟期であり、ある星は幼児期である。あらゆる年代の星が、宇宙に存在する。それでは、創造の時期はいつだったのだろうか。消滅した種の数は五〇万と計算される。今存在する種は、いつも存在していたとは限らない。種の中で進化することが知られている。この理屈からすれば、すべての生物は神の直接の創造ではないと言える。

神が世界を創造したお方であると単純に考えられないところに、むずかしさがある。彼は生ける、いのちを賦与する神である。彼は絶えず、彼の固有の品性である科学的法則に従ってすべてのものを動かしている。それ故に、彼を捕らえるのが、非常にむずかしいのである。

ヘラクリタスは、「それは、それ自身を隠してよろこぶ性質を持っている。」と言った。このことは、神について、更に適切に言い得ている。神についてソロモンは言う。「主は自ら濃き雲の中に住まおうと言われた。」（列王記上八 12）

優れた存在であればあるほど、それ自身を隠して、さらに大いなる恵みを与える。そのような存在が神である。そして、それ故に、彼は見えざるままにいる。私たちは、私たちの祝福の源を探さなければならない。ルターは言う。「無はさらに小さな存在である神がなくとも小さい。無はさらに大きな存在である神がなくとも大きい。無はさらに短い存在である神がなくと

も短い。無はさらに長い存在である神がなくとも長い。無はさらに広い存在である神がなくとも広い。無はさらに狭い存在である神がなくとも狭い。」彼の著作のほかのところで、彼は付け加えている。「無はいっそう神を存在せしめる。そして神とその力よりいっそう中心的である。」

そして、私たちは、神の霊が動く時以外には神を見ることがない。ちょうど、風が吹かなければ空気を見ることがないのと同じである。あなたの中で、霊の衰弱した感覚を目覚めさせ、あなたが主の存在を知覚するのは、黙想と霊的経験を通して、イエス・キリストの犠牲を信じる信仰があなたに与える純粋性を通してだけである。「心の清い者は幸いである。その人は神を見る。」とイエスは言う。

あなたはどうしたら人が清くなるかを人に言うことができない。

なぜなら、あなたは彼らよりも清くない。これから清くなるのである。それにもかかわらず、あなたは神を知る。あなたは栄光から栄光へ、神の似姿へと変えられれていく。

神は存在する

私は〝神はいます〟と言い残して獄死したクリスチャンたちを知っている。彼らはまちがっていたのだろうか。ちがう、わたしもまた、これと同じ言葉を口にして死ぬにちがいない。

私たちはそれぞれ異なる基準で生活している。科学者は、すべての物体は基本的な微分子の旋風であることを知っている。お互いの微分子が距離を保ちながら、地球と太陽のように釣り合っているのである。しかし、彼はなんのためらいもなく椅子に腰かける。それが非常に固い物体であることを知っているからである。ある意味で、すべての壁は、巨大な真空の中を電子が回っている大きな空洞である。しかし、ほかの基準から考えると、壁は空間以外の何ものでもない。あなたはこの邪魔にならない壁に注意しなければならない。あなたが原子理論を考えながら壁に向かって突進すると、あなたはひどく頭をぶっつけることになる。

同じことが宗教についても言える。私たちが説明したように。〝神〟に対して〝存在する〟とか〝ある〟とかいう言葉を適用できない高い、哲学的な基準がある。なぜなら、それらの言葉は、あまりにも単純だからである。神は存在している以上のものである。私たちクリスチャンは、神についての無神論的な否定を考える心の余裕を持っている。ところが無神論者は一つの基準に現れる事実だけしか知らない。それ故、彼らはそれを間違って理解し、そのために、

彼ら自身を恐ろしい危険にさらすことになる。神が単純に存在するか、あるいはあるかということについて、もう一つの基準がある。

部分的な真理というものは、危険なものである。私たちが真理、完全な真理、真理以外の何ものでもない、と価値づけるのは理由のないことではない。

すべての教養ある人間は、ニュートンの宇宙とアインシュタインの宇宙に同時に生きていることを知っている。その二つの宇宙は、それぞれ独自の法則を持っている。ニュートンの宇宙しか知らない人は月に飛ぶことも出来なければ、原子力を持つことも出来ないだろう。私たちは、神に会うことができない世界と、無神論者は知らないが、神が単純に存在する世界、そこで、彼と、私たちが交わりを持つことが許される第二の世界とに同時に生きている。

それは霊の世界であり、実際的な宗教の世界である。

椅子も、壁も、パンも存在する。そして、それは、分子理論や原子理論とはかかわりなく、用いられている。同じように、神は単純に存在する。

突然、特別な危機の時に、自覚の壁を破って神の臨在が現れる。

古くから知られる実例がある。そして、私は個人的に、このような多くの例を知っている。もちろん、無神論者の、—党の追放の犠牲になって共産党の牢獄で死んだ共産党の指導者たちの例も知っている。彼らは、最後の瞬間に、〝神さま!〟あるいは〝イエスさま!〟と叫んだのである。

歴史全体を通じて、何百万という人の心に、この神に対する信仰をもたらしたのはどこからであるかとたずねることは有益なことではなかろうか。神を否定する無神論者は、彼ら自身の心に存在する観念を否定しているのである。イギリスの哲学者ロックは、私たちの感覚を通過したもの以外は、私たちの知性に何も残らないという思想を展開した。ニューギニアのジャングルに住む未開の人間は、その心に〝テレビ〟という概念を持たない。なぜなら、そのものが彼の生活している世界には存在しないからである。もしも人類が、かつて一度も神を経験したことがないとするならば、どうしてその心に、このような概念を持ったのだろうか。

もしも人類が、かつて一度も神を経験したことがないとするならば、どうしてその心に神の概念を持ったのだろうかという疑問に対して、エンゲルスは、生存中に、一つの答えを用意し、神の概念は、社会的現実が私たちの心に幻のように反射するものであると言った。そこで、クリスチャンたちはエンゲルスの答えは間違いで、神は幻の反射ではないことを証明しよ

うと努めた。しかし、神に関する概念は、天の実体の性格な反射である。ほかの観点から考えてみよう。

私は、神に対する信仰は幻の反射であることを認める。そして、その幻だけが現実であることを付け加えて置く。人間が月に行くことが出来るとか、潜水艦が北極の氷の下を潜り抜けるとか、飛行機で短時間に地球を回ることによって距離をなくすとか、原子を分離するとか、天然ガスで家を造るとかということを否定する〝現実主義〟は、すべて、あやまりであることが証明された。同じように、神の世界に住んでいるのであって、現実には存在しないとまじめに主張する人たちの〝現実主義〟も間違いである。他方、レオナルド・ダ・ビンチや、ジュレス・バーンや、彼らのような他の人たちの夢は、現実となった。神と共に歩いているという夢想家の夢を、あなたは見ることもできなければ、触れることもできない。そうするためには、あなたは信仰の機能を発展させ、すべての被造物の行き渡っている現実を感知しなければならない。

夢だけが現代科学の真実である。ニールズ・ボーアは尋ねて言う。「真理を完全に所有するほどの狂人がどこにいるだろうか。」

科学とは何か。夢を真実ならしめる紀律である。

細胞の核の中にある染色体に前の世代すべてが、新しい世代に、彼らの経験と、彼らの継続的な形態を伝えてきたコードがあることが発見された。今、この知識は、たんぱく質が組み立てられる核だけでは説明がつかなくなった。そのようなわけで、核にはゼロックスの機械のような、染色体を写真複写する装置がある。そして、そのゼロックスの機械を操作する〝だれか〟がいる。複写は必ずしも原本のままではない。複写機を操作する〝人〟は、写真複写をする時、記録の一部を消したり、あるいは特別な記録を付け加えたりする人のようである。そして、染色体は、この知識を細胞外に運び出す。

なんという夢のような話だろう。どんな小説家も、これ以上の話を創作できなかった。この夢が私たちの期間に関する真理である。

宗教も、また夢の反影ではあるまいか。そして、それは、幻の実体の正しい反射であり、また、幻の創造主の正しい投影である。

人間の心は二重の性質を持っている。それは、事実を理解すると同時に、夢を見る。もしそれが夢を見ることがなかったとしたら、人間性は進歩しなかったであろう。文明は以前には夢であったことの成就である。私は事実にだけ立脚する宗教を拒否するだろう。それは、私の二

重の性質を満足しないだろう。それは、夢の後に、神話の後に、私の望みを満たすにちがいない。

マルクスとエンゲルスは、初期の資本主義下に存在した恐ろしい搾取という事実を記述した。しかし、彼らはそれに止まらなかった。なぜなら、彼らは人間だったからである。事実を分析した後に、夢が働き始めた。搾取や戦争のない、社会主義に基づく新しい社会の夢である。科学の夢は成就してきた。信仰生活をこれから始めようとする人にとっては全く夢である聖なる生活は、多くの人々によって達成されている。しかし、マルクス社会主義社会は、いまだにユートピアである。そのようなわけで、エンゲルスが、キリスト教を夢に属するものとして非難するのは、蛇足のつもりだったかも知れないが—当を得たものとはいえない。

あなたがたは、可能性の領域を超えていることを創造することは可能であると答えるにちがいない。このようにして、あなたがたは太平洋の真中にある全部がダイヤモンドから成る一マイル四方の島を創造することができる。しかも、このような島は存在しない。しかしあなたが〝想像した〟すべてのことは現実である。自然には、島がある。太陽がある。ダイヤモンドがある。そして一マイル四方の広さが存在する。今、あなたは、不適当に、現実をつなぎ合わせたのである。しかし、それこそ、あなたが想像することができた現実である。そのように、私たちの心の中で、私たちの持っている神の概念が、まちがった思想と結び合わされることである。私は、悪い神人間の姿をした神、部族の、あるいは民族の神、そのような類のその他の神を信じることができる。しかし、いずれの時も、私は、正しいか正しくないかは別として、現実を取り扱っている。神は自ら存在する。そして、存在するものである。私たちが存在すると考えるものが神ではない。

エンゲルスは、私たちの信仰はばかげたものだと、私たちに言うべきではなかった。

もしも神が私の理性の枠組みに適合することができるものであるならば、それは神ではなくて、私と同じ類の低い存在に過ぎないだろう。五歳のむすこに理解される哲学の持主である哲学者は、ほんとうは哲学者でないにちがいない。神であるべき神は、彼の行為と彼の存在によって、私たちの理性を越えるものではなければならない。

私たちの呼吸している空気は、私たちの肺に合うように、窒素と酸素がちょうどよく配合されたものである。太陽や月からの地球の距離は、生命、健康、幸福を維持するのに、ちょうどよい具合になっている。雨や雪の間断のない周期は、土地を肥沃にする。打ち寄せる波は、海岸をきれいに、新鮮に保つ。からだを維持するために必要なビタミンは豊富に供給される。自

然の法則と力は、人間が利用するのを待っている。神は地球を美と魅力で満たした。そこには壮厳な山と豊かな谷、高い木と緑ののじゅうたん、月の光、砂漠の静けさ、小鳥の囁きがある。それらは、みな、神が私たちのよろこびのために地球を造ったという事実を証明している。

ひとりの若者が少女を愛して、彼女にすばらしい庭園に囲まれた邸宅をプレゼントして、「これは、私があなたのために造ったのです」と言ったとする。そうしたら、少女は、疑いもなく、若者が彼女を愛していると思うだろう。このことは、神を私たちとの間の出来事と全く同じである。彼は、私たちのために食べ物を育てた。そして、地中には道具や燃料のために、鉱物や石油がある。これらは、みな、神が私たちの必要を満たしてくれる証拠である。そしてそれ故に神が実際に存在するという証拠である。

神は理性の枠組みを超域した存在

蜜蜂のことを考えてみよう。それは蜜を貯えるために一万の部屋幼虫のために一万二千の部屋をもった町を造って、蜜を貯え、女王蜂のための場所を造る。蜂は温度が上がって、ろうが融けて蜜が流れ出すのを見ると、彼らはいくつかの群れをつくって、入口に番兵を置き、足を付けたまま羽をふるわせて、蜜を冷やすための空冷装置をつくる。—それはちょうど電気扇風機のようなものだ。蜜蜂は二十マイル平方の地域から蜜を集める。さて、蜂の小さな頭脳がこんなすばらしいことをすることができるのは、その背後に、もっと高度な心—神の心があるからではあるまいか。

シカゴの科学者のあるグループが一つの実験をした。めずらしい種のめすの蛾が部屋に放された。同じ種のおすの蛾が、四マイル離れた所から放された。町の煙にかかわらず、距離にかかわらず、そしてめすが閉じられた部屋に入れられていたにもかかわらず、二、三時間して、おすの蛾が、めすが閉じ込められている部屋の窓ガラスを羽で打ち叩くのが発見された。このようなことは、知的な存在—すべてを創造した神をぬきにして説明できるだろうか。

魚がノルウェーの峡谷に卵を生む。そして、卵からかえった稚魚は、どうにかして、大海を横切りカリブ海まで、彼らの道を見つけてたどり着く。産卵の時期になると、今度は、彼らが以前に出てきた正確に同じ峡谷に帰って来る。人間の場合には船長になって、地中海を横断航海するためには二十年間、学びに費やさなければならない。だれが、これらの魚に航海術を教えたのだろうか。

私たちが刑務所に入れられていた時、つばめが私たちの部屋に巣をつくった。そして、いつも秋になると私たちの国から旅立って行った。しかも、この同じつばめたちが、モザンビークのような遠い国から、彼らが半年前に飛び立ったルーマニアの刑務所の、正確に十二号室に帰って来た。

目を開いた彼らのために、神の知恵と力が方向を定めさせる。

神は存在するか。この質問は尋ねる必要もないことである。

主題叙述形式のすべての事実な表現においては、叙述は主題の中に含まれている。神は理想の存在である、すべて最高の資質の集大成であり、愛とか、善とか、義とか、全能とかである。もしも彼がすべての完全の所有者であるならば（そのとおりであるにちがいない。そうでなければ、彼は神であるはずはなかろう）彼は、また、存在をも所持していなければならい。存在しない神は、完全の集大成とは言えないだろう。〝神は存在するか〟と尋ねることは、〝存在を存在しているか〟と尋ねるに等しい。

神は存在する。この信念をもって私は生き、この主張をもって私は死ぬことをのぞむ。私が神は存在するという表現を用いるのは、ただ、無神論者を相手にしているからである。ほかには意味のないもので、〝独身男性は男である〟と言うに似て、同じ言葉の繰り返しである。あなたが〝独身男性〟と言った時には、すでに〝男〟と言ったのである。同じように、あなたが〝神〟と言った時には、彼の存在は暗黙のうちに了解されている。

祈りが、理屈なしに存在する。どうして人間は祈りを持っているのだろうか。どこから、この現象は始まったのだろうか。どこからでもない。人間は絶えず神のことを考え、彼との交わりを探し求めてきた。哲学も、実際的な宗教もある時には原始的であった。またある時には恐ろしく間違っていた。しかし、それらは存在した。

北アメリカのインデアン部族の祈りに次のようなものがある。

おお、わが母なる大地よ。

おお、わが父なる天よ。

われらはあなたの子供です。

あなたが求める犠牲を、われらは膝をかがめて捧げます

輝く太陽の着物を私たちに編んでください。
朝の白い光は縦糸。
夕べの赤い光は横糸。
降りしきる雨をふさにして、虹でへりどりしてください。
輝く太陽の光の着物を私たちに編んでください。
私たちは小鳥のさえずる中を歩きたい。
私たちは緑の草原を歩きたい。
おお、わが母なる大地。
おお、わが父なる天よ。

聖オースチンは、小さな子供のように、祈りの経験を書いている。

私は学校に入れてもらって、読み書きを学びました。そのことが役に立つとは、ちっとも思いませんでした。いつも、同じように、私は覚えるのが遅くて、叩かれました。神よ。わが神よ。私はなんと惨めに苦しんだことでしょう、なんと私は騙されていたことでしょう。

しかしながら、主よ、私たちはあなたに対して祈った人々と交わりを持つことができるようになりました。彼らから、私たちは学びました。—能力のすべてを預けて、私たちがあなたのお姿を思い浮かべた時、あなたは、偉大で、力ある、私たちの言葉を聞くことができ、私たちを助けることができ、あなた御自身が姿を現さなくとも私たちに知覚できるお方となりました。そして、小さな子供ではあっても、私は、私の避けどころ私の助けであるあなたに祈りはじめました。そして、あなたに話しかけながら、私は何を言っているのかわからなくなりました。私は小さな子供にすぎませんでしたけれども、学校で、もうこれ以上叩かれないようにと私は熱心にあなたに祈りました。

無神論の学校で育ったソビエトの兵士たちが、戦場で祈った。どう祈ったらよいのかわからなかったでの、彼らの多くは「神と母の霊よ、助けたまえ!」と言った。スターリン時代に追放の犠牲になった、むかし共産党員であった人たちが、刑務所で私たちと同じ部屋になった時、彼らは困難な時に祈った、と私たちに語ってくれた。

このような祈りは、聖ガートリュードの祈り、「イエスよ、私はあなたで、あなたは私です。私はあなたではありません。あなたは私ではありません。私たちは、ともに、全く新しい存在です。」というような高尚な祈りとは遠くかけ離れた叫びである。

しかし、人間は祈る。私は無神論の講師が、彼の無神論の講演が成功するようにと神に祈ったのを知っている。彼は生活の糧を得ることができるようにと、祈ったのだった。

意識するとしないとにかかわらず、人間は、存在し、出会うことのできる神との交わりを求めている。そして、彼らが熱心に求めるならば、彼らは神に出会う。

聖書の預言の成就

預言

〝無神論学習書〟の著者たちはどんな預言の可能性をも否定する。彼らは〝科学の名のもとに〟預言を御用済みにしている。それならば、歴史上傑出した科学者〝理性の父〟と言われた人、アイザック・ニュートン興が、〝預言に関する考察〟という本を書いたのはどうしてだろうか。彼は、イエスの歴史を、最初に、真に科学的に年代別に整理した人である。

しかし、預言が可能かどうかという議論のかわりに、事実を分析してみよう。事実は、証明されるならば、自らのために語る。預言が成就したことを示している事実があるだろうか。

聖書の浅い知識をもってさえ、これまでに成就した何百という預言は明らかであり、また、私たちの目の前で成就しつつあるものもある。

第一に、聖書の重要な主題であるイエス・キリストに関する預言がある。

聖書では、キリストがアブラハムの子孫から出て、ユダ族に属することが預言された。預言者ミカは、キリストがベツレヘムの町に生まれることを、実際の出来事をさかのぼること七百年前に預言した。おおよそ同じ頃、イザヤは、彼の職責と苦難を預言し、彼の生涯の概要を述べた。預言者ゼカリヤは、イエスが謙遜にロバに乗ってエルサレムに入ることを預言した。詩篇四一篇は、彼が弟子のひとりに裏切られることを予言した。ゼカリヤは、この裏切り者がその裏切りによっていくらの金をせしめるか、そして金を受け取ったあとどうなるかを預言した。イエスがむち打たれ、つばきをかけられることも預言された。

キリスト以前五百年ほど前に、ゼカリヤは、人々は彼らが刺した人を見るだろうと書いた。ダビデは、彼の両手、両足が釘打たれるだろうと預言した。イエスの復活も同じように予言された。

これらの預言のあるものは、それらの〝成就〟は、イエスとその追従者たちによって―彼がロバに乗ってエルサレムに入城するとか、十字架で「われ、かわく」と叫ぶとかと、単純に並べかえられたものだと言って、ばかにされたり、無視されたりすることがあるかもしれない。しかし、ローマの兵士たちが、詩篇に書かれている予言「彼らは私の衣を彼らの間で分けて、私の着物をくじ引きした」という言葉を成就するためによく考えて準備しただろうか。ローマの兵士はユダヤの預言について、どんな知識を持っていただろうか。あるいは、どんな関心を持っているだろうか。しかも、この十字架刑の場面の記述者は、みな兵士たちが彼の着物を記録した。ヨハネは、それに付け加えて、縫い目のない布を値打ちがあったので、裂かれて四人の兵士たちの間で分けられたと書いている。

しかし、すべての中でもっとも大きな出来事、イエスの死者からの復活についてはどうだろうか。彼はその舞台まわしをすることができただろうか。

たとえ彼が、無神論者が好んで言うように、大嘘つきだったとしても、ユダヤ人とローマ人がそろって見つめる中で、十字架の上で死なず、（もう一つの明白な予言の成就となる）どろぼうたちと一緒に骨をくだかれるということもなく、封印され、番された墓で死なずにいることができただろうか。そして、彼がこのことを全部指示したとして、彼の恐怖におののいている臆病な弟子たちに、兵士たちの囲みを破り、封印された石を転がし、妨害されることなしに彼を釈放するのをまかせることができただろうか。それは考えられないことである。

ローマ帝国の有名な歴史学者モンセンは、救い主の復活を、ローマ史の中で、もっともよく証明された事実であると言っている。それは人間によって仕組まれたとは考えにくい。それは予言の成就であった。

ユダヤ民族についての預言

「予言というものはない」と彼らは言う。私たちが予言者と呼んでいる人々は、正しい知識の持主であった。それで、彼らは出来事を予言できたのである。

〝無神論学習書〟によれば、人類の最高の知的天才は、マルクス、エンゲルス、レーニン及びその類の人たちであった。〝無神論学習書〟が政治や社会の出来事を理解のある上でもっとも強力な手段―すなわち、史的唯物論に考えていることを、彼らは心の中に持っていた。

マルクスは〝ユダヤ問題〟という本を書いた。彼は、明らかに、史的唯物論が思想家に賦与する可能性を持っていた。十九世紀後半に生きていた彼が、諸国に散らされていたユダヤ人が彼らの土地に帰り、彼ら自身の国を持つだろうということを少しも考えなかったのはどうしてだろうか。レーニンは二十世紀まで生きていた。シオニスト運動がすでに始まり、次第に強力になっていた。彼（人類の偉大なる天才）は、ユダヤ人が彼ら自身の土地に集められるとは、全く考えなかった。政治生活において、あらゆることの鋭い観察者であった彼は、史的唯物論という強力な武器を持っていたにもかかわらず、シオニストのことも考えもしなかった。彼はこの運動のことを一行も書き記さなかっただけでなく、その勝利を予想だにしなかった。

スターリンは、〝国民の疑問〟という題の本を書いた。それは第一次大戦前に書かれた。一度は、無神論者によって、これまでには出なかったし、これからも出ないであろう最大の天才と言われた彼は、国民としてのユダヤ人を認識したことはなかった。なぜなら、ユダヤ人は、国民とは何かという彼の提議に入らなかったからである。

しかし、発展途上のユダヤ国、マルクスの本の反ユダヤ主義と、彼らがスターリンの本において無視されたという事実を無視した。ユダヤ人は国家を形成した。それは、全く別の本―無神論者がどの本よりもさげすんだ一冊の本―聖書で予言されていたことの成就であった。

かつて、プロシャのフレデリック大王が彼の武官に尋ねた。「聖書が本当に霊感されたものであるという証拠を私に提出せよ。」武官は答えた。「それはユダヤ人であります。殿下。」ユダヤ民族とその奇跡の歴史は、聖書の予言の真理のもう一つの証拠である。

不思議でならないのは、〝無神論学習書〟の何人かがユダヤ人であることである。それが、ユダヤ人のある者はすべての人々の呪いとなるであろうという聖書の予言の成就である。しかし、無神論と戦い、神についての知識を広めているユダヤ人もいる。かくして、それは、イスラエルの残りの者は最後の日に、救い主イエス・キリストに帰り、大いなる祝福となるという聖書のほかの予言の成就である。

ユダヤに関する予言は、約四千五〇〇年前、最初のユダヤ人であるアブラハムに対してなされた約束をもって始まる。それを見よう。「わたしはあなたを大いなる国民としよう。」

キリスト教世界はひとりのユダヤ人の名前、イエス・キリストを担っている。共産陣営は、もうひとりのユダヤ人の名前、マルクスを担っている。宇宙全体はもうひとりのユダヤ人の名前、アインシュタインを担っている。ノーベル賞受賞の六十パーセントはユダヤ人であり、彼らの中には、今は亡きソビエトの作家、ボリス・パステルナークがいる。ユダヤ人は共産主義革命において非常に大きな役割を演じた。―トロッキー、ツィノビエフ、カメネフなどがその人たちである。レーニンは半分ユダヤ人だった。今日ユダヤ人は、ソビエト連邦内部における反政府闘争において、大きな役割を演じている。リトビノフ、作家のダニエル、クラスノフ＝ラビティン、その他投獄されて苦しめられている自由戦士たちはユダヤ人である。ユダヤ人は、アメリカ合衆国はじめその他の多くの国で、経済生活や政治生活の面で活躍している。彼らは多くの西側国家において、政府の要職を占めている。ユダヤ人のテーラーは〝核爆弾の父〟と呼ばれている。セール・ハリソンはその著者〝著名なユダヤ人たち〟で次のように書いている。「今日のユダヤ人が世界の金庫を握っているということに、だれも依存を差しはさまないだろう。彼らは先々で経済の専門家になる。」

パシル・モウルは、その著書〝聖書から見た今日の出来事〟で次のように言っている。「第一次大戦前にイギリスから出た西ヨーロッパの大学教授を注意深く数えてみると、約七〇パーセントがユダヤ人、またはユダヤ教徒であった。」

史上初めて、婦人がローマ教皇庁で働くことになった。彼女はユダヤ教のクリスチャンである。

ユダヤ人女性、シモーヌ・ウエイルは、今日のカトリックの最も深遠なる神学者のひとりである。

ヘブル語は、復活して、現在、イスラエルで一般に話されている唯一の古代言語である。このようなことは、ラテン語、古代ギリシャ語、スラブ語、アイルランド語ウエールズ語では見られないことである。

このように、予言は成就している。小さなベドウィン族は大いなる国民となり、良かれ悪しかれ、あらゆる場面で大きな働きをしている。無神論国際協会の創始者でこの運動の大指導者、エバン・イアロスラブスキーさえユダヤ人であった。

予言は続けて言う。「あなたは祝福された者になるだろう。」共産主義によって祝福されたと考える者は、それを新マルクスに負っている。資本主義によって祝福されたと考える者は、

このシステムを造り出すことに貢献したユダヤ人にそれを負っている。キリスト教によって祝福されている者は、それをひとりのユダヤ人、イエスに負っている。

聖書は、また、同じ章で言っている。「わたしは、あなた方が祝福する者を祝福し、呪う者を呪うだろう。」（創世記十二13）歴史がユダヤ人の友を好遇したことは、まぎれもない事実である。スペインがユダヤ人を遂ほいした時、太陽は全く沈んだ。帝政ロシアがユダヤ人を迫害して、その報いを受けた。ナチドイツも同じことをした。ユダヤ人に自由を与えた国は、彼ら自身も自由を享受している。

アブラハムの時代からずっと後に、ユダヤは国民の間に散らされるだろうと予言された。今日、三つの散らされている民族がある。ジプシー、アルメニア人、ユダヤ人がそれである。しかし、その中で、ユダヤ人がもっとも広く散らされている。ユダヤ人のいない国はまれである。

イエスはエルサレムの破壊を予言した。それは紀元七〇年に起こった。予言者ホセヤは予言した。（九17）「彼らは聞き従わないのでわが神はこれを捨てられる。彼らはもろもろの国民のうちに、さすらい人となる。」そして、彼らはそのようになった。申命記二八38には、こう書いてある。「あなたは主があなたを追いやられるもろもろの民の中で驚きとなり、ことわざとなり、笑い草となるであろう。」そして、彼らはそのようになった。〝きたないユダヤ人〟というのがばかにする時の一般的なことばである。

しかし、ユダヤ人がパレスチナに帰還することも予言された。そして、このことが、私たちの目の前で起こった。疲れ切った聖書の民は、再び、その祖国を持っている。

聖書は繰り返し、ユダヤ人は神によってえらばれた特別の民であると言っている。―そして、事実彼らはその通りである。

ほかの民族の起源は伝説や神話に包まれている。ロシアの先祖はだれであるかを言うことのできる人がいるだろうか。ドイツやトルコの先祖についてはどうだろうか。ユダヤ人の先祖はだれかと尋ねるならば、どのユダヤ人もためらわずに、〝アブラハム〟と答えるだろう。

ユダヤ人は、聖書の記録の信頼性に対するあかしとして独特である。各国民の間に離散しているということで独特である。同様に、彼らの発展は独特である。ユダヤ人は世界の人口の一パーセント半に過ぎない。それなのに、彼らの苦難は不釣り合いに大きい。彼らの救済、彼らの祖国への帰還も同様である。彼らは、彼らの全歴史が予言されているということで、独特である。神はモーセをとおして言った。「わたしはあなたがたを国々の間に散らし、つるぎを抜

いて、あなたがたの後を追うであろう。あなたがたの地は荒れ果てあなたがたの町々は荒地となるであろう」（レビ二六33）「そして、主はあなたがたを国々に散らされるであろう。そして主があなたがたを追いやられる国民のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないのであろう。」

のちに、他の予言者が、イスラエルの散らされた民が集められることを予言した。「わたしはあなたがたを諸国民の中から導き出し万国から集めて、あなたがたの国に行かせる。」（エゼキエル三六24）

ユダヤは、全世界に散らされていた時、分散されて残されていたのは、独特である。ユダヤ人が発見されるところがどこであれ、彼はユダヤ人である。彼はユダヤのロシア人ではない。ロシアのユダヤ人である。ユダヤ人はいつまでもユダヤ人である。彼らは、中央集権も、世界的規模の政府も持っていないのに、そうしている。

彼らは独特の苦難を通過させられながら滅亡させられることのできなかった唯一の国民である。エジプトのパロ王、アッシリヤの王たち、ローマの皇帝、十字軍、宗教裁判、またナチ党は、彼らに対して、国外追放、流刑、捕囚、財産没収、拷問、大量虐殺を用いた。これらのことは、まな、他国民の場合だったら、彼らを絶望させたであろう。しかし、ユダヤは生き残っている。

神はイスラエルの見捨てられた者たちを集め、ユダヤの散らされた者たちを地の四隅から集めると約束した。このことは、エルサレム滅亡後、ユダヤの離散前約八〇〇年、キリスト以前約七〇〇年に生きていたイザヤによって語られた。彼は、いかにして、ユダヤが散らされたのち、全世界から集められることを知ったのだろうか。

イスラエルに帰還したユダヤ人で宗教的な人はごくまれである。彼らの大部分は聖書や予言者を全く知らない。彼らのこと先に知っていた予言者たちを信じる人の数はごく限られている。それにもかかわらず、彼らは帰還する。―それは、無意識の衝動と言うことができるかもしれない。ちょうど渡り鳥が冬の帰還、南に渡るのと同じである。―あるいは、他の言葉に置き換えれば、神の力が御自身の言葉の成就のために彼らを動かしている。

ユダヤのパレスチナ帰還に関するもう一つの重要な予言の中で、彼らは二つの方法で帰るだろうと言われている。（エレミヤ一六14～16）

神は彼らを〝すなどる〟〝漁師たち〟を遣わすだろう。そして、シオニスト運動は、彼ら自身の民族の故郷という餌で、多くのユダヤ人を〝すなどった〟。

同じ節で、また、神はユダヤ人を〝狩り出す〟多くの〝猟師〟を遣わすだろうと言っている。全世界の反ユダヤ主義、特に、ヒットラー支配下のそれは、ユダヤ人を〝狩り出し〟て、彼らをパレスチナに向かわしめた。

ユダヤに関するもう一つの驚くべき予言は、イスラエルの民の残りの終わりの時に、彼らがキリストに帰ると言っている。これも、また、予定のとおりに成就される。

私は、前のところでユダヤ人のアインシュタインは、ナザレのイエスの賛美者であったと書いた。

有名なユダヤの詩人、フランス・ウエルフェルは、有名なキリスト教の本、〝ベルナデットの歌〟を書いた。偉大なユダヤの小説家ショロム・アッシュはクリスチャンになって、有名な〝ナザレのイエス〟という本を書いた。偉大なユダヤ人の哲学者マルチン・ブーバーは、イエスを、〝わが偉大なる兄弟〟と呼んだ。ヘンリ・ペルグソンは、彼のクリスチャンの信仰を告白した。偉大なる物理学者ネイルズ・ボアはユダヤ人クリスチャンになった。成層圏に最初に行った人、オウギュスト・ピッカードもそうだった。目を転じて、共産主義者は予言をしたが、それらはことごとく成就していないのを見てみよう。エンゲルスは一八八八年十月十日、ソージに宛てた手紙で、カナダは十年以内にアメリカに合併されるだろうと予言した。一世紀経った今でも、そおような微候は全くない。

フルシチョフ同志は、一九五八年に予言して、ロシアは五年以内にアメリカ合衆国の経済水準に追い付き、それを超えると言った。現在、いまだに、ソビエト連邦はアメリカから小麦を輸入している。神によって特別に賦与された人でなければ、未来を予言することはできない。

私たちの無神論の友人は、共産主義国家は永遠に固い絆で結ばれると言った。ところが、今、私たちは、ソ連共産党が中国、ユーゴスラビア、またルーマニアと争っているのを見る。信頼できる予言は、神の言葉によって裏打ちされた、愛の霊の独占的な特権である。

最後の時の予言

〝無神論学習書〟は次の言葉で予言を片づけている。「数多くの聖書の予言は、予言されたことが起こったあとでだけ作られたものである。それぞれのテキストは、事件後、すなわち、それぞれの出来事の完成後に書き上げられたものである。」

さて、私たちの無神論の友人たちは、歴史上のイスラエルの勝利ニュールンベルグのヒットラーのブラウン・ハウスにシオニストの旗がひるがえったこと、またユダヤ国家の復興など、

これらすべての二十世紀の出来事が、最近になって聖書の中に書き加えられたものだと信じることを、本当に期待しているのだろうか。キリスト以前の日付を持つ死海写本は、予言の大いなる時代をあかししてはいないだろうか。新約聖書は、元素は大いなる熱で溶けるだろうという漁師ペテロの予言を含んでいないだろうか。これは、核破壊を予言したものではなかろうか。

世界戦争の可能性は、三千年前にはなかった。大陸間の交渉は極く原始的な規模のものを除いてはなかったからである。

しかし、キリスト前約六〇〇年に生きたエレミヤは、世界戦争を予言した。彼は、アメリカやオーストラリアや、日本が存在するとは知らなかったが、「全地の民の剣……悪が国民から国民に及び……殺される者が地の果てから果てにまで及ぶだろう。」と書いた。（エレミヤ二五27〜33）その予言は二千六百年後の成就した。いく千万という人々が日本からロシアへフランスへと広がっていった戦争で殺された。その戦争で、アメリカ人や、中国人や、ドイツ人や、ユダヤ人がみな死んだ。そして、これらのことは、次の世界の大災害の前兆である。

イエスは終わりの日について語った。「その後、世の初めから今日まで、そしてこれからもないような大患難があるであろう。」そしてそのとおりになっている。人類の歴史において、ナチのガス室でなされたような大患難は他に例のないことであった。また、スターリンや毛沢東による大量虐殺も同じである。

キリストが、「これらの日は近づいている。その日にはだれも救われる者がないだろう」と語った時には、すべての肉なる者のいのちをおびやかすような破壊手段は存在しなかった。人々は、弓や槍を持っていた。だれも、人類を全滅させることができなかった。今は、全世界を一度に破壊することのできる兵器が作られている。

しかし、なぜ、そのようなことまで予言されているのだろうか。共産主義自体、予言の成就である。それは、聖書に予言された大いなる反キリストのようである。「それは、聖徒たちと戦争をして彼らに勝利することが彼に許された。すべての血縁、言語、国民を支配する権威を彼は与えられた。」

ほかの預言者は、共産主義のものと思われる勢力のことを書いている。彼は、彼らは地獄のように彼らの望みを拡大し、死のようになり、すべての国民を彼ら自身のもとに集めて、すべての国民を彼ら自身に跪かせるまで満足することがないと言っている。

私たちクリスチャンは、これらの野望が理不尽なものであることを知っている。スターリンは、彼の意志を十億の人々に押しつけて天才として喝来を浴びた時、幸せだっただろうか。彼の妻は自殺した。彼は彼自身の家族を投獄した。彼はだれにも信頼を置いていなかった。彼のもっとも身近な同志さえもそうだった。彼の側近たちは、彼が犯罪人という汚名を着せされて死ぬのを待った。フルシチョフは、スターリンは、かつて、「わたしは自分自身をさえも信頼しない」と言ったと言っている。

無神論の共産主義は幸福になるための秘密を知らない

ここに、重い病気にかかったひとりの金持ちの話がある。彼は、だれか幸せな人の上衣を着ればなおると言われた。そこで彼は奴隷に命じて、幸せな人を探しに行かせた。そして、どんなに高くてもよいから彼の上衣を買ってくるようにと言った。しかし、奴隷は幸せな人を見つけることができなかった。すべての人が、他人の幸せを羨んでいた。また、彼が持っているよりももっと多くの幸せを切望していた。また、到底達し得ない望みのために疲れ果てていた。あちこちと探し回ったあげく、彼らはとうとう、一糸もまとわない裸のきこりに出会った。彼は嬉しそうに歌を歌いながら、きつい労働をしていた。彼らは彼に尋ねた。「幸せですか。」彼の答えは「何の不足もない。」だった。それで、彼は、きこりの上衣を買おうとして、たくさんのお金を出した。しかし、残念な事に、彼は丸裸であった。

幸せは世界を征服することにあるのではなくて、神と一つになることにあるのである。私たちの共産主義の友人たちは、この秘密を知らない。それ故、彼らは巨大な野望を持っているが、決して満足することがなく、彼らが達成できると言明しているユートピアからはいつも遠いところにいるのである。

私たちの無神論の友人たちは、しばしば、ソビエト連邦における彼らの目標の達成の遅れを説明する。私たちは、その通りであると思う。彼らは成功するだろう。彼らが道を準備しているのは反キリストであって、彼は必ずや世界支配を達成するだろう。共産主義は、歴史において、わずかの期間は勝利を納めるだろう。

しかし、終りに、イエスが再臨する。彼の足は、イスラエルのオリーブ山の頂に立つであろう。聖書は言う。「すべての目が彼を見る。」このことは、また、伝道者ヨハネがこのことを書いた時には理解しがたいことに思われたにちがいない。スペインや、北アフリカにいる人が、どのようにして、イエスがオリーブ山から昇天するのを見ることができただろうか。そし

て、どのようにして、彼らは再び同じように彼らが天から下っているくるのを見ることができるのだろうか。

さよう。テレビジョンが聖書の予言の事実を証明している。全世界が、人々がそこにいたように、オリンピックの試合を見た。全世界は、イエスの再臨を見るだろう。

そして、その後、イエスの名の前にすべてのひざがひざまずき、天上のものも、地上のものも、地下のものも、そしてあらゆる使徒がキリストは主であると告白して、父なる神の栄光に帰するであろう。

イエスの地上再臨の後に、すべての権威がイエス・キリストの手に渡されて、祝福の日が来るだろう。そして、彼の支配が完全に行き渡り、私たちのあわれな星から、その罪と、その悲しみが全部拭い去られるであろう。

その時が来る前に、私たちは、まず、恐ろしい破局を通過しなければならない。災いが近づいているという兆しがあるのに、多くの平和会議が開催され、軍縮の話し合いがなされることも、聖書に預言されているところである。「人々が『平和だ。完全だ。』と言っているそのような時に、突如として滅びが彼らに襲い掛かる。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決して出来ない。」（ーテサロニケ五3）

使徒パウロがこの予言を書いた時は、人々は世界を一拳に壊滅する手段を持っていなかった。それは、剣や槍ではできないことである。今では、人々は核兵器を持っている。

予言は、これらの時代に、非常に重要になっている。イエスは予言して、〝異邦人の時が満ちるまで〟異邦人がエルサレムを支配するだろうと言った。一九六七年にユダヤがエルサレムとパレスチナの全土を支配したという事は、異邦人の時―すなわち、異邦人（非ユダヤ人）がキリストの教会に参加して、すべてが救われる時が近づいているという最初の印であるに違いない。人々がキリストを信じて、時のある間に彼に帰るべきことは、緊急のことである。ちょうどこの時期に、〝無神論学習書〟が予言の有効性と存在に対して疑いをばらまこうとしているのは、悪魔のたくらみである。

そのたくらみにおいて、この本は、それ自体、聖書の予言の悲劇的な成就である。「十字架の言葉は、滅び行く者には愚かである……。」

私たちの無神論の敵たちは、しばしば、彼らの問題を探して、正教会をおとずれる。ときどき、彼らが静かに祈りを捧げている時、その場所の神聖さに圧倒されることがある。

そこで、彼らはロシアの古い賛美歌、処女マリア賛美を聞く。「ハイル、マリア。めぐみの充満。神なんじと共にいます。」もしも彼らが聖書の予言を知っていたならば、彼らは伝道者ルカが、マリアがイエスを宿した時のマリアの歌「すべての代は私を祝福された者と呼ぶだろう」という言葉を記録していたことに思い至るであろう。

全世界はイエスがイスラエルのオリーブ山から昇天したと同じ有様で彼が天から降ってくるのを見るだろう。

クリスチャンは、決して予言を疑わない。なぜなら、彼ら自身と彼らの生活に多くの予言が当てはまるのを見ているからである。私たちがクリスチャンになる時、それがずっと前から予言されていたことに気が付く、キリスト・イエスに属する世界の創造の前から神が私たちを選んでいたことを、私たちは聖書の中で読む。なんと遠い過去に、この予言はさかのぼることだろう。

次に、私たちは予言された未来を知る。「来るべき時に、神はキリスト・イエスをとおして、私たちに向けられる彼の慈悲において、彼のめぐみの大いなる富を示してくださる。」かくして、私たちは、人生の意味が何であるか、また、神の良いものが私たちのために貯えられていることを知る。

誰が神を造ったか

神は存在する。私たちは神との交わりを持つことができる。神は予言者たちを通して、また、御子イエス・キリストを通して御自身を頭わされた。

自然は饗宴のようである。そこにはバナナがあり、トマトがあり、小麦がある。しかし、料理のない饗宴はあり得ない。同じように、創造主のない世界はあり得ない。これこそ、神の存在のための最善の議論である。

しかし、私たちの敵たちは、ほかの質問をもって答える権利を有する。もしすべてのものが原因を持っていなければならず、あなたが原因を神と呼ぶならば、神もまた原因を持っていなければならない。誰が彼を創造したのか。このような質問は冒涜であると言って答えを避ける

のは言い逃れであるかもしれない。その質問は理にかなったものと思う。私自身、子供の時、同じ質問をした。

すべての質量は絶えず運動している。それは、一瞬先のものと全く同じではない。そこには、常に、変化を造り出した原因がある。物質のある状態が結果を生み出し、それが今度は新しい変化の原因となる。物質は最初の原因なしには考えられない。

しかし、時間の中の存在が存在の唯一の携帯ではない。そこには時間のないものもまた存在する。そこでは先のものもまければ後のものもない。原因もなければ結果もない。これは神の領域である。神はすべてのものを創造した。神は自己存在の領域に属する。だれも　神を創造しなかった。

どちらが最初か、にわとりか卵か。これは古くからの疑問である。卵というなら、だれがそれを産んだのか。にわとりというならそれはどこから来たのか。もしあなたが、最初の質問が次の三つの仮説を持っていることに気が付かないならば、結論に到達することなしに、何千年も、この両刀論法を議論することができる。

① にわとりが存在する。
② 卵が存在する。
③ 〝最初〟と〝最後〟がある。

〝最初〟と〝最後〟は私たちの思考の範ちゅう、私たちの感受性のための形式、たえざる運動の中にある物質の継続的な場面を私たちが理解する手段である。しかし、時間は、それが計られる運動から分離しては存在しない。時間は具体的な存在、物体や現象から独立した存在ではない。これはアインシュタインの相対性原理の初歩である。運動のエネルギーが運動を造り出し、時間の観念を生み出す。潜在エネルギーの巨大な領域についてはどうか。それは休眠している。滞在エネルギーだけの世界を創造してみよ。そこには運動というものは全く存在しないだろう。それは時間のない宇宙である。無時間は、また、聖霊の分野、神の領域である。私たちは彼を永遠と呼ぶ。永遠とは終りのない時間ではなくて、無時間である。

上述の意味を例証してみよう。二千光年のかなたにある惑星に、私たちよりももっと進んだ動物がいて、彼らは私たちの地球だけではなくて、住民の様子も見ることができるとする。

こ　れらの超動物が、今日、ベツレヘムを見るとする。彼らは何を見るだろうか。イエス・キリストの誕生である。彼らは羊飼いたち、博士たち、マリア、御子を見るだろう。―これらの

人たちから出た光がこの遠くの惑星に届くまでに二千年かかるからである。私たちにとって、キリストの誕生は過去のことである。彼らにとっては、今日の出来事のように思われる。

このような超動物が三千五百光年かなたの惑星にいると仮定する。彼らはパレスチナの国境に向かって進む、モーセに率いられたイスラエルの子たちを見るだろう。彼らは、救い主が生まれるという知らせを聞いて踊りあがるイスラエルの人たちを見るだろう。彼らにとって、イエスの誕生は未来の出来事である。

一つの同じ出来事が、地球から見るならば過去であり、ある星から見るならば現在であり、他の星から見るならば未来ので出来事である。霊にとっては、三つの星で起こっていることを同時に理解し、すべての人の心を読むことができるとはいかなることであろうか。そこには、過去も、現在も、未来もない。

「にわとりが先か、卵が先か」という疑問は解決される。先も後もない。この問題は、過去、あるいは現在、下人、あるいは結果のない領域では意味を持たない。「神を創造したのは誰か」という問題は提出することができない。先はない。

私たちの〝現在〟は、原子の中の出来事にとって何ら価値がないと同様に、宇宙的な現象にとって何ら価値がない。私たちが観察によって、この瞬間に、星の像として捕えているものは、大昔に消えてしまった星からの光線である。そして反粒子のオメガマイナス・パロンは一五〇億分の一秒しか生きていない。私たちは、それが消えてしばらくしてから、その足跡を観察するだけである。

アインシュタインは書いてはいる。「それぞれの時間の機構、あるいは座標系は、独自の時間を持っている。」そして、「時間が告げられる物体が特定されなければ出来事の時間を告げることは意味をなさない」永遠の霊にとって、時間は存在しない。ここでは、すべてのものが相互関係になり、一体となっている。神は一つである。彼によって造られたすべての実体は、一つの重力圏である。私たちがオメガ・ポイントに到達すると、時間によって測られた継続的な興奮は、祝福された黙想に、再びの絶頂感と愛の歓喜に変わる。

修道院長に森に使いに出されたひとりの修道僧の話がある。そこで、彼はほんの数秒間、パラダイスから鳥の声を聞いた。彼が修道院に帰って来た時、門番は彼を知らないと言った。修道院長はじめ他の修道僧たちは、みな、見知らぬ人であった。だれも彼を知らなかった。そうこうしているうちに、だれかが、何百年も前に森に出かけたひとりの修道僧がそのまま行方不明になったという記録が修道院に残っているのを思い出した。彼にとっては、ほんの数秒経過

しただけだった。彼はパラダイスの音楽の得も言えない美しさに捕らえられていたのだった。他の物たちにとっては、その間、何百年も経過したのだった。

この中世の物語りは、今日、所謂ランゲバンの逆説と言われる厳密な科学的事実となった。二つの望の間を汽車が通過する間に経過する時間は、汽車の中に乗っている観察者にとっては、線路のそばで動かずに観察している人の場合よりも短い。前者にとって、時間は、より短い。時間が、彼にとって、より短いだけでなく、汽車の中にあるすべてのもの、遅れる彼の時計にとっても、より短い。

光速に近い速度で飛びロケットを考えてみよう。宇宙飛行士の心臓の行動を記録する乗員たちは、それが遅くなったことに気が付くだろう。同じことが、宇宙飛行士の体内の運動にも起こるだろう。それでも、宇宙飛行士自身は、何も変わったことはないと思っているかも知れない。

ランゲバンの不変の計算によれば、高速の二万分の一の速度で地球を離れ、彼自身の時間で一年間旅をし、同じ速度で地球に戻ってくるとすると、（すなわち、彼自身の時計で計った出発後二年）私たちのカレンダーでは二百年後にその人は帰還することになるだろう。その宇宙飛行士が三十才だった出発の日に生まれた彼の娘のひ孫は、彼自身は三十二才なのに、百才になっているだろう。

このようなロケットは、たわいのないおとぎばなしではない。光の速度など、ものの数ではないものが存在する。それは、霊のロケットである。わずか数秒間に、星雲から私のおばあさんまで飛んで行く。そこから、またパラダイスへ、パラダイスから同じ廊下つづきの牢獄へ、そこからまた遠い星へと飛んで行く。それから、私はアダムとアベルと親しく交わる。しかし、私は直ぐに彼らを離れて未来の千年王国の時代を通過し、また、自分の牢舎に戻って来て、ちょうど差し出された食事を取る。霊は空間や時間に束縛されない。死は時間の中で起こる。私は生まれた。私は成長した。私は死ぬだろう。私は甦るだろう。無時間の世界では、物事は連続的には起こらない。そこには、私の人格の過ぎ去ったものを残す場所がない。

私が与えられた方向に、同じ速度で、汽車で旅をするとする。私は、町や村が私の近くを過ぎ去る印象を持つ。私は、窓から終わりのない田圃風景の流れとして、それらを見ることができる。しかし実のことを言うと、それらの田圃風景は、同時に、一緒に存在しているのである。私にとってだけ、それらは連続して現れる。映画で、私は、何人かの人たちの、生まれてから死ぬまでの複雑な生活を見る。しかし、映写技士の収納箱の中のリールには、それらの出

来事が全部一緒に存在している。私にとってだけ、それらは、時間の中で継続的に起こっている。

私たちは重量の制約になれている。最初の宇宙飛行士が無重量の状態でも生活できることを認めたのは、全くの発見であった。私たちは時間の中に生きている。その中で、物事は生起し、消滅する。それ故、私たちは、死と消滅を信じている。しかし、無時間の領域が存在する。同様に、神の領域が存在する。同様に、神の領域が存在する。彼は、すべての創造の創られざる著者である。彼の中で私たちは、永遠から永遠まで、生きて、存在して、活動する私たちが時間の中にある時、私たちはそれが継続した出来事から成っているかのように、現実を生きる。しかし、時間の概念を霊に当てはめることは、核物理学にそれを当てはめるのと同じく愚かなことである。

相対性原理によれば、光速度ではすべての時計が止まる。それ故聖書において、神が〝光〟と呼ばれ、クリスチャンが〝世の光〟と言われているのは、理にかなってはいないだろうか。

死後の生命

マルクスは生命とは何であるかを知らない。ロシア・アカデミー会員オバリンは、「生命は物質の運動の形態の一つである」と言っている。このような定義をもって青年は何をすべきか。彼はマルクス主義者の父親にタス寝ている。「いかにして私は生命を信じるべきか。いかにして私は生命を最善に用いることができるか。」しかし、彼の父は、多分、彼に答えることができない。なぜなら、本質的な、変えることのできない法則をもった物質の運動の形態の一つがいかに振る舞うべきかと、彼は実際に尋ねたのだからである。クリスチャンの答えは、もっともっと強力である。「生命とは、あなたが彼の友情を受け入れ、あなたが彼の模範に従うことのできるイエス・キリストという人格である。生命は永遠の恩恵である。その地上の生涯は、他人のために、パラダイスにおけるその永遠の余波のためにーそれに比べると、地上は控えの間である—創造主とその栄光の楽しみに、惜しむことなく用いられる。」

生命とは何かをしらないマルクスは、死が何であるかを知らない。それ故、死は、宗教の慰めも希望もない恐怖である。不幸な者に対して言うべき言葉は、継ぎのような冷たい慰めである。「さよう。人は死ぬ。そして永遠に失望する。しかし、社会主義は前進する。そして間もなく、われわれは月の上を歩くだろう。」

彼自身の不幸に際して、マルクスはラッサリーに次のような手紙を書いた。「私のむすこの死が私をひどく混乱させた。そして、それはつい昨日の出来事であったかのような、激しい心の痛みを私は覚える。そして、私のあわれな妻は、全く打ちのめされてしまっている。」

私たちは彼の感情に同情する。彼は、死に対するクリスチャンの勝利について知らなかった。

ソビエトのクリスチャン、タラントフは、信仰のために獄中で死んだ。彼の長男が信仰の戦いを引き継いだ。彼もまた獄中で死んだ。次男が戦いに立ち上がった。今また、彼も獄死した。彼らは死を恐れなかった。

クリブニコフは、彼の信仰の戦いのために、ソビエトで銃殺された。彼の娘アイダは、父の運命にひるまず、父の後を継いだ。彼女はまだ若い。彼女はキリストに対する信仰を告白をしたために、これまで四度投獄された。

無神論者にとって、死は、目の前にぶらさがっているデモクレスの剣のようなものだ。まもなく、すべての喜び—悲しみも!—消え失せることを彼らに思わしめる。

死は、それが何たるかを知っている者には恐れを抱かせない。

イエスは言った。「生きてわたしを信じる者はだれでも、決して死ぬことはない」彼はこの言葉を、彼を信じた者の墓のそばで語った。イエスは正しく証明した。生と死は、時間という観点から生命の実体を理解する私たちの方便である。クリスチャンは死を恐れる必要がない。

ロシア革命の時、秘密警察の大いなる恐怖の下で、クリスチャンの一群が海に投げ込まれるように命令された。彼らの一人が叫んだ。「われわれは神のもとに行くのだ。陸であろうと海であろうとどこから言っても同じことだ。」彼らは恐れなかった。

〝無神論学習書〟は、墓から先の生命に対する考えを、〝宗教教理の基礎〟で〝非常に危険〟と言っている。

しかし、死後のない生命とはどんなものだろうか。

共産主義の理想が成就すると仮定しよう。私たちは完全な社会を持つだろう。貧富の差がなく、戦争や革命がない。福祉と文化と幸福をみんなが共有する。しかし、人々はそれでも死ななければならない。貧しい者は死に易い。失うべき多くのものがない。幸福な人間にとって、死は破局である。レーニングラード地区の共産党書記長であったキロフは、スターリンによっ

て暗殺された人だが、彼は権力の座にいた。彼は人生を楽しんだ。彼の最後の言葉はこうだった。「わたしは生きたい。生きたい。生きたい。」スターリンが彼を殺さなかったとしても、彼は数年後に自然死しただろう。そして彼の悲しみの言葉は同じものだったにちがいない。

私たちは、みな、死ななければならない。この決断は私たちにかかっていない。死後に何もないとしたら、もっとも美しい人生は、死刑執行前の囚人に振る舞われるごちそうよりももっと意味のないものである。山海の珍味を食べた後、彼は首を括られる。彼は理想社会を生きるかも知れないが、結局は朽ち果てて、すべての人に永遠に忘れられるものとなるだろう。

がん病棟に行って、死ぬばかりの人とその家族を次の言葉で慰めよ。「われわれは幸福な共産社会を建設中である。」あるいは、「科学は偉大なことを達成する。われわれは既に月にまで行った。われわれは火星にまで行くだろう。」そこには、多くの慰めない。しかし、死につつある者に、そして遺族に、天の父と彼と共に永遠に生きるクリスチャンの希望について語ってみよ。そうすれば、その違いがわかるだろう。

もしも無神論者が正しくて、死後の生命がないとするならば、「すべてわれわれの明日は、無味乾燥な死への道を愚者に指し示す」そして「人生は、部隊の上を行きつ戻りつし、その後は何も聞くものとてないあわれな役者に過ぎない。それは愚者のたわごとで騒々しいばかりでなんの意味もない。」（シェイクスピア）

しかし、人生は死後も続く。永遠と善悪に対する豪州の思想は、人間の心に深く刻まれている。

クリスチャンが自己を犠牲にするのは、彼らが永遠の生命を信じているからである。しかし、なぜ共産主義者は彼らの生命を犠牲にするのだろうか。共産主義者は、皇帝の牢獄で、彼らのマルクス主義の信仰のために死んだ。共産党の誰一人として、彼らを思い出す者がいない。共産党の若い世代は、彼らの名前さえ知らない。彼らは忘れられている。共産主義者もまた、今日、ある日共産国の牢獄で死ぬ。なぜ彼らは、彼らの生命を捧げるのか。クリスチャンは永遠の報酬を信じている。しかし、どんな思いが、無神論者に彼らの生命を捨てさせるのか。理想が成就したかどうか確かめることもできずに、また彼の美しさを楽しむこともできずに、生命を犠牲にすることができるのか。共産主義のもとでは、人生は資本主義のもとにおけると同様、死を境に、〝うじ虫の召集〟（シェクスピア）の時に完全に終わるだろう。共産主義者は、理性が到達できない彼らの魂の深みにおいて、墓は終わりではない、そして何か大い

なる善のために彼らのすべてを捧げた者は報酬を受けるということを知らなかったならば、彼らの生命を犠牲にすることは、決してないだろう。

すべての現代科学は、エネルギー不滅の法則に基づいている。何も失われない。これはラボイザーによって展開された理論である。（この法則は、原子内部でだけは厳密に適応されない）。

人間は異なる形のエネルギーの束である。エネルギーは、物質、熱、電気、霊的エネルギーに凝縮されている。死に際して、エネルギーのこれら、それぞれの形にどんなことが起こるだろうか。原子内に凝縮されたエネルギーは失われない。肉体は腐ちる。そして、その原子は新しい結合に入る。肉体の熱は失われない。炉が冷たくなるのは、その熱が周囲の空気に吸収されたからである。極く微少で、計測されないほどながらば、私たちのからだが冷たい姿態となる時私たちの周囲の温度が上がるの電気エネルギーの一般的な集まりの中にはいる。意志の力、考えたり、感じたりする能力である霊的エネルギーは、死に際してどうなるだろうか。このエネルギーは、死に際して、エネルギーの一団と低い形、すなわち、幾何的なものに変化するだろうか。もしそうなら、私たちは、以前に高く飛び上がったことを、もう一度、死後にすることができるかもしれない。それはばかげたことである。いや！、霊的なエネルギは死後もそのままである。そうでなければ、ラボイザーの法則はくずれる。私の霊は、霊的エネルギーの一般的な集まりに再び帰る。それは、永遠の霊、すなわち、神に帰る。

私たちの霊がこの出来事―永遠の霊なる神に帰ること―のために備えられているとするならばそれが、その領域における徳目―愛、真理、信仰、希望、平和、柔和、謙遜―を培養しているとするならば、それは、それ自身の要素となるであろう。未来の生活は、希望されることの喜びのパラダイスである。私たちの霊が、全く準備されていない、罪と、決して成願されない欲望の充足を求める心で満ちている領域に入るならば、その生活は非常に不幸せなものになるだろう。それは地獄である。

見えないながら、水蒸気が空中に立ち上っているように、生命は息を吐き出している。しかし、水蒸気はなくならない。霊も同様である。使徒ヤコブは書いている。「生命とは何か。しばしの間現れては消える水蒸気のようなものである。」しかし、それは、無の中に消えて行くものではない。地上の命は過ぎ去る。しかし、それは、無になるのではない。毛虫はさなぎになる。さなぎは蝶になる。死者は私たちの司会から消え失せる。それは、彼らがもはや存在しないことを意味するものではない。

私たちが胎児と話しをすることができて、それに、母の胎内で導かれている生命は一時的なものだと告げたとしよう。真の生命が、胎児の知らざる状態において、胎児の未だ見ぬ別の世界に続いている。胎児は、それが科学アカデミーの会員のような知性を持っているならば、〝無神論学習書〟のように答えて言うだろう。「そんな宗教的な迷信で私を困らせないでください。胎内の生活が私の知っている唯一のものである。そして他にはない。それは、貪欲な宗教家の全くの発明だ！」

しかし、この胎児が、私たちの科学アカデミー会員よりももっと大きな識別力を持っていると仮定しよう。それはひとりごとを言うだろう。目が頭の中で大きくなるだろう。どうしてだろう。何も見るものがないのに。足が成長する。歩く場所もないのに。どうしてそれらは成長するのだろう。そして、どうして腕や手が成長するのだろう。私はそれらを駒にかかえていなければならに。それらは私と私の母を困らせる光と色彩と私の目が見るための多くの者に取り囲まれた次なる生命がなかえれば胎内における私のすべての成長は意味がない。私がやがて過ごすこのもう一つの世界は、大きくて、変化に富んだものにちがいない。私はそこで走りまわるだろう。それ故、私の足は成長するのである。それは、仕事と戦いの生活であろう。それ故、ここでは何の役にも立たない腕や拳が成長するのである。彼自身の成長について考えて、胎児は、もう一つの世界のことは何一つ経験することなしに、そのことについての知識に導かれていくにちがいない。

このことは、私たちの置かれている状況についても言える。キリストの教会は、こう教えている。

この世の生活も、胎児のような性格を持っており、来るべき真の生活の準備にすぎない。いかにして、私たちはそのことを知るだろうか。神が（あるいは、議論のために、事前が、と言ってもよい）この世の生活のためにのみ私たちを創造したとするならば、私たちは、まず最初に、老人の知恵と経験を与えられてから、次に青年の活力を与えられてたにちがいない。そうすれば、私たちは、いかに生きるべきか知っただろう。しかし、事実は、私たちが活力ある青年男女の時には知恵に欠けている。そして年月を無為に過ごす。私たちが知恵と経験を積んだ時には、霊柩車が戸口で待っている。それなのに、なぜ私たちは知恵を蓄えるのであろうか。さよう。どうして、胎児の目や、足や、手が成長するのだろうか。次に来ることのためである。この世の生活における私たちの成長は、未来のそれを指摘する。

肉体と霊は分離しているだけでなく、矛盾した成長をする。私たちが年をとるにつれて、私たちの肉体は衰え、そして、私たちの霊は豊かになる。霊と肉体は二人の旅人のようである。

一人は山を登りつつあり、他は、下りつつある。彼らは反対の方向に旅している。肉体が谷底に到着して、それが朽ちる時、霊がそれと一緒に朽ち果てると、私たちに信じさせる理論が何かあるだろうか。そうではなくて、険しい坂を上り詰めたあと、天空に舞い上がるだろう。毛沢東が、彼の妻の霊は死んで天空に舞い上がったと言っている通りである。（毛沢東の詩〝不死〟参照）

私は一冊の本もなしに、長い年月、独房で過ごした。私は、あらゆる場面を創造して時を過ごした。私はソビエト共和国の大統領になった。イギリスの王になった。法王になった。大金持ちになった。大金持ちになった。乞食になった。私は、このようなすべての場面を想像することができた。それらは想像かのうなことである。なぜなら、それらは生命の可能性だからである。生命は豊かである。それは一兵卒からフランス皇帝を作り出すことができた。また、この皇帝を、孤島の囚人にすることができた。貧しい人たちが大金持ちになった。金持ちが貧乏人になった。飲んだくれの靴屋の息子で、グラジア人で、若い時に神学生であったスターリンは、ソビエト連邦だけでなく共産圏全体の独裁者になった。彼の死後間もなく、彼の名は歴史から抹殺された。すべてこのようなことが、人生においては可能である。それ故に、想像することもできるわけである。しかし、私は死後のことについて想像しようとしたが成功しなかった。なぜなら、死は生命の可能性の一つではないからである。

死について想像することは非常にむずかしいので、あえてそうしようとしても、人は葬式場の棺の中に横たわる彼自身を想像するくらいしかできない。あなたが棺の中にあなた自身を見るという事実は、あなたは死者でないことを示す。死者は彼自身を見ることが出来ない。死が想像できないということは、人間の生命の永遠性の議論の余地がないということである。

重要なことは、永遠は無限の時間と同一ではないということである。無限の時間というのは、期間の否定である。無限の時間は存在しない。永遠は無時間である。

私たちは、夢の生活の可能性の中に、このことをわずかに見ることができる。その中で、心の働きは、ときどき、非常な速さで成し遂げられる。通常は長い時間を要する行為の連続が、夢の間の瞬間に、私たちの心を通過する。空間の関係もなくなる。私たちは遠い距離を瞬間に横切ることができる。私たちは、夢の中では、空間と時間によって束縛されることがない。そして、夢の生活を深く考えることによって、私たちは、私たちが目覚めている時に私たちを虜にする空間と時間の壁が、私たちが、〝現実〟と呼びなれている限られた領域を超えた生命のもう一つの資質を、私たちから隠していることに気が付く。

人間の肉体は、それが完全に満足するのに、そんなにたくさんのものを必要としない。食物、着物、住居、休息、ある年代には異性の伴侶。それなのに、資本家や、ソビエトの上流階級はこれらのものをすべて十分に持っているのに、ときどき、憂鬱になり、不満の心を抱くのはなぜだろうか。信仰のために獄につながれている人々は、上、寒さに震え、鎖につながれ、長い年月、彼の愛する者たちと引き離されているのに、喜びでいっぱいになることができるのはなぜだろうか。肉体がすべてのよいものを持っているのにがっくりして、苦しみを通過しながら喜ぶことが出来ると言う不思議な実体は何だろうか。それは肉体以上の別のものである。それは魂である。

それは、私たちの地上の生活の間、肉体から独立はしているが、それと共存していることを示す。それは肉体から独立しているので自殺を決心することができる。魂は、心理上の理由から、それ自身の肉体を殺す決心することができる。肉体の死は、この強固な意志を持った、独立した実体の死を同時に意味すると信じるべき理由は何もない。

聖書の列王記下（二五16）に、奇妙な表現がある。そこで、ソロモン王が王の官のために作ったいろいろなものを数えあげている。その一覧表は次の言葉で結んである。「これらすべての器具の青銅は重さがなかった。」（英訳）

青銅に重さがないのだろうか。羽毛にさえ重さがある。私たちは空間の物体を考える時だけ、重さを考える。空間にある聖堂や、羽毛にはそれぞれ重さがある。概念化された青銅には重さがない。

スコラ哲学は、物体の本質とその出来事と分けて考えたことで正しかった。パンの本質は、それが食物のために供給される粉から作られた物体であるということである。この本質は、重さを持たない。パンはさまざまな出来事を持つことができる。それは、まさしくパンであったり、小麦パンであったり、新鮮な、あるいは古いパンであったり、小さい、あるいは大きいパンのかたまりであったりすることができる。重さは、それにつれて変化するだろう。重量、色彩、大きさは、出来事によって定められる。本質は、これらをなにも持たない。パンは私たちの霊においては概念である。そこではそれは重さがない。それが空間の形態を取るまで無重量である。同じように、青銅は、ある一定の大きさと形を持たない限り、無重量である。

ソロモン王は霊的な宮を造ったのである。主の栄光のために、彼の心の中に造ったものを持ち去ることができるバビロンの兵士は、だれひとりいなかったのである。一九六八年九月一日、ソビエト連邦で、一つの法事が施行された。それは、もしも両親が子供たちにキリスト教

信仰を教えるならば、子供たちは両親のもとから取り上げられ、無神論の寄宿学校に収容されるというものである。クリスチャンの両親たちはこの圧迫に耐えている。スロボダ家から三人の子供が取り上げられた。マロゼムロウ家から七人が取り上げられた。だれが、霊的な考えをもった人から子供たちを引き離すことができようか。

〝子供〟という実在がある。そして、出来事がある。後者は変化する。私の子供は胎児であった。初めに、それは動物のものと非常によく似ていた。それから、赤ん坊になり、それから、人形遊びをする少女になる。今、彼女は学校に行っている。私は子供を抱くことができる。それは遠く離れていることもある。それは従順な子供でもあるし、あるいは言うことを聞かない子供であってもよい。出来事は変化し得る。母親の関係／実在の領域に属する子供。私たちは出来事の世界で、共産主義者が子供たちに何をするかを恐れない。母親の関係／決して変化しない子供。

同じことが生命にも適用される。死によって滅ぼされる生命があるだろうか。

私は豊かな生活をした。また、貧しい生活をした。幸せな生活をした。また悲しい生活をした。自由な生活をした。また囚われの生活をした。健康な生活をした。また病気の生活をした。もし私が、生命の形態の一つをもって自らを定義するとするならば、生命の特定の形態が終わる時、私の生命は終わることになる。ある人にとっては、もはやぜいたくができなくなる時、生命の価値を失う。

しかし、私たちクリスチャンは実在において生きている。

イエスは言う。「私は道であり、真理であり、いのちである。」〝である（英語の de 動詞）〟はイエスが話した言語であるヘブル語では使わない。それは、ちょうどロシア語と同じである。彼は言った。「私―道、真理、生命」彼は、抽象的概念で自己定義している。

自然は、かしの木、松、りんごの木などだけを知っている。〝木〟とは、私の心の中に形成された一つの抽象である。あなたは世界の中の木をことごとく破壊することができる。概念の〝木〟は、このような破局によって害われることがない。

自然には、グリゴリエフとか、イワノフとか、ゲラシモフとか、ロシア人、ウクレイナ人、アメリカ人、貧乏人、金持ち、女、男などの実際の人間だけがいる。実際には、自分中心の生活か、それとも犠牲的な生活がある。活動的な生活があるかと思えば、沈思黙考の生活もある。

イエスは、生命の一つの種類で自己定義さず、〝生命〟という抽象的概念をもって、あらゆる可能性を含んでいる生命をもって自己定義している。彼は、私たちに、同じようにせよと教えている。私は、六十五年前に生まれて、いずれは死んでいく私自身の名前で私の生命を定義しない。私は生命である。それは、いつも神の中に存在してきたものであり、アダムとエバによって人間の生命の形態をとったものであり、決して終わることのない生命である。神の子としての私の生命は、滅びることがないものである。

私の肉体は、私の〝私〟ではない。ある意味で、私はたくさんの肉体を持っている。胎児のそれ、赤ん坊のそれ、幼児のそれ、青年のそれである。聖ペテロは書いている。「わたしはこの幕屋の中にいる。」彼は、ある場面における肉体を考えている。私はいくつかの幕屋に生きてきた。しかし、私と、私がしばしの間をその中で生活した住居とは、明確に違う。

イエスはゲッセマネの園で言っている。「わたしの魂はとても苦しんでいる。」彼の言い回しに注意せよ!彼は魂について話している。そして、魂を観察し、それが悲しんでいることを任天する魂の持主について話している。私は私の魂のある状態とも同一ではない。それは、私が私への肉体ある状態と同一でないのと同様である。

私は、肉体において苦しむか、さもなくば、魂において苦しむ。私は、私が苦しむのを知ることを十分知っている。私が〝実際の私〟と考えるものに対して起こるすべてのことを観察する私の中で何が最終的な実体であるのか。彼は、〝私は今健康である〟あるいは、〝私は今死んでいる〟ことを知っている。これらのすべての変化を認識し、観察しているのは誰であろうか。彼自身は変化しない。彼は一つの生命ではなくて、生命そのものである。内にいます神の子、決して死ぬことのないお方である。

イエスは言った。「わたしは真理である。」真理は消滅することができるだろうか。私が、彼のように真理によって、あらゆる真理、真理全体によって自己定義するならば、私を破壊することができる人がいるだろうか。2＋2＝4は、私が囚われの身であろうと、自由の身であろうと、自明の理である。私は真理と一つになる。それは外面の出来事と関係ない。

もしも私がキリストと一つになるならば、もしも私が〝わたしは道であり、真理であり、いのちである〟という言葉を私自身のために取るならば、私は永遠に生きるものとなるであろう。

生命の階段の最も下等なものは単細胞生物である。それらは分裂によって増える。一つが二つになり、二つが四つになる。そして、今では無数のアメーバがいる。しかし、最初のアメー

バは死んだのだろうかそれは存在の形態を変えたのである。一つの膜の中に閉じこもっているかわりに、無限に増殖したのである。毎日、多くのアメーバが死ぬ。しかし、それらは、みな、最初のアメーバの一部に過ぎない。最初のアメーバは、このようにして、それらの中に生きている。無死が、生物の段階の最初のところで。すでに表れている。それなのに、私たちは、最高生物が、単に、地上を過ぎ去ると考えるだけでよいものだろうか。

私たちは、レオナルド・ダ・ビンチの絵やミケランジェロの彫刻を、細心の注意を払って大事に保存している。それならば、創造主は、これらの作品を制作した芸術家たちを、少なくとも同じ注意ブウ傘で保存していないといえるだろうか。

永遠の生命を損じする。そして悔い改めざるヒットラーは、彼が殺した無実の子供たちと同じ場所で、快適に過ごすことはできない。正しい者には天国が、そして不義なる者には地獄がなければならない。

無神論者は、彼らが決して死なない者のように、悪をなして生きている。彼らが、無神論の教育によって多くの人たちを間違って指導したことを、最後の瞬間に、自ら悔い改めないとは言い切れないのではなかろうか。

キリスト教の偉大な敵であった人たちの最後の言葉から、彼らは学ばなければならない。トレランド。「わたしは、呪われた者の苦しみを苦しんでいる。」ミラビアウ。「永遠のことを考えなくても済む麻薬をください。」ポルテール。「わたしは神と人とに捨てられる。わたしは地獄に行くだろう。おお、キリストよ。おお、イエス・キリストよ。」フランスの王、チャールズ九世。「血塗られた、殺人の、悪魔の会議に、私は参加した。私は失われる。私にはそのことがよく分かる。」トム・ペイン。「私が世俗を持っているならば、〝理性の時代〟（反キリスト教著作）が出版されなかったならば、わたしは世俗を返してしまいたい。キリストよ。助けた前、みそばにおらしめたまえ。ひとり取り残されるのは地獄だ。」

私は、〝無神論学習書〟の著者たちが言いたいと思ったように、永遠の生命をばかにするのではなくて、少なくとも、それを証明したいと考えた。彼らが笑うのは自由だと考えるのは、彼らが出版を独占しているからである。

最も困難な手術を討議する医者の国際学術会議があった。ドイツ人がそれは脳手術だと言った。フランス人は、心臓手術だと言った。私たちのソビエト代表は、扁桃腺除去手術だと言った。みんな大笑いをした。しかし、彼は言った。

「あながたは私の主張をばかげていると考えている。あなたがたは忘れているが、革命以後、われわれは頭蓋骨に穴をあけて、脳から扁桃腺を取り出さなければならなくなったのである。なぜなら、われわれは口を開くことを禁じられているからだ。」

私は、共産党政府の許可なしに口を開いた。クリスチャンが口を開くと、彼らが正しいことが分かる。

科学と宗教

共産党秘密警察は、無実の人から虚偽の罪の告白をむりやり取り出す能力のあることで知られている。このような、犯罪者の多くがフルシチョフのもとで復権した。しかし、方法は変わっていない。多くのクリスチャンが儀式殺人を告白したとしてソビエトの刑務所に入れらている。そのようなばかげた罪状でクリスチャンが罪に服しているのは、世界広しと言えども、ロシアだけである。

ロシア秘密警察によって拷問された囚人の中には、ひとりの共産党員の科学者がいる。なぐられ、焼きごてで焼かれ、あるいは何か他の方法で拷問されて、科学者の名を持ったこの囚人は、世間を驚かせる告白をした。それが〝無神論学習書〟に再録されている。少しばかり、次に引用しよう。

「科学は、超自然な力は存在しないことを不変の方法で証明した。」（私たち、あわれな無学な愚か者は、化学は存在する物だけを証明することができると信じていた。）「科学は、生命が宇宙に広く散在していることを証明している。……理性をもった生物が生存している惑星の数は無限である。……人間が住むことの出来る世界がたくさんあるということについての科学的命題は、キリスト教の本質である瞋いの教義に致命的な一撃を与える。……奇跡が存在しないことは、完全に証明された」等々である。

私たちは、くだらない、この全体の項目を捨てなければならない。ほかの項目を見てみよう。

科学と宗教との間には両立しがたい対立があるということが〝無神論学習書〟とは自明の理となっている。どの科学とどの宗教の間のことか、両方とも、継続的に発展しつつある存在である。

宗教は、もはや、五〇〇年前のものではない。一〇〇年前のものでさえない。

当初、クリスチャンたちは、彼らの世代にイエスが再臨するに違いないと信じていた。彼らは、世界は平らであると信じていた。地球は宇宙の中心にあり、神がその上に鎮座していまして、それほど遠くない所から、彼の本来の仕事として、地上の出来事をつかさどっていると信じていた。クリスチャンは、今では、もうそのようには考えない。

神が啓示したものは永遠である。人間がこの啓示について考えたことは移り変わる。

しかし、科学もまた、変化する。今日の中学生は、もはや、ユークリッドや、ガリレオや、ニュートンの科学を絶対なものとは考えない。

私たちの敵たちは、古いごまかしの手を使う。彼らの現代科学と原始宗教とを比較する。キリスト後一〇〇〇年の科学と、三千五〇〇年前のユダヤ人の宗教の概念とを比較する。その頃のユダヤ人はやっと長い捕囚時代から解放されたばかりで、文盲で、今日のジプシーよりも文化的水準の低い状態にあった。これでは、いんちきである。それは、ちょうど、ソビエト連邦の経済上の優位性を証明するために今日のソビエトと、開拓時代前の、そこにインデアンだけしか住んでいなかった頃のアメリカとを比較するようなものだ。

今日の科学は、今日の最高の宗教思想と比較されるべきである。そうすれば、私たちは、対立よりむしろ、一致を見るであろう。

そして、それが、まさにあるべき姿である。もう一度、ここでアインシュタインの言葉を引用しよう。「たいていの人は、優れた科学者を造るのは知性であると言うが、それは間違いである。それは人格である。」さて、人格とは、科学的なものではなくて、宗教的、道徳的価値である。だれでも正直や高潔に基づいた人格を持つことなしには、真の科学者たり得ない。これらは、キリスト教が教えている価値である。

科学でしか持っていない人は科学者として信頼できない。彼は誠実でなければならない。彼は、実験室で発見するものを信じなければならない。彼は希望を持たなければならない。なぜなら、そうでなくては、彼の時間を研究にささげようと思わないだろう。彼は熱心でなければならない。そうでなければ、際限もなく、実験室で時間を費やさないだろう。彼は、物理の理を単純に受け入れらるだけ謙遜でなければならない。目的は一つでなければならない。なぜならば、あちこち気が散るようであれば、彼は結局何も発見できないであろう。科学者は、同じ研究室の仲間たちと協働できなければならない。忍耐が要求される。キューリー夫人は、わずか数ミリグラムのラジュームを抽出するために、ハトンのウラウン鉱を精練した。判断がなければならない。しかも正しい判断でなければならない。彼は、いささかも誇張することなし

に、発見したことを正確に世に告げなければならない。彼は、また賢明で、自ら芸西を払い、人類のためにならないことを隠さなければならない。科学者に過ぎない人は科学者ではない。彼は、まず、何をさて置いても、無神論ではなくて宗教が人類に与える道徳的価値を受け入れなくてはならない。

スターリンは宣言した。「科学は人類の救世主である」このことを、彼はちょうど核時代の夜明けに言明した。科学は、一瞬のうちに破壊する道具と、人類をひとり残らず消し去ることのできる武器を作り出した。このことは、すべて、科学の殿堂が構築される価値を、ある科学者たちが受け入れなかったからである。科学は宗教に厳密につながっていなければならない。そうでなければ、私たちが幸福を達成するための助けにはならないだろう。科学と宗教との間にこのような厳密な協働がないので、現代の大発見の時代の前よりも、今日のほうが、平和において、人類は確信が少ない状態にいる。

このような言い方は奇妙に聞こえるかもしれないが、無神論さえ、道徳的価値なしには存在できない。

〝無神論学習書〟には次のように書いている。「無神論の概念では、世界に存在するものは、運動している、永遠の、そして不変の物質以外にない。」もしも、物質以外の何ものも存在しないとするならば、すべてのものは物質であると主張する唯物哲学も、また物質でなければならない。「物質以外のものは存在しない。」それならば、無神論の確信もまた、物質である。私の敵たちは無神論を愛し、宗教を憎む。彼らの愛や憎しみは物質であろうか。彼らは理想のために戦う。彼らは理想のために書く。精神的な価値の存在を否定しながらもそうする。彼ら自身はそのような価値の上に生活している。もっとも、彼らはそれらを曲解していはいるけれども。

彼らはさらにこう書いている。「弁証法的唯物論の真理は、科学と実践のデータすべてによって確かめられている。一方、哲学的観念論および宗教の正当性は、いかなるものによっても証明されない。」

そのようなわけで、科学と実践のデータは、すべて、私たちが単なる物質であると確信している！私が論ぱくする本の著者たちもまた、単なる物質に過ぎない。物質は、ほかのたくさんの物質に確信を抱かせようとして問題を起こすものだろうか。私の敵たちは物質の集合である。私も同じだ。どうして彼らは私を説得しようとして、座り込むのか。

無神論者は、非常にしばしば彼らの理論よりも優れた存在である。無神論の兵士たちは、戦中、彼らの同志のいのちを救うために死んだ。木製の机の善のために死ぬばかがいるだろうか。一枚の紙の幸せのために喜びを捨てる者がいるだろうか。彼らの同志のためにいのちを捧げる、あるいは宗教的迷信から他の人々を解放するために彼らの夜の時間を犠牲にする無神論者たちは、彼らの心の深みでは、彼らと彼らの同志が単なる物質であるとは信じていない。同じように、科学は宗教なしには働くことができない。そのようなわけで、無神論と無神論者は、その基本的な価値の何かを尊重することなしには存在できない。

ある科学者たちが宗教と対決しているのは事実である。しかし、科学は進展するものであることを彼らは知っているだろうか。宗教の進化を予見することも、また、困難である。

科学者と宗教の間の対決は和解できないと信じるべき理由は何もない。そして、もしもそうならば科学と宗教は、外見上は一致できないかもしれないが、両方とも事実であるかもしれない。ちょうど、光についての二つの理論のようである。一つの理論は、光は粒子であると言い、他の理論は、光は波動であると言う。二つの理論とも実験の結果、正しいことが証明されている。すべての真理は、私たちの心の中で統合されなければならない誤りである。私たちは有限な存在であって、部分的な真理しか知ることができないからである。

精密な測定の結果、ふたりの科学者がそれぞれ違う結論に到達することは、別に恐れるべきことではない。それならば、一方で科学者が、他方で宗教者が、まったく別の仮説をもって初めて、それぞれ異なる結果に達することは、悩みの種になるべきことではない。ロード・レイレイとウィリアム・ラムゼイ今日の場合は、有名である。彼らは、二人とも、それぞれ違う方法で窒素元素を発見した。しかし、いつも、原子の重量の間に、わずかな相違があった。彼らは、それぞれ異なる結果を主張した。彼らはそれらを調和させようとはしなかった。彼らは、不一致のために、なんら大きな悲劇を見なかった。遂に、この二つの結果の間の対立は、科学にとって有利に証明された。一方の窒素はアルゴンという、それまで未発見の元素であることがわかったのである。

私たちは、宗教と科学の間の争いを少しも恐れるべきでない。私たちは、私たちの心の中に、現実のすべてを受け入れる余裕がある。私たちは、この争いに、次のイエスの言葉を当てはめようと思う。「二つとも、刈り入れの時までそのままにして置きなさい。」私たちは、二つの相対立する意見に自由を与えたいと思う。

これは、みな、仮説である。なぜなら、科学と宗教の間に恐ろしい対立があるという、私たちの敵たちによって発見されたことには誤りがある。たいていの科学者は対立のことなど、何も知らない。

私の敵たちの学問上の程度に十分な敬意を払って言うのであるが彼らは、アインシュタインは彼らよりも、少なくともいくらか、科学を知っていると認めざるを得ないと思う。その証拠に、私たちの宇宙はアインシュタインの名を担っており、それは〝無神論学習書〟の著者たちの名ではない。アインシュタインは、自然を通して自らを表わす更に高い知性について語っている。

多分、みなさんは、偉大なる物理学者マックス・ブランクが彼の科学的自叙伝の中で言っていることを知りたいと思うにちがいない。次に、彼の言葉を引用する。

宗教と自然科学は、共に手を携えて、懐疑主義に対してまた、教条主義に対して、不信仰に対して、また、迷信に対して、絶え間ない、休むことのない戦いをしている。そしてこの戦いの雄叫びは、いままでずっと続いて来たし、これからもずっと続いて、〝神に至る〟であろう。

〝無神論学習書の〟の著者たちは科学者である。それならば、このような偉大な科学者が、科学と宗教の間の対立を何ら認めていなかった事実について、科学的な説明をしなければならない。マックス・ブランクは、科学と宗教の間の矛盾を、〝空想上の問題〟とさえ言っている。

〝無神論学習書〟は、次の大ざっぱな主張をしている。「科学と宗教の間には、終りのない、執念深い戦いが、絶えず繰り広げられている。」彼らは、このことをけっして実証することができないだろう。

私は、アインシュタインとブランクを引用した。他の科学者についてはどうだろうか。彼らは、何か対立を認めていただろうか。

アイザック・ニュートンは別の世紀の人であるが、実用面では、すべて、私たち今なお、ニュートンの宇宙に住んでいる。彼の紙を信じない友人たちをからかうために、彼は、実験室の中に、太陽系の模型を造った。ひとりの未信者が彼に尋ねた。「だれがこれを造ったのか。」

ニュートンは答えた。「だれでもない。」「うそぱっかり。ばかな。」とその未信者は言った。「本当のことを言いなさい。だれがこれを造ったのか。」そこで、ニュートンは答えた。「これは、はるかに雄大なシステムのちっぽけな模型に過ぎない。これは、ほんのおもちゃであるが、設計者と聖尺者がいないと信じがたいであろう。その偉大な原物が、製作者なしに出来上がったと思うと、あなたがたは言うだろうか。どうぞ教えてください。どんな理由で、そんな理屈に合わない結論に達したのですか。」

無神論の教授たちはニュートンが〝自然哲学の数理原則〟という彼の根本的な科学書を完成していることを知っている。その中で〝力ある、知恵ある存在の支配〟について語られており、また、最初の衝撃、すなわち、想像を信じるという表現がなされている。彼らは、そのことを、ニュートンは十八世紀初頭の人だという事実によって説明している。その頃は、人々は、今日知られている原子の、化学の、生物の進化について多くの知識を持っていなかった。また、科学は、まだ、神学と協同していたと説明する。彼らは、また、ニュートンが宗教的であったという事実が彼の科学の邪魔になったと主張する。しかし、それでも二十世紀になって、ニュートンの宇宙がアインシュタインの宇宙になったというなぞは残る。アインシュタインは、原子の発展について、化学の最新の発展について、少なくとも何かを知っていた。そして、若いころは無神論者であった彼が、科学の頂点に達した事実によって、信仰に導かれた。

しかし、アインシュタインは私の敵たちを少しも困らせていないということに、私たちはさっそく注目しなければならない。彼の著書がアインシュタインの宇宙の共産党支配地で禁止されているという事実から利益を得ている。それらの本は、どこの本屋でも売っていない。学会内部においてさえ、それらは図書館の秘密の部屋に保管されている。〝無神論学習書〟の著者たちに関して、チェックできる人はだれもいないので、彼らはアインシュタインは、終始一貫、〝科学と宗教の間の対立〟を強調していたと言うことができるのである。

私の敵たちは、満足して。ラブレイスの名をいう。彼は〝仮説〟としての紙は必要ないといったということで知られている。まず第一に、神は、偉大なソビエトの天文学者チホフが彼の天文学の論文を、われわれは、もはやラブレイスなる仮説上の人物を必要としないという書き出しで始めているという事実によって、論証されている。しかし、このことは全く別に、ラブレイスは信仰を告白しているクリスチャンであった。

〝無神論学習書〟の著者たちは彼らの教養を援護するために、デカルトを誤って引用している。デカルトも、信仰を告白しているクリスチャンであった。彼らは、彼の言葉の意味を曲解して、それらに唯物論的な意味を参加している。彼は、「われに物質と力を与えよ。さすれ

ば、われは宇宙を造らん！」と書いた。この言葉の意味は明白である。宇宙が存在するためには、物質と力と、それを造る知者がなければならない。デカルトの言葉は「われに物質と力を与えよ」である。この〝われ〟なしには、物質と力だけでは宇宙は造れるものではない。偉大なる行為を成し遂げることができるのは、神から出る、この〝われ〟だけである。なぜなら、私たちは創造者として造られたものだからである。彼らが考えもしなかった思想を有名な著者たちにアカデミーの会員たちがかぶせて、それで、知らん顔をしていていいものだろうか。

しかし、これらの昔の人はさて置いて、私たち自身の時代に戻ろう。

偉大なる原子物理学者ハイゼンベルグは〝無神論学者〟を読むことができなかった。なぜなら、彼は、科学と宗教の間の連合のために、檄文を発表したからである。有名な天文学者、ジェームズ・ジーンズは、彼の著書〝神秘な宇宙〟の中で次のように書いている。

宇宙は、偉大な機械に似ているというよりも、偉大な思想に似ていると思われ始めている。心は、もはや、物質の領域における偶然の侵入者とは思われない。私たちが疑いはじめているのは、私たちは、それを、物質の領域における創造主、また、支配者として迎えるべきではないかということである。もちろん、私たちはの個人的な心ではなくて、私たちの個人的な心が原子から成長して思想として存在したという意味での心でもある。…最初に考えたように、私たちは、宇宙において、それほどよそ者でも、侵入者でもない。

ニュートンは、後進時代に属するという不利な立場を持っていた。〝無神論学習書〟が彼の宗教性を説明する仕方はこうである。彼が、著書〝光学〟に、「無形の生きている、知能のある、偏在する、無限の広がりを持った神がいて、物事を繊細に、完全に見て、彼自身に対するそれらの直接の顕現によって、それらを知覚し、それらを全体的に理解するということを、自然現象から確認できないだろうか」と書いたのは、彼の後進的な環境の圧力が唯一の原因であったというのである。しかし、ジェームズ・ジーンズは、私たちの進んだ科学時代の人である。ハイゼンベルグも同様である。

偉大な心理学者ユング教授の言葉を聞いてみよう。彼もまた、私たちの時代の人である。

過去三十年の間に、世界中のあらゆる文明国から人々はやって来て、私に相談を求めた……三十五歳以上の人生のなかばを過ぎた私の患者全員について言えることだが、彼らのとどのつまりの問題が、人生に関する宗教的な見解を見出すという問題でないものは一つもなかった。彼らは一人残らず皆、病気であると言っても過言ではない。なぜなら、彼らは、それぞれの電台にかなった生きてりう宗教が信ずるものに与えられており、そして、宗教的な見解を取り戻

すことなしには、実際、だれひとり癒されるものがいないということを忘れてしまったからである。

それは、ある世紀の精神状態ではない。人を宗教的にするのは、科学である。あらゆる分野における科学である。それ故、ケプラーは数百年前にこう書いた。「われわれは神の思考の跡をたどって考えている。」そして、最近までオックスフォード大学の動物学部の主任であったアリスター・ハーディ興は、次のように書いた。「われわれが神と呼ぶ力は、生命の過程の中に包含されている。」また「生物の世界は物理学や化学と関係が深いように、神学とも深い関係がある。神の要素は、自然過程の一部であり、厳密に言えば、超自然ではなく、自然の法則にかなっているものだと思う。」彼は、また、他の所で、非常に興味あることを言った。「性に関する生物学の知識が恋人を失わせることはないと同じように、科学と自然神学と結び付いた宗教が神との交わりの喜びを破壊する必要はない。この世で失われてしまった大地を取り戻すために、前進しようではないか。」

〝無神論学習書〟がどうしてバートランド・ラッセルを科学者として引用しているのか、私には分からない。私たちは、彼は格別な科学的発見をした人物とは承知していな。彼は、私たちの敵たちの権威者である。しかし、彼の名前を思い出したついでに、彼がキリスト教についてどんなことを書いているか見てみたいと思う。

われわれの時代が必要としている事柄がある。また、避けなければならない事柄がある。われわれの時代は、あわれみを必要としている。……何よりも、勇気ある希望と、それを造り出す力を必要としている。……物事の根本は非常に単純で、時代遅れなものである。それがあまりにも単純なことなので、あざ笑われるのではないか、賢明な皮肉な言葉が浴びせられるのではないかと恐れて、それを口にするのもためらわれる。私が言いたいことは―それを言うのを赦していただきたのだが―愛である。クリスチャンの相、あるいはあわれみである。あなたがそれ感じるのならば、存在の動機、行動の指針、勇気の理由、知的な誠実の厳然たる必要を持つことになる。

さて、ほんとうの科学者たちに話を戻そう。トロント大学の天体物理学の教授、C・チャントは、こう言っている。「天文学者の少なくとも九〇％の人たちがこの宇宙は何か盲目な法則の結果ではなくて、偉大な知性によって規定されているという結論に達していると言っても差し支えない。」残り一〇％の人たちは誰かと言えば、その多くは私たちのソビエトの天文学者たちにであって、彼らは、自分たちの考えていることを自由に発表できない立場にいる。

私たちは繰り返し言うが、〝無神論学習書〟の主張するように、科学と宗教の間に両立し難い争いがあるとするならば、これらの科学者の大部分が、そのことについて何も知らないことになる。

〝無神論学習書〟はサイバネティクス（人口頭脳学）の新しい科学を、反宗教議論として用いる。それによって、彼らは、私たちの心の動きが全部、機械の機能のようなものだと説明する。そのいずれにも精神は認められない。

これらのサイバネティクスの設備が再生され、あるいは、神経現象を模倣するということは、実に驚くべきことである。それらは言語を翻訳し、将棋をさし、人間よりも迅速に思想の問題を解決する。

しかし―そして、これがいとも簡単に無視されている点であるが―人口頭脳機械は心によって造り出されるものである。結論を言えば、それは、心の思考過程の反復に過ぎないのであって、なんら新しいことをなし得るものではない。

人間は十マイルを一時間で走ることが出来る。しかし、彼らはジェット機やミサイルを発明したために、一時間に何千マイルも旅することができるようになった。人間は、ある距離まで見ることのできる目を持っている。しかし、彼らは顕微鏡や望遠鏡を発明して、肉眼では見ることのできないものを見ることができるようになった。人間は、彼らの能力を拡大し、感化を伸ばす道具を造る能力を付与されて創られている。人口頭脳機械は、このカテゴリーに属している。しかし、あらゆる機械の背後には、それを造り出した心がある。

だれが〝無神論の著者〟という機械を造り出したのだろうか。ちょっと間をおいて、彼らのひとりひとりが、何億という脳細胞の配列を持っている事実を深く考えてごらんなさい。創造主をばかにしたいと考える者に、こんなにもたくさんの神経を与える創造主があるだろうか。どの脳細胞も、そのひとつひとつが他の二万五千の神経と連絡できる。可能な連合の数は、二万五千の力に対して、百億とおりの順序があり、その量は、私たちの知っている宇宙にある原子の数よりも、もっと多い。

さらに考えてみよう。無神論者のひとりひとりは、胎内に千マイルの長さの血管を持っていて、脳や機関に血液を供給している。昔からの正しい宗教を打ち負かすことは容易な仕事ではない私たちの敵たちは、そのことに汗を流している。無神論の著者ひとりひとりは、体の表面に百五十万の汗腺を持っている。彼は宗教反対の論文を書きながら呼吸をしている。彼が呼吸できるのは、七千万個の細胞から成る肺を持っているからである。創造主反対の論文を書きな

がら、彼の心臓は正確に脈を打っている。その脈拍は、生涯中に何千何百億を数える。実際、平均寿命で、それは、約六十万トンの血液を送り出している。私の敵たちは、知者と全くかかわりなくそれ自身で存在するこのような巨大な重量を持ち上げる起重機を考えることができるだろうか。

無神論の傑作の著者たちは、このことに関して、神経エネルギーの莫大な量を消費している。さて著者たちのひとりひとりの神経組織は神経細胞三兆から成っておりその外皮には九十億の細胞がある。さらに、彼らは、健康でなければ本を書くことができない。彼らの健康は、血管中の血球によって保障されている。彼らは、また百万の四乗×一三〇個の赤血球を持っている。

疑いもなく、彼らは、ときどき執筆前に思考を刺激するために、散歩をする。雨が降ってきた。しかし、鼻孔には水滴が入らない。なぜなら、鼻孔の先が下向きになっているからである。だれがこのような些細な点まで配慮したのだろうか。

ああ、これらの学者たちが、伝道者ヨハネとして知られる漁師ほどの知恵をさえ持っていたなら！彼は心臓の神秘について考えた。それは規則正しく行動をうち、生命の継続を知らせている。彼は、彼の最良の友であるイエスの胸にもたれて、彼の規則正し心臓の鼓動を聞いた。そして、そのことえ、そこに神がいますことを再確認した。ちょうど、時計の廟を刻む音を聞く者が、時計の製作者がいることを思うのに似ている。

私は、私の存在のすべてをかけて希望する。私たちも、そのことに気が付くように、―神と宇宙の真理が最終的に明らかにされる地獄においてではなくて今そうするように―そうなっては手遅れだ！

サイバネティクスのロボットよりもはるかに素晴らしい彼ら自身の肉体の機構を考えることから切り替えて、長いつり橋を賞賛することにしよう。くもが、庭の小道をこちら側から向こう側まで結ぶのに、まず、最初の吊り橋を考える。しかし、だれが、私たちを驚かせるような技術の知恵をくもに与えたのだろうか。そのような素晴らしい張力のある糸をくもに与えたのはだれだろうか。レオナルド・ダ・ビンチからライト兄弟まで、最初の飛行機を造った人たちは取りから学んだ。

しかし、私の敵たちは、私が彼らを理解していると思っているかもしれない。彼らは科学の名で語る。科学は真理に基づいている。それなのに、彼らは一つの大きな真理の条件を見逃している。それは、自由で、公正な議論である。

ソビエトのアカデミー会員が、アインシュタインやブランクがそうだったように、宗教的な結論に到達したと仮定しよう。彼らは、彼らの確信するところを表明する著書を出版することができるだろうか。確かに、彼らは出来るかもしれない—しかし、秘密にしかできない。しかも刑務所行きの危険を冒してである。私たちは、このような条件のもとで書く著書たちから多くのものを期待できない。すべての人が、英雄や潜在的殉教者ではない。

共産主義国の支配者たちは、客観的真理に対してよりも、彼ら自身の教条に重きを置いている。それ故、唯一合法的な試験、自由な討論のそれに服さない。このようにして、彼らは、科学の名によって、論議する権利から彼らの学者たちを締め出している。

無神論者が保有している出版の独占権を悪用して、宗教が何も発言しなかったことを宗教のせいにするような状態で、科学の名によってかたることのできる人がだれかいるだろうか。

次に、いくつかの例をあげよう。〝無神論学習書〟から無作為に取り出したものである。

「聖書によれば、神は、全部の星、太陽そして月を創造の第四日に創造した。」ここで、私の敵たちは、〝全部の〟という言葉を簡単に付け加えている。この一つの言葉は聖書の文章にはない。聖書はこのことだけを教えている。すなわち、星は神によって創造されたということである。それは〝無神論学習書〟が言うように、新しい星の出現を締め出してはいない。神は、御自身が打ち立てた法則に従ってこの宇宙を創造した。それは他の領域に、新しい人間、新しい植物、新しい思想の出現の可能性を許す法則である。

〝無神論学習書〟からのもう一つの質問。「宗教の説教者は、生命はわれわれの星（地球）の上にだけ神によって創られたというが、科学は、生命の宇宙の中に、非常に広範にちらばっていることを示している。」

いつ、宗教の説教者が、生命はわれわれの星にだけ存在すると言ったのだろうか。いつ、科学は第二の命題を発表したのだろうか。

もう一つの質問。「人間による自然変革、神によって造られた世界は不変であるという定説がなんら根拠のないものであることを明瞭に示している。」神によって造られた世界は不変である。あるいは、人間は自然を変革することができないと主張する宗教の定説にないを言うのだろうか。聖書は、神がアダムをエデンの園において園を管理させ、そこで働かせるようにしたいという物語で始まっている。それは、自然を変革することである。アベルは、すでに動物を飼育する羊飼いであったし、カインは農業をした。人間は自然に影響を与え、それを変えるように造られたのである。

彼らの本の一部に〝あがないの教義の破綻〟という副題の付いた論文がある。その中で、これらの無神論者たちは次のように書いている。「聖職者たちがわれわれを説き伏せようとしているのは、神は遍在であり、神の言葉は、ある一定の所に受肉していると同時に、生物の存在するどんな世界にも、肉体をもって存在している、ということである。そうするとキリストは、無限の数の星の上に、同時に生まれて、苦しみを受けて、死ななければならなかったことになる。」それでは、私の敵たちに言うが、そのようなばかげたことを言った聖職者がひとりでもあるなら、その人の名前をあげてみるがよい。第一に、科学は、何千何億という星に、知的な生物が存在することはまだ確認していない。第二に、教会は、キリストは多くの星の上で死んだとは一度も言ったことがない。

しかし、私たちはこのことをあえて言う必要がない。なぜなら、それから数ページあとで、無神論の著者たちは、彼らが前にでっち上げたこととちょうど正反対のことを言っているからである。そこで、彼らは、神学者よろしく、（だれも彼らをそのように認めはしないが）地球は人類が罪を犯した唯一の場所であると言っている。それ故にこそ、あがないが必要だったのであり、それ故にこそ他の星の他の生物は、信仰にとどまったのである。でっちあげに続くでっちあげ！このような問題に神学者が教義上の答えを出したことは、これまで一度もない！

笑いながら、私は〝無神論学習書〟から、もう一つ引用しよう。「宗教は、われわれの星の地球上の自然の変化だけを認める。なぜなら、それは神から来るものであるが、しかし、地球上の変化の過程における人間の創造的介入は、全く排除されていなるからである。」彼らはこのことによって、宗教は勝概のための水路を造ることを認めないと言おうとしている。いったい、いつ、宗教が水路の建設に反対の声明を出しただろうか。それはどんな宗教だろうか。

よろしい。今度は、私の敵たちが弁明する番である。彼らは、約二〇〇年前のアストラカム州の統治者であったゴリフシン王子を引き合いに出す。彼は二つの川を結ぶ水路の建設に反対した。しかし、私は、州の知事を、宗教の代表者としていちいち記憶していない。

他の引用。「宗教家たちは、なん千年もの間、神の許しなしに人間が空を飛ぶことは許されるべきことではなく、神への冒涜であると主張し、そのような飛行を成就しようとした勇気ある人々を、人間の宇宙旅行について話をしないようにて残虐に迫害し、彼らを根絶しようとした。そして、現在では、これらの宗教原理はことごろく覆された。」

私は謙虚に機構と努めているが、しかし、このようなことは、明らかにうそであると言わざるを得ない。飛行を試みて、そのために消された人の名をあげることのできる人は一人もな

い。アメリカで宇宙飛行士は消されるだろうか。最初のアメリカの宇宙飛行士は神への思考を告白し、それに続く宇宙飛行士たちは、月にまわりの軌道に乗っている時、聖書を朗読した。彼らは帰還した。彼らは歓待された。彼らのひとりだに殺されなかった。どうして学者たちはこのようなうそを書くことができるだろうか。

私は、モスクワ科学アカデミーによって出版された一冊の本からこれらの奇妙な文章を続けて引用してみる。「宗教の伝道者のある者は、至高者（神）は、宇宙の深みに住いを移したと言う。そしてそれだから、宇宙ロケットや人工衛星は天国に到達するのにはるか及ばないと言う。どうして神は他の場所に住いを移す必要があったのだろうか。」いつ、宗教の伝道者がこのようなばかげたことを言ったと言うのだろうか。

しかし、この無神論の著者たちは、いち早く自分たちの言ったことは忘れて、他の議論で私たちに戦いを挑む。「宗教家たちは、特別に、人は神、あるいは彼の霊的なしもべたちを見ることはできない。なぜなら、それらは非物質である、肉体を持っていない、そして、霊の世界に所属するものであって、物質の世界に所属するものではないからと強調する。」これは、まだましな言い方である。しかし、彼らは、神という霊的な存在は、月のように遠くに行ってだけ宇宙飛行士によって見出されるものではないという事実を受け入れていない。彼らは書いている。「非物質も、また、人間の手の届く所にある。」あわれな唯物主義者たち。彼らは、ほんの数ページ先で、物質と運動以外に存在するものは何もないと言ったばかりである。今、彼らは、非物質が存在することと、それが人間の心に受け入れやすいものであることを認めている。それは真実である。彼らは、心を用いて、永遠の霊（神）と彼ら自身の霊を発見しようと思いさえすれば、分かる。

〝無神論学習書〟にあるもう一つの意味のない主張は、宗教の無知を正当化するということである。だれが最初の大学をヨーロッパで始めたのか。それはクリスチャンではなかったか。修道院は、文化の最初の中心ではなかったか。ドイツ語や英語―その他の多くの言語が、聖書によって形付けられたことを否定する人はいないのではないか。

よろしい。私の無神論の友人たちは、どんなことでも主張することができる。彼らは独裁者を再現させ、彼らの敵たちは猿ぐつわをかまされている。

〝無神論学習書〟のもう一つの主張。「宗教は出来事に無関心であると言って人々を非難する。」共産党の秘密警察は全く同じ意見を持っているわけではない。その出先機関は、クリス

チャンは受身ではないということをよく知っている。そして、彼らは、私たちが宗教活動をしたという理由で、私たちを投獄する。

私は、上に述べた引用文だけで十分であると思う。それだけに、賢明な読者をうんざりさせるに十分であろうから、そのような低次元で書かれた本にいちいち反論する必要があるかどうか、自明のことであろう。しかし、それでも、それは反論されなければならない。というのは、この本は多数の言語に翻訳されて、莫大な量が配布されているからである。それは青年たちの心に影響を与える。それは、無知の力によって支配する。

否、科学は宗教に反対を許さない。科学が反対の立場を取ることを許すのは、ある種の反宗教に対してだけである。

私が〝舟〟という言葉を発言したとする。この言葉は、あなたがたの心に、それぞれ違うイメージを作り出すことができる。あなたは、目の前に、ノアの方舟や、大洋を横断するポリネシアの原始的な舟や、アメリカに最初に到達したバイキングの船や、百年前の汽舟や、あるいは、現代の豪華な大西洋連絡船などを思い出すことができる。

私が〝宗教〟あるいは〝神〟と言う時、同じように、この言葉はそれぞれ違うイメージを心に呼び起こす。それぞれの時代のそれぞれの人が、理解力や、感覚、霊的洞察力に従って、別々に神を理解した。彼らは、また、別々に、その啓示を説明した。

ある神の概念は後退している。そして、疑いもなく科学と矛盾している。しかし、そうかと言ってそれがすべての宗教に当てはまるわけではない。また同時に、宗教がすべての科学を受け入れなければならないといういわれもない。なぜなら、科学にも多くの後退があるからである。

科学と宗教は二つの異なる分野に属する。科学は、事物の物質的な局面についてのみ、私たちに告げる。もしも科学者が、接吻とはいかなるものかと尋ねられたとする。彼は答えるだろう。「それは細菌と炭酸ガスの相互交換をともなった二つの唇の接近である。」しかし、接吻は〝それだけ〟ではない。科学的観点から言えば、どの花も、一定の割合で、カリウム、燐、窒素、水を要求する生化学的機構の均衡である。しかし、花を愛する者は、みな、科学者が花について言い尽くしているということについて、異論をとなえるだろう。科学はことの半分に過ぎない。残りの部分は、芸術であり、哲学であり、最後の部分は宗教である。

あなたは原形質の組織としてだけ生命を考える時、それについてほとんど何も知らない。しかし、実は、シェイクスピアから、ディケンズから、ミケランジェロから、ラファエルから、

世界中の偉大な宗教家から、神の代身であるイエス・キリストから、それについて学んで知っている。

血液中にアドレナリンが急激に増加するという言い方で恋人同士の抱擁を説明することは正しいだろうか。そして、これが、その瞬間に起こるすべてを言い当てているという説明は正しいだろうか。

それは非科学的である。それ故、生命と科学に帰することは正しくない。

〝無神論学習書〟の著者たちは事実の実際的側面に対する科学と宗教間の関係に関する神学的考察を除外している。言われるところによると、ルーテルは〝コペルニクスの異端に対して厳重な弾圧〟を要求した。ルーテルがどうしてこのような弾圧を要求したのか謎のままである。ルーテルの著作の中に、このような言葉を探しても見つけることのできる人はいないのではないか。「しかし、カルバンは偉大な科学者セルペタスを焚刑にしなかったか。」私たちの敵たちはは尋ねる。そのとおり。不幸にも、カルバンはセルペタスを焚刑にした。しかし、彼が彼の科学上の発見のために焚刑にされたという〝無神論学習書〟の主張は、単的に言って、真実ではない。彼が死刑にされたのは、間違って宗教の教義を教えたからである。それは五百年前の出来事であった。それは非常に残念なことである。しかし、私たちの敵たちがこのことについてとやかく言うのは、お門違いである。ひとりセルペタスだけでなく、何千何百万という人々が死刑を言い渡され、あるいは、共産党の強制収容所でなぶり殺された。彼自身の同志たちによって後に否定された独裁者の教えではなく、ある政治信条を他人に語ったという理由で、それらの人たちは殺されたのである。

四世紀のわりに、アレクサンドリアの図書館が、クリスチャンの熱狂派によって破壊されたという私たちの敵たちの主張もうそである。もし彼らがそのようなことをしたのであれば、回教徒たちが七世紀になってそれを破壊したが、それができなかったと思われるからである。

もう一つの滑稽な嘘。〝無神論学習書〟がいうところによると、アメリカ合衆国や、イギリスや、オランダなど、このような国々では、天然痘が流行している。それは、聖職者や宗教家が宗教管轄区の予防接種に反対しているからという。これらの国のうちどこかで、天然痘が最初に流行したのはいつだったであろうか。確かに、アメリカ合衆国では予防接種は行われていない。それは疫病が完全に駆逐されてしまったからである。

ああ、そう。カトリック教会の指針は、ある種の本を読むことを禁止しているという質問がある。カトリック教会は、第二バチカン会議で、この指針を廃止した。私たちは、いまだに、

共産主義国で廃止になったと聞いていない。人々は、パステルナークやソルジェニーツィンの本を自由に読みたいと思っている—聖書やその註解書とまではいわなくとも、少なくとも、プラトンや、ニュートンやペルグソンの本くらいは読みたいと思っている。スターリンの本さえ禁書になっている。それらは書店に行っても買うことができない。

〝無神論学習書〟の著者たちが科学と宗教について神学的な発言をしても、調査のしようがない。

機能が組織を造り出すということは、今では、生物学の自明の理である。私たちは光や色を見るために目を持っている。私たちが耳を持っているのは、聞くための音があるからであり、手があるのは持つべきものがあるからである。脳があるのは、考えるべきことがあるからである。信ずるという、信仰を持つという不思議な能力を私たちが持っているのは何のためであろうか。そこには、対応する実体がなければならない。私たちを取り囲むすべてのものが外部の実体と対応しているこの世界では信仰によって理解される〝そこにない〟ものなしに私たちにこの信仰の能力が備わっているのは、理にかなっていることだろうか。私たちが信仰の能力を持っているのは、そこに信ずべき神がいるからである。物質だけが存在するのではなくて、自ら不思議な姿を現わすのでなければ、化学や物理学では説明のできない実体もまた存在する。

科学は宗教を弁護する。

地球は太陽から丁度よい距離のところにあって、そこに生命を可能ならしめる丁度よい速さで軌道を回転している。もしも私たちがもう少し太陽に近かったとするならば、私たちはその火によって燃えてしまうだろう。もしも私たちがもう少し離れているとするならば地球は冷えて、何も成長することができなくなるだろう。もしも地球が太陽のまわりを回転しなければ、季節の変化はないだろう。

たんぱく質は五つの主な元素の結合である。炭素、窒素、硫黄、酸素、たんぱく質の分子一つ一つには、四方ないし五万の原子がある。おおざっぱに言うと、地球上の任意に散在している百の化学元素のうち、わずかこれら五つが、しかもきまった割合で、たんぱく室の分子をつくることができる。このようなことは、偶然起こることだろうか。混ぜ合わせられなければならない物質の量と、偶然にたんぱく質を獲得するために、この仕事を完結するために要する時間の長さは、確率の法則から計算される。スイスの数学者チャールス・キューイがこの計算をした。彼は言う。このようなことが偶然起こる確率は、一対一〇の百六〇乗である。つまり、その意味は、物質が任意に混合される時、一〇の百六〇乗回に一回の割合でたんぱく質の分子

一つが造り出されるということである。混合される物質は、知られている全宇宙の物質よりも大きいはずである。このために必要な時間は、なんと一〇の二千四〇〇乗億年にもなる！

J・レーテス教授が計算したところによると、非常に単純なたんぱく質の鎖の輪は、一〇の五四乗通りの組み合わせがある。偶然はこのような分子をつくることができない。偶然が住宅やピアノの骨組みをつくったためしがない。それらは、どちらも、たんぱく質の分子の一つ一つに比べれば非常に単純であるのに。

私が刑務所にいた時、どろぼうたちが言い争っているのを聞いた。彼らはさいころ遊びをしていた。さいころがあまりにもしばしば六の目を出すので、他のどろぼうたちは、直ぐに、そのさいころには鉛がつめられていて、偶然が働かなくなっているのでないかと疑った。六の目が繰り返し出るということは、普通には起こり得ないことである。単なる偶然が、現在の秩序ある宇宙を私たちに与えたとは思えない。ひとりに哲学者が、無神論の哲学者でさえ、任意な物質の発展の結果であるはずがない。単なる偶然は、無神論の思想家をつくり出すことは決してんないだろう。

一つのたんぱく質分子がつくり出される確率が一対一〇の百六〇乗になるということで、私はひとりの数学者を引き合いにだした。私の無神論の敵たちで、だれか、一対一〇の百六〇乗の確率で当たる宝くじに、一ルーブルをかける人がいるだろうか。それは、ばかげた賭け事に違いない。それは、一ルーブルを捨てるようなものだろう。しかし、彼らは正気を賭ける。彼らは、魂の永遠の宝を賭ける。彼らは、私たちの仮説のくじで当たる確率と同じほど多くの当たりくじのある論理上の真理を賭ける。プリンストン大学の有名な生物学者、エドウィン・コンクリン教授は言った。「偶然に生命がつくり出された確率は、印刷所が爆発して完璧な辞書が出来上がる確率のようなものだ。」

しかし、私たちの議論は、すべて、頑固な無神論者たちには何の役にも立たない。彼らは、ネアンデルタール人やそれに類するほかの人種の頭蓋骨が、神と共にパラダイスに住んでいたというアダムは結局存在しなかったにちがいないということを証明していると思っている。

聖書は非科学的な書き出しで始まっている。私たちの先祖は、動物世界から進化した非常に原始的な人間であった。聖書と科学の間に一致があるかどうかという疑問があるはずがないと、彼らは言う。

今から五〇〇〇年前の地球を発掘して、考古学者がオーストラリア原住民か、あるいはニューギニアの石器時代に生きていた人間の二つか蜜の頭蓋骨を発見したと仮定する。当時の人類学者は、われわれの時代には文明人はいなかったと言えるだろうか。

私は、科学と宗教の問題について、十分語り尽くしたと思う。

真理の名においてかたる権利を要求することから、これら無神論の著者たちを遠ざけているも　のは、彼らの本に見られる疑いの完全な欠如である。

聖書の著者たちは、とても宗教的な人たちであったけれども、けっして、疑いを表明することを差し控えることはしなかった。あなたは、それらを、詩篇に、また、ヨブ記に見る。バプテスマの聖ヨハネさえ、獄にいた時に、イエスがメシヤであるかどうかと疑った。イエス御自身は十字架の上で叫んだ。「わが神、わが神、どうして私を見捨てられたのですか。」

無神論者のための手引書の著者たちは、すべてのことに独断的な言い方をする。彼らは疑うことが許されていない。彼らは、宗教に反対の論文を書くようにと言う共産党に至上命令を果たさなければならないのである。

だれも、完全に宗教的な人はいない。宗教的な人間は、疑いを持っている。同様に、いつも無神論という人もいない。無神論者は信仰の動機を持っている。しかるに聖書の著者、例えばダビデやヨブは、神を冒涜するような思想を持っているのに、私たちの無神論の敵たちは、いつも非常に確信に満ちている。彼らは一部分で全部と思っている。無神論者、そして、無神論者だけ。これは自然ではない。彼らは、彼らが考える全部を表明していない。

彼らは、ハイゼンベルグの有名な不確実性原理を聞いたことがないように見える。

私の無神論の友人諸君。あなたがたの側には政治権力がある。しかし、私たちの側には科学的な真理がある。イエスは科学思想の創始者と考えられる。彼は言った。「行って、あなたがたが見たり聞いたりしたことをヨハネに告げよ。」「私たちは、私たちが知っていることを話す。そして、見たことを証しする。」また「見よ。空の鳥……野のゆりが、どのようにして生長しているか考えよ。」彼は正確な観察を教えている！クリスチャンは、彼が知っていること、聞いたり見たりしたことを話すように教えられている。科学は、これと同じ原理の上に立っている。

基督は人を罪から救う

罪の贖い

〝無神論学習書〟は、ほかのたくさんのことに言及している。しかし、この論文の長さに制限がある。これは冊子にして、共産国に秘密に送り出されなければならない。それで、あまり長く書くことはできない。

しかし、私は、私の敵たちに負い目がある。キリストは、私たちに、悪には善をもって報いるようにと教えた。彼らは私たちの宗教を中傷してきた。宣伝のための無神論の本の著者たちは、他の罪を犯した人たちと同じように間違いなく救われ得る。

私たちは、この恐ろしい罪の実体と共に生活をしている。私は私の罪を持っている。私の敵たちはは彼らの罪を持っている。人道主義的なものであれ、無神論的なものであれ、あるいは宗教的なものであれ、どんな哲学も、あるいは、宗教家たちや、その反対に無神論者たちのどんな思索も、人間を罪から解放するためには何の役にも立たない。このために、神は、力ある有効な業を行なっている。私の敵たちは、聖書から、罪から解放されて、神の子となり、永遠の生命の相続人となる方法を学ぶことができる。

聖パウロは書いている。「キリストは、聖書によれば、私たちの罪のために死んで……葬られ……三日目に蘇った。」（Ⅰコリント十五3、4）

二千年前にパレスチナで死んだキリストが、どうして私の罪を負ってくださったのか、また、その時に彼がなした犠牲によって、どうして私の罪が消滅したのかということについて、完全に理解できる人はだれもいない。しかし、それは、私たちが、電気の、あるいは、重力の、あるいは、私たち自身の生理学的、心理学的過程の性質に、完全な説明を与えることができないのと同じである。私たちは、それから利益を得るために、罪の贖いについての完全な説明を必要としない。キリストが私たちの罪のために死んで、私たちの罪を負ってくださったので、私たちの罪は、もはや私たちに帰せられることはないということを信じるだけで十分である。

キリストは神の化身である。それだけではなく、彼は自らへりくだって、私たちの罪の罰を彼自身の苦しみの中で受けてくださった。聖ペテロは、そのことをを次のように言っている。「あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちるものにはならず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」（Ⅰペテロ一18）そして天においては、キリストを賛美する歌が歌われている。「あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖

い、私たちの紙のために、この人々を主とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」（黙示録五9、10）

キリストが彼の血によって、すべての国民を贖った時に、彼は、共産主義者と無神論者をも贖ったのである。

前にも言った通り、私たちは罪の贖いをすべてを完全に理解することはできない。しかし、私たちは、その一部分を理解することができる。私たちが、キリストは神であること、すなわち無限の価値と権威を持っている人であることを心に留めるならば、その時、（このような言い方はショックであることを私は知っているが、しかし、それでも、あえてこう言うのだが）キリストを殺害したことは、全人類を十字架にかえて殺したよりももっと悪い罪であった。あなたは、イザヤの言葉を黙想するならば、このことをもっとよく理解するだろう。神の前では、〝国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。〟（イザヤ四〇15）

非常に簡単に実例が、私たちが考えていることを示すだろう。私は結核である。それで、私はまた、ほかの多くの細菌や、あらゆる種類の昆虫を殺した。多くの動物が私の食物として殺されてきた。私はそれらのために自責の念にかれれることはない。しかし、私の良心は、私が人に対してなした悪については一つ残らず私を責め立てる。それは、人間は昆虫より高度なものだからである。―人は神の姿に似ている。同じように、神の化身であるキリストは、人間に過ぎない何億という存在よりも、無限の高い価値のあるものである。それ故、彼の十字架の死は、全人類を、そのすべての罪から贖うのに十分であったのである。―ただし、彼が私たちのためになしてくださったことを信じるならば、という条件付きではあるが。彼の人格において、神は苦しみ、神は人々のために死んだ。彼は死ぬべき人間の姿をとったのは、彼にとって最初のことであった。なぜなら、神は不死だからである。

それ故、ペテロは再び書いている。「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。」（Ⅰペテロ三18）そして、聖ヨハネは書いている。「御子イエスの血はすべての罪から私たちを清めます。」（Ⅰヨハネ一7）バプテスマの聖ヨハネは、イエスを指さして言った。「見よ。世の罪を取り除く神の子羊。」（ヨハネ一29）聖パウロは書いている。「キリストの血によって義とせられた私たちは、神の怒りから救われます。」（ローマ五9）〝無神論学習書〟のような冒涜的な本は、なんと神の怒りに触れなければならないことだろう。しかし、私たちは、この怒りから救われることができる。なぜなら、

〝私たちは、（イエス・キリスト）のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているからである。（エペソ一7）

罪の贖いは、一部のクリスチャンたちによって、二千年間黙想されてきた問題である。それは色々な方法で説明されてきた。罪の贖いに関する多くの教義がある。

それらのうち、どれを、私たちは選ぶべきだろうか。

リゼの聖テレサが、クリスチャンの徳の中で、もっとも実践したいと思うのはどれか、と尋ねられた時、「全部！」と答えた。罪の贖いの教義に関して、私は同じことを言いたい。それらは、みな、神を信じる、愛する魂たちの深い黙想の結果である。それらの一つでも無視する理由はない。

キリストが私たちの罪の代価として死んだという代価は真実である。また、彼の態度や、彼の犠牲の美しさをとおして、私たちが新しく、敬虔に生きるように感化を与えるためにキリストは死んだという道徳感化説も真実である。神は自由に罪びとを赦すことができるが、しかし、どんな罪でも罰を受けなければならい。そして私たちがキリストの大いなる苦しみを見る時、私たちは私たちの罪の価いがいかばかりであるかを思うために、神はキリストを苦しめたとする支配説は真実である。キリストとその信者は一つであって、両者は分解できない愛によって結ばれているとする神秘説は真実である。母親が病める子供と共に苦しむように、また、愛する花嫁が、悩みを通過する花婿と共に苦しむように、私たちは、私たちの愛するキリストと共にゴルゴダで苦しんだ、そして、私たちは一つなので、私たちの罪のための罰を、キリストの体で受けた。

しかし、私が思うに、二十世紀の人間にもっとも説得力のある説明は、転嫁説である。私たちは、みな、私たちの真理の中に、転嫁のメカニズムを持っている。私たちに何か欠けたものがあり、どうしてもその埋め合わせができない場合、だれかほかの者、私たちの妻とか、子供とかを、それぞれの場合に応じて置き換えて、私たちの代わりに、その人のせいにして済ます。私たちは、罪をかぶってくれる身代わりを持っている。子供が足代に躓いたとする。子供はお母さんを〝ぶつ〟かわりに怪我をさせた足代をぶって満足する。そして、子供は、直ぐに気を静める。転嫁のメカニズムは、私たちの中に深く根を下ろしている。私たちが、私たちの当面している問題を誰かほかの人に変わって背負ってもらうならば、私たちの心は平安を見出す。その身代わりとなってくれる人は、独裁者であれ、ブルジョアジーであれ、領主であれ、アメリカ人であれ、資本主義者であれ、共産主義者であれ、トロッキストであれ、スターリン

であれ、ユダヤ人であれ、黒人であれ、白人であれ、要するに自分以外の人であればだれでもよいのである。

イエスは、意識的に、この転嫁のメカニズムを用いた。それ故にかれは　人類のところにきて、神の子として自らを捧げた。彼は次のように言っているように思われる。「さて、もしもあなたがたが、あなたがたのの罪をされか他人に転嫁しようとする傾向を持っているとするならば、もっとも正常なことはすれらの罪を私に肩代わりにさせることだ。私は責任を取ることができる。なぜなら、すべてのものは私によって創られたものだからである。私は、いつでも、すべての罪悪を私自身で背負う準備ができている。あなたがたは、あなたがたの罪は当然罰を受けなければならないと考えている。カントは言った。〝罪は罰せられるべき権利を持つ。〟私は、あなたがたの受けるべき罰を受けるだろう。そうすれば、あなたがたは自由になるだろう。」

私は、私の無神論の敵たちに言いたい。彼らは宗教に対して、抽象的な嘘を書いて、非常に多くの魂を傷つけてきた。彼らは、この罪を、彼らが攻撃してきたキリストの方に委ねたらよい。キリストは、全世界の罪を取り去る神の子羊である。それ故、彼は、〝無神論学習書〟の著者たちの罪をも取り去る。キリストを信ぜよ。そうすれば、あなたがたは救われる！

あながたは、無神論の理論で宗教に反対しようとしてきた。これは子供じみたことである。内面の苦しみの前に重要なのは、批評的分析である。無神論の理論は、死にかかっている人や、愛する者を失う家族のために、何の助けにもならない。あながた自身の理論は、あなたがたが疑いの苦悩を通過し、この本を書くことによって恐ろしい罪を犯さなかったかどうかと自問する時、あなたがたにとって、なんら役に立たない。

あなたがたは、今日、そのことを考えないかもしれない。しかし、あなたがたがそのことを考えなければならない日、あなたがたの死の日が来るであろう。

モスクワと、北京と、ワシントンは、世界中でもっとも影響力のある市になろうとして競っている。そのどれも、そうはならないだろう！最大の人口を擁する市、王たちや共和国主義者たち、資本主義者や、共産主義者、スターリン主義者やトロッキスト、無神論者や、収容信者、宗教家やその敵たちが相会する市は、墓場という市である。そして、墓場の向こうの未信者の前に横たわるのは、後悔だけである。

死の直前でさえ、遅すぎることはない。その瞬間に、あなたがたは次のように祈ることができる。「主イエス、神の御子よ、罪びとなるわれをあわれみたまえ！」あなたがたのために、イエス・キリストによって流された血を信じなさい。そうすれば、あなたがたは救われる。

私の親愛なる無神論の友人諸君。私たちはわずかな時間を一緒に過ごしてきた。私たちは、また、別々の道を行く。

聖書の物語りは、ユダヤがエジプトの奴隷だった時のこと、三日間、暗闇が続いたと書いている。エジプト人を取り巻く暗闇は非常に濃かったので、お互いに見分けが付かなかったが、イスラエルの子供たちは、みな、光を楽しんだ。

この光は、神の言葉である。神の民はこの光を持っている。そして、その光は、彼らの心を照らす。

パレスチナがトルコの支配下にあった時、残忍なパシャは（トルコの高官）ユダヤ人が夜、明かりを灯すことを禁じた。町は、完全に暗闇に包まれた。

しかし、サファドで、ラビ・ヨセフ・カロの窓は、夜になると輝いた。ラビは聖書を読んだ。番兵たちが、その出来事をパシャに報告した。彼は直ぐにラビの家にかけつけて、彼の様子を見た……彼は聖書を学んでいた。部屋には全く明かりが灯されていないのに、部屋中が壁から射し込んでくる明かりで輝いていた。壁に蛍がいっぱいに泊まっていた。光の元は蛍だった。

ラビはパシャに説明した。「神の法律は、それを学ぶ人の命を照らすだけではない。それを聞く蛍をも照らすのです。」

私の無神論の敵であるあなたがたの中に幾人かの人や、既に信仰を持っている人々が、この文章を読むだろう。私は断言するが、彼らの心が神の言葉に対するあなたがたの中傷によって暗くされているとしても、彼は光に照らされるだろう。そして、キリストの光である燃える光は、共産主義国全土に、その温かさと美しさを注ぐだろう。

主は共産主義者ををも救う

最後の言葉

命令されたとおりのことしか喋るほかない哀れな無神論者を私たちは理解する。しかし、悪い酒をすすめる宿屋の主人は、その量を少なめにすすめることによって、良心をなだめることができる。

七〇〇ページにもわたる否定、また否定、神と、聖書と、永遠のいのちと、人間性の否定は、熱心に過ぎているように思われる。あなたがたは退屈な本を書いた。それはあなたがたの過ちではない。あなたがたは、もっと良いことをすることができなかったのだ。すべての人は、その心に、神の形の空間を持っている。その空間を神で満たす代わりに、あなたがたは空間の構造と美についての本を書いた。

あなたがたはそれを書かねばならなかった。無神論の本は、ただ無神論のことだけを書いている。しかるに、ルターは言った。「われらの主は、復活の約束を本に書いただけではない。春に芽吹く一枚一枚の木の葉にもそれを書いた。」

しかり。あなたがたの本は退屈だ。しかし、それはまた、宗教書を読んで真理の知識を蓄える自由のない人々にとっては害毒である。あなたがたは、さなぎに向かって、おまえたちの努力はすべて虚しい、おまえたちは決して蝶になることができないと言って混乱さえる人のようだ。あなたがたは、蕾に向かって、おあめたちは決して花にはならないという。あなたがたは、人間の魂に向かって、おまえたちは、この世の人生で、そしてパラダイスで、永遠にキリストに似る者とはならないように運命づけられていると言って、魂を殺している。

私はあなたがたを辱めたいとは思わない。私は、あなたがたの魂が非常に危険な状態にいることに気付いてもらいたいと思っているのだ。あなたがたは殺人者よりも悪い。殺人者は肉体だけを殺す。あなたがたは魂を殺して、彼らが神を喜ぶことができないようにする。

それ故、私は、ソーニヤが殺人者のラスコーリニコフにしたと同じ忠告をあなたがたにする。「起きなさい。今すぐに、この時、行きなさい。そして、決心しなさい。それから、跪きなさい。そして、あなたが汚した大地に、まず最初に口づけしなさい。それから全世界に向かって頭を下げなさい。世界の四方に向かってそうしなさい。そして、世界中の人々に向かって、大声で、『私は殺した。』と言うのです。そうすれば神は、再びあなたに命をくださるでしょう。どうしますか。ねえ、どうしますか。」

私自身、あなたがたの前に頭を下げる。なぜなら、私もまた過去において、魂を殺した者だからである。

あなたがたと同じように、私が自分でソーニヤの忠告に気が付き、それを実行する日まで、私は無神論者であった。今、私はあなたが無神論に固執するならば、あなたを待っている暴力と苦しみの人生に身震いする。私はキリストによって見出され、無神論から、罪から救われた。この道は、あなたがたのためにも開かれている。

どうしますか。ねえ、どうしますか。

Donations to help late Reverend Richard Wurmbrand missionary work may be sent to:

The Richard Wurmbrand Foundation

PO Box 4124 Torrance, CA 90510, USA http://richardwurmbrandfoundation.com

or to: Help For Refugees

PO Box 5161, Torrance, CA 90510, USA http://helpforrefugees.com